

種別	カテゴリ	基本語	基本語読み	解説	同義語	関連語	表記ゆれ	参考資料
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	シベリア	しべりあ	シベリアの地理的範囲には諸説あるが、一般にウラル山脈の東側を指す。バイカル湖、アムール川、ウスリー川などがあり、海港としてウラジオストクを擁する。	止百里／西伯利亞／西伯里／西伯里亜／西比利／西比利亜／西比利亞	シベリア出兵／西比利亜出兵／シベリア撤兵／シベリア鉄道／西伯利亞鉄道／シベリア経済援助部／西比利亜経済援助部／臨時シベリア経済援助委員会／臨時西比利亜経済援助委員会／極東共和国	シベリヤ／サイベリア／サイベリヤ	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	イルクーツク	いるくーつく	東シベリア南部、イルクーツク州の州都。アンガラ川とイルクート川の合流点、バイカル湖の西66キロに位置する。	イルクーツク市／「イ」市／伊爾庫次克	在イルクーツク第三師団／在イルクーツク日本領事館／在イルクーツク日本帝国領事館／在イルクーツク帝国領事官／在イルクーツク領事館／在イルクーツク市日本人居留民会	イルクツク／イルクウスク／イルクウツク／イルクツク／イルクーツク／イルクツツク／イルクツスク／イルクーツスク／イルクツーク／イルクトスク	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	ウエルフネウジンスク	うえるふねうじんすく	中央シベリアの南部、バイカル湖の東方75キロに位置する。シベリア鉄道の沿線にあり、セレンガ川とウダ川の交流点にある河港でもある。	ウランウデ	極東共和国／プリヤートモンゴル自治共和国／プリヤート共和国	ウエルフネシンスク／ウェルスネウシンスク／ウエルフネウジンスク／ウエルフネウヂンスク／ウエルネウヂンスク／ウエルフエウチンスク／ウエルフネウチンスキー／ウエルフネウチンスク／ウエルフネウーシンスク／ウエルフネジンスク／ウエルフネウーヂンスク／ウエルフネーヂンスキー／ウエルブネジンスク／ウエルフ、ネウヂンスク／ウエルフネヂンスク	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	ウラジオストク	うらじおすとく	ロシア連邦南東端、沿海地方の中心都市。日本海に面し、ムラヴィヨフ・アムールスキー半島の南端、金角湾沿岸に位置する。ロシア極東地域最大の港湾都市。清朝が領有していた時代の呼称は海參崴(海參威)。	浦塩／浦塩斯徳／浦潮／浦潮斯徳／浦汐／浦汐斯徳／浦塩ストック／烏拉日阿斯徳／海參崴／海參威	沿海州／浦潮港／烏港／浦潮軍港／金角湾／金角港／浦潮派遣軍／浦汐派遣軍／浦潮派遣聯合軍司令部／浦潮派遣軍兵站參謀／浦潮派遣軍政務部／浦汐派遣軍政務部／浦潮派遣員／浦潮特務機関／陸軍ウラジオストク／シベリア出兵／浦潮港／浦潮軍港／浦潮派遣軍／浦汐派遣軍／黒龍江／ウスリー河／烏蘇里地方／シベリア鉄道	ウラジオストック／ウラシオストック／ウラジホストック／ウラジワストック／ウラシホストック／ウラシホストック／ウラジホストック／ウラシワストック／ウラシワストック／ウラジウオストック／ウラジボストック／ウラジボストック／ウラジワストック／ウラジワストック／ウラジヨス	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	沿海州	えんかいしゅう	ロシアの南東端、日本海に面する地方に位置する。中心都市および主要港湾としてウラジオストクを擁する。	沿海地方／プリモールスキー	ウラジオストク／シベリア出兵／浦潮港／浦潮軍港／浦潮派遣軍／浦汐派遣軍／黒龍江／ウスリー河／烏蘇里地方／シベリア鉄道		
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	ダウリヤ	だうりや	ロシアと満洲の国境地域にあり、シベリア鉄道から分岐して満洲を横断する中東鉄道に繋がる支線沿線に位置する都市。		ザバイカル／後貝加爾／満洲里／海拉尔／ハイラル／セミョーフ／ダウリヤ守備隊／ダウリヤ冬期研究／歩兵第十三旅団司令部	ダウリア／ダヴリア／ダヴリヤ	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	チタ	ちた	シベリア南東部、チタ州の州都。1900年にシベリア鉄道ザバイカル線が敷設された。ロシアと満洲の国境地域に位置し、シベリア鉄道と満洲を横断する中東鉄道の分岐点に近い。	齊多／知多／智多／赤塔／Chita	ザバイカル／後貝加爾州／齊多政府／知多政府／赤塔政府／Government of Chita／駐赤塔滿洲国領事館／在赤塔滿洲国領事／在チタ副領事／チタ会議／シベリア出兵／シベリア鉄道／ヤプロノイ山脈／極東共和国／知多革命委員会		

地名を探す	ロシア(シベリア地方)	ニコライエフスク	にこらいえふすく	シベリア・ハバロフスク地方、アムール河畔の都市。戦前の日本では尼港と称されていた。アムール川下流に位置し、河口から約80キロの距離にある。	尼港	尼港事件／ニコラエフスク事件／ニコラエウスク事件／在尼港帝国領事館／在尼港領事館／在尼港大使館一等書記官／在尼港北部沿海州派遣部隊／在尼港陸軍守備隊／尼港陸軍無線通信所／尼港第五十一野戦郵便局	ニコラエフスク／ニコラエウスク	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	ノボシビルスク	のぼしびるすく	西シベリア中部・ノボシビルスク州の州都。オビ川両岸にまたがる河港都市。			ノヴォシビルスク／ノヴォ・シビルスク／ノヴォシビルスク／ノヴォ・シビルスク	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	ハバロフスク	はばろふすく	アムール川とウスリー川の合流点に位置するロシア極東地方の交通の要衝。	哈府／Khabarovsk	シベリア鉄道／烏蘇里鉄道／哈府居留民引揚損害審査委員会	カバロフスク／ハバロウスク／ハダロウスク／ハダロウスクハダロフスク／ハバロフスク／ハダローフスク／ハバローフスク／ハバロスク／ハバロフクス／ハボロフスク／ハボロスク／ハホロフスク／ハボロフスク／ハバロフスク／ハバロフスク／ハハロフスク／ハバロフカ／ハバロフカ／ハボロフカ／ハプロフカ	
地名を探す	ロシア(シベリア地方)	ブラゴウエスチエンスク	ぶらごうえすちえんすく	ロシア・シベリア地方、アムール州の州都。アムール川沿岸の都市。	武市／「ブ」市／海蘭泡	在武市領事／在武市副領事／在武市領事代理／在武市領事館／在武市日本帝国領事館／在武市日露協会／在武市哥薩克団／在武市市営銀行／武市商品取引所／在武市満洲国領事	ブラゴウエスチエンスク／ブラコウエシチエンスク／ブラコウエチンスク／ブラゴウエシエンスク／ブラゴウエシチエンスク／ブラゴウエスチエンスク／ブラゴウエチエンスク／ブラゴウエシエンスク／ブラゴウエシチエンスク／ブラゴウエスチエンスク／ブラゴウエチエンスク／ブラゴウエシエンスク／ブラゴウエシチエンスク／ブラゴウエスチエンスク／ブラゴウエチエンスク／ブラゴウエシエンスク／ブラゴウエシチエンスク／ブラゴウエスチエンスク／ブラゴウエチエンスク／ブラゴウエシエンスク／ブラゴウエシチエンスク／ブラゴウエスチエンスク／ブラゴウエチエンスク／ブラゴウエシエンスク／ブラゴウエシチエンスク／ヴラゴエシチエンスク／ヴラゴウエスチエンスク	

地名を探す	樺太	樺太	からふと	北海道の北に位置する島。ロシア語名はサハリン。	サガレン／サハリン／奥蝦夷／樺太州／樺太島／薩哈連／薩哈連／北蝦夷	樺太開拓使／樺太千島交換条約／樺太守備隊／樺太民政署／樺太境界劃定／樺太海豹島／樺太庁／樺太庁支庁／樺太開発株式会社／北樺太利権契約／北樺太鉱業会社／北樺太鉱業株式会社／北樺太石油会社／北樺太石油株式会社	唐太／柯太／カラフト	
地名を探す	樺太	コルサコフ	こるさこふ	樺太(サハリン)南部、アニワ湾沿岸の都市。日本統治時代は大泊と呼ばれた。	哥爾薩港／古冊／大泊	コルサコフ湾／コルサコフ港／コルサコフ碇泊場／函館コルサコフ間航路／箱館コルサコフ線／コルサコフ領事館／コルサコフ港帝国領事館／在哥爾薩港領事館／在哥爾薩港帝国領事館	カルサコフ／コロサコフ	
地名を探す	樺太	ウラジミロフカ	うらじみろふか	樺太(サハリン)南部のススヤ川流域の平野部に位置する都市。日本統治時代は豊原ないしは豊榮と呼ばれた。現在の呼称はユジノ・サハリンスク。	豊原／豊榮	豊原守備隊／豊原支庁／豊榮支庁／豊原発電所／樺太庁豊原高等女学校	ウラジミロフスカ／ウラヂミロフカ	
地名を探す	関東州	大連	だいにん	満洲(現在の中国東北地域)、遼東半島の南端に位置し、黄海と渤海に面する港湾都市。清朝期には青泥窪、ロシア統治時代にはダーリニーなどと称された。日本統治期の関東州租借地の中心都市。	青泥窪／大連市／ダーリニー／ダーリニイ／ダーリニー、ウオストツク／ダーリニヲ、ウオストーク／ダーリニー、ワストーク	大連港／関東州庁／大連民政署／満鉄本社／満鉄沙河口工場／大連在勤海軍武官府／大連武官府／大連商業会議所／大連商工会議所／大連華商公議會／小崗子華商公議會		
地名を探す	関東州	旅順	りよじゅん	満洲(現在の中国東北地域)、遼東半島南端の軍港都市。英語名はポート・アーサー。日本統治期は関東州租借地に属した。	ポート・アーサー／旅順口／旅順市	関東州／関東都督府／関東庁／関東州庁／旅順民政署／旅順工科大学／旅順会議／旅順鎮守府／関東都督府陸軍部／関東軍司令部／陸軍航空本廠旅順出張所／陸軍航空本部補給部旅順支部		

地名を探す	満洲	長春	ちょうしゅん	満洲(現在の中国東北地域)、吉林省の中心都市。満洲国期には新京と改称された。満洲国消滅後、再度長春に戻された。	新京／新京特別市	長春附屬地／長春城／寛城子／中東鉄道／吉長鉄道／長春会議／在長春領事館／在長春日本領事館／在長春帝国領事館／在長春総領事館／長春居留民会／長春商業会議所／長春商工会議所／新京商工会議所／新京商工公会／満洲国／関東軍司令部／満洲国駐劄特命全權大使／関東局／首都警察庁	
地名を探す	満洲	ハイラル	はいらる	ロシアと中国の西北部国境地域、フルンボイルの中心都市。ロシアが経営する中東鉄道の駅が置かれた。	海拉爾	海拉爾蒙古政庁／呼倫貝爾／ホロンバイル／満洲里／海拉爾特務機関	ハイラル
地名を探す	満洲	ハルビン	はるびん	満洲(現在の中国東北地域)北部の中心都市。ロシア経営による中東鉄道の中心駅であり、旅順まで同鉄道南部線の起点。	哈爾濱／哈爾濱／哈市／Harbin	東清鉄道／東支鉄道／中東鉄道／在哈爾濱日本帝国総領事館／哈爾濱機関／在哈爾濱特務機関／哈爾濱機関／哈爾濱特務機関／在哈爾濱蘇聯中学校	ハルビン
地名を探す	満洲	奉天	ほうてん	満洲(現在の中国東北地域)最大の都市。清朝期には盛京とも称された。張学良政権期に瀋陽と改称されたが、満洲国期に再び奉天と称された。現在の呼称は瀋陽。	盛京／瀋陽／ムクデン／Mukden／奉天市	奉天附屬地／鉄西工業地区／奉天航空補給廠／奉天省城／奉天商埠地／在奉天総領事館／在奉天日本総領事館／在奉天帝国総領事館／奉天居留民会／奉天日本居留民会／奉天商業会議所／奉天商工会議所／京奉鉄道／北寧鉄道／奉天軍閥／奉天政権／北大營／奉天工廠／奉天兵工廠／奉天紡紗廠／張作霖爆殺事件／張作霖爆死事件／満洲某重大事件／柳条湖事件／満洲事変	
地名を探す	満洲	満洲里	まんしゅうり	満洲(現在の中国東北地域)とロシア・シベリア地方の国境地域、フルンボイルに位置する都市。ロシアが経営する中東鉄道の西の起点。		ハイラル／海拉爾蒙古政庁／東清鉄道／東支鉄道／中東鉄道／シベリア鉄道／満洲里附近赤軍不時着	

地名を探す	中国(内モンゴル)	張家口	ちょうかこう	華北と内モンゴルとの境界、万里の長城の南側に位置する都市。モンゴル語名はカルガン。	カルガン/Kalgan	察哈爾／在張家口領事館／在張家口日本領事館／在張家口総領事館／在張家口日本総領事館／興亜院蒙疆連絡部／在張家口大日本帝国大使館事務所／察南自治政府／蒙疆連合委員会／蒙古連合自治政府		
地名を探す	中国(華南)	廈門	あもい	福建省の南東部に位置する港湾都市。中国語では「Xiamen(シアメン)」と呼ばれる。九龍江河口沿岸部、廈門島及び鼓浪嶼(コロンス島)などから成る。	アモイ/Amoy	福建省／鼓浪嶼／廈門連絡部／在廈門領事館／阿片戦争／南京条約／廈門事件／金門島／澎湖諸島	廈門	
地名を探す	中国(華南)	福州	ふくしゅう	福建省の東北部、閩江下流域に位置する。現在、福建省の省都。福建省は「閩」と略称される。また福州には榕樹が多いことから、古来「榕城」と呼ばれる。		福建省／在福州領事館／阿片戦争／南京条約／福建事変／中華共和国	福州	
地名を探す	中国(華南)	広州	こうしゅう	広東省の南部、珠江デルタに位置する。現在、広東省の省都。広東省は「粵」と略称される。また広州は「穗」と略称され、古来「楚庭」、「五羊城(羊城)」などと呼ばれる。	羊城	広東省／珠江／粵漢線／広九鉄道／在広東領事館／阿片戦争／南京条約／アロー号事件／天津条約	広洲	
地名を探す	中国(華南)	深圳	しんせん	広東省の南部、珠江デルタの東側に位置する。		広東省／珠江		
地名を探す	中国(華南)	海南島	かいなんとう	海南省の大部分を占める、中国第2の大島である。清代は広東省に属し、瓊州府が置かれていた。海南島の北部には海南省の省都である海口があり、南部には三亜(かつて「崖州」と呼ばれた)がある。海南省は「瓊(簡体字で「琼」)」と略称される。	瓊州島／瓊崖/Hainan	広東省／在海口領事館／天津条約／西沙群島／新南群島／陸海外三省連絡会議／海南海軍警備府		
地名を探す	中国(香港・マカオ)	香港	ほんこん	特別行政地区である。香港島、九龍半島、新界及びその他の島から成る。「港」と略称される。	ホンコン/HongKong	九龍／珠江／阿片戦争／南京条約／アロー号事件／天津条約／亜細亜局／東亜局／香港占領地総督部／在香港領事館		
地名を探す	中国(香港・マカオ)	澳門	まかお	特別行政区である。広東省の南部、珠江デルタの西側に位置し、マカオ半島、タイパ島及びコロアネ島から成る。「澳」と略称される。	マカオ／阿馬港／阿媽港／媽港/Macao	珠江／在澳門領事館／亜細亜局／東亜局		
地名を探す	南洋群島	南洋群島	なんようぐんとう	太平洋西部、赤道以北に位置する群島・諸島の総称。元のドイツ領ミクロネシア。日本側は南洋群島と称した。マリアナ群島、カロリン群島及びマーシャル群島から成る。	内南洋／南洋諸島	独逸領南洋諸島／臨時南洋群島防備隊／赤道以北太平洋旧独領諸島委任統治条項／ヤップ島及他ノ赤道以北ノ太平洋委任統治諸島ニ関スル日米条約／南洋庁／南洋群島産業組合令／南洋興発株式会社／南洋拓殖株式会社／マリアナ群島／サイパン島／ガラパン町／テニアン島／ロタ島／カロリン群島／東カロリン群島／西カロリン群島／トラック諸島／夏島／ボナベ島／クサイ島／パラオ諸島／コロール島／アンガウル島／ヤップ島／マーシャル群島／ヤルト島		
地名を探す	南洋群島	アンガウル島	あんがうるとう	パラオ諸島にある島。現在はパラオ共和国に属する。	アンガウル／アンガウル諸島	南洋群島／カロリン群島／西カロリン群島／パラオ諸島／アンガウル島燐鉱／臨時南洋庁採鉱所／南洋庁採鉱所／南洋拓殖株式会社	アンガルウ島／アンガール	

地名を探す	南洋群島	ガラパン	がらぱん	マリアナ群島にあるサイパン島の中心街。南洋庁のサイパン支庁が置かれた。		南洋群島／マリアナ群島／サイパン島／サイパン支庁／南洋興発株式会社	
地名を探す	南洋群島	カロリン群島	かろりんぐんとう	マリアナ群島の南に位置する、東西に連なる群島。その西部にはパラオ諸島、中間にはヤップ島及びトラック島、東部にはポナペ島及びクサイ島がある。東経148度において東西に分け、東カロリン群島と西カロリン群島に区分される。現在、パラオ諸島はパラオ共和国、その他の島々はミクロネシア連邦に属する。	カロリン島／カロリン諸島	南洋群島／東カロリン群島／西カロリン群島／パラオ諸島／トラック諸島／ヤップ島／ポナペ島／クサイ島	カロリナス／カロリーネン
地名を探す	南洋群島	グアム	ぐあむ	マリアナ群島の最南端に位置する。現在は米国領である。	大宮島／ガム島	南洋群島／マリアナ群島／米西戦争	グワム／グアム
地名を探す	南洋群島	クサイ島	くさいとう	東カロリン群島に含まれる島。現在はミクロネシア連邦に属する。		南洋群島／カロリン群島／東カロリン群島	クサイエ／クサヤ島
地名を探す	南洋群島	コロール島	ころーるとう	パラオ諸島にある島。南洋庁及び南洋庁パラオ支庁が置かれた。		南洋群島／カロリン群島／西カロリン群島／パラオ諸島／南洋庁／パラオ支庁／西部支庁／南洋拓殖株式会社	コロウル
地名を探す	南洋群島	サイパン島	さいぱんとう	マリアナ群島にある島。現在、米国自治領北マリアナ諸島の中心。	サイパン／彩帆	南洋群島／マリアナ群島／サイパン支庁／北部支庁／ガラパン町／テニアン島／テニアン出張所／ロタ島／ロタ出張所／サイパン守備隊／南洋興発株式会社	サイバン／サイ・パン
地名を探す	南洋群島	テニアン島	てにあんとう	マリアナ群島にある島。サイパン島の南西に位置する。現在は米国自治領北マリアナ諸島に属する。	テニアン	南洋群島／マリアナ群島／サイパン島／ロタ島／南洋庁／北部支庁／テニアン出張所	チニアン／テニヤン
地名を探す	南洋群島	トラック諸島	とらっくしょとう	東カロリン群島に含まれる島。四季や七曜から島名が取られ、夏島などがある。現在はミクロネシア連邦に属する。	都洛／トラック島／トラツク島	南洋群島／カロリン群島／東カロリン群島／夏島／トラック支庁／東部支庁／トラック守備隊	トラツク諸島／トラツク島／トラツク群島
地名を探す	南洋群島	トラック夏島	とらっくなつしま	東カロリン群島に含まれるトラック諸島の島。南洋庁トラック支庁が置かれた。		南洋群島／カロリン群島／東カロリン群島／トラック諸島／トラック支庁／東部支庁	トラツク夏島
地名を探す	南洋群島	西カロリン群島	にしかりんぐんとう	カロリン群島の西部。パラオ諸島、ヤップ島などが含まれる。	西カロリン	南洋群島／カロリン群島／東カロリン群島／パラオ諸島／ヤップ島	
地名を探す	南洋群島	パラオ諸島	ぱらおしょとう	南洋群島の最西部に位置しており、西カロリン群島に含まれる。バベダオブ島(パラオ本島)、アンガウル島及びコロール島などがある。現在はパラオ共和国に属する。	パラオ／パラオ群島	南洋群島／カロリン群島／西カロリン群島／コロール島／アンガウル島／南洋庁／パラオ支庁／西部支庁／パラオ守備隊	パアラウ／パラウ
地名を探す	南洋群島	東カロリン群島	ひがしかりんぐんとう	カロリン群島の東部。トラック諸島、ポナペ島、クサイ島などが含まれる。	東カロリン	南洋群島／カロリン群島／西カロリン群島／トラック諸島／ポナペ島／クサイ島	
地名を探す	南洋群島	ポナペ島	ぼなぺとう	東カロリン群島に含まれる島。現在はミクロネシア連邦に属する。	ポナペ	南洋群島／カロリン群島／東カロリン群島／マーシャル群島／ポナペ支庁／ポナペ出張所／ポナペ守備隊	
地名を探す	南洋群島	マーシャル群島	まーしゃるぐんとう	南洋群島の最東端に位置する、一大環礁群。マーシャル群島の南端近くに、ヤルート島がある。現在はマーシャル諸島共和国に属する。	マーシャル諸島	南洋群島／ヤルート島	マーシャル群島／マーシャル諸島／マルシャル群島／マルシヤル群島／マーシアル群島
地名を探す	南洋群島	マリアナ群島	まりあなぐんとう	南洋群島の最北部に位置する、南北に連なる群島。その南部にはサイパン島、テニアン島、ロタ島及びグアムがある。現在は北マリアナ諸島(グアムを除く)に属し、米国自治領である。	マリアナ／マリアナ諸島	南洋群島／サイパン島／テニアン島／ロタ島／グアム／米西戦争／マリアナ沖海戦	マリアナス／マリアーネン
地名を探す	南洋群島	ヤップ島	やっぷとう	西カロリン群島にある島。現在はミクロネシア連邦に属する。	ヤップ	南洋群島／カロリン群島／西カロリン群島／ヤップ支庁／ヤップ出張所／ヤップ守備隊	ヤツブ
地名を探す	南洋群島	ヤルート島	やるーとう	マーシャル群島の南端近くにある島。現在はマーシャル諸島共和国に属する。		南洋群島／マーシャル群島／ヤルート支庁／ヤルート出張所／ヤルート守備隊	ヤルイト
地名を探す	南洋群島	ロタ島	ろたとう	マリアナ群島にある島。テニアン島の南西に位置する。現在は米国自治領北マリアナ諸島に属する。		南洋群島／マリアナ群島／サイパン島／テニアン島／南洋庁／北部支庁／ロタ出張所	

地名を探す	ベトナム・ラオス・カンボジア	仏領インドシナ	ふつりょういんどしな	インドシナ半島におけるフランス植民地の呼称。現在のベトナム・ラオス・カンボジアの領域に相当。		サイゴン／ハイフォン／ハノイ／ラオス／カンボジア／トンキン／安南／交趾支那／仏印総督／北部仏印／北部仏印進駐／仏印派遣委員／国境監視団／仏印国境監視委員／仏印資源調査団／南部仏印／南部仏印進駐／在仏印特派大使府／在仏印大日本特派大使府	仏領印度支那	
地名を探す	ベトナム・ラオス・カンボジア	サイゴン	さいごん	ベトナム南部の中心都市。現在の呼称はホーチミン市。	西貢／柴棍	仏領印度支那／仏領インドシナ／南部仏印／南部仏印進駐／在サイゴン名誉領事／在サイゴン領事／在西貢領事／在西貢日本領事館／在西貢帝国領事館／在西貢領事館／在柴棍帝国名誉領事／在柴棍名誉領事／在仏印特派大使府／在仏印大日本特派大使府／南方軍総司令部		
地名を探す	ベトナム・ラオス・カンボジア	ハイフォン	はいふおん	ベトナム北部、ホン川デルタに位置する港湾都市。ハノイの東約100キロに位置する。	海防	仏領印度支那／仏領インドシナ／援蔭物資／仏印ルート／北部仏印／北部仏印進駐／仏印派遣委員／国境監視団／仏印国境監視委員／在仏印大日本特派大使府／在仏印特派大使府海防出張所	ハイフォン／ハイフオン	
地名を探す	ベトナム・ラオス・カンボジア	ハノイ	はのい	ホン川沿岸に位置するベトナム北部の中心都市。現在のベトナムの首都。	河内	仏領印度支那／仏領インドシナ／援蔭物資／仏印ルート／北部仏印／北部仏印進駐／仏印派遣委員／国境監視団／仏印国境監視委員／在仏印大日本特派大使府／第21師団／印度支那駐屯軍		
地名を探す	タイ	タイ	たい	東南アジア大陸部中央に位置し、東はメコン川を隔ててラオス、南東はカンボジア、西はミャンマー(ビルマ)、南はマレーシアと国境を接する。国土の中心をチャオプラヤー川が流れている。元の国名はシャムであったが、1939年6月にタイと改称された。	タイ国／泰国／Thailand／シャム／シアン／暹羅／暹羅国／暹羅／Siam	日暹通商条約／日暹条約／日暹両国間修好通商航海条約／日本国暹羅国間通商航海条約／日本国暹羅国間友好通商航海条約／立憲革命／タイ・仏印国境紛争／日本国タイ国間同盟条約／日タイ攻守同盟／日泰攻守同盟／日本国タイ国間文化協定／泰緬鉄道／ピブン		
地名を探す	マレーシア	馬來	まらい	マレー半島南部とボルネオ島北部からなる。イギリス植民地期にはマラヤ、英領マラヤなどと呼称され、日本占領期に馬來と改称された。	マラヤ／英領マラヤ／マライ／英領マライ／マレー／英領マレー／マレイ／英領マレイ／マレイ半島／マレー半島／海峡植民地／馬來聯邦	馬來軍政／馬來軍政監／馬來軍政監部／馬來方面軍政部／馬來公報／馬來軍政の概要／英領馬來軍政実施要綱案／馬來俘虜收容所／マライ軍政／マライ方面派遣部隊／マライ部隊／マライ方面部隊／マライ教育事情／在マライ学術機関の調査		
地名を探す	シンガポール	シンガポール	しんがぽーる	マレー半島南端、赤道近くに位置する都市。	新加坡／新嘉坡／新嘉坡／昭南島／昭南特別市	ジョホール王国／東インド会社／海峡植民地／ラッフルズ／南方軍総司令部／自由印度仮政府	シンガホール／シンガホウル／シンガポール／シンカポール／シンカポル／シンガポラル／シガポール	
地名を探す	ミャンマー(ビルマ)	ビルマ	びるま	東南アジア大陸部西端に位置し、タイ・インド・中国と国境を接する。国土の中心をイラワジ川(エーヤーワディー川)が流れている。現在の国名はミャンマー。	緬甸／縮甸／ミャンマー	蘭貢／緬甸方面軍／ビルマ方面軍／緬甸方面日本軍司令官／緬甸方面軍野戦自動車廠／緬甸防衛軍／緬甸独立義勇軍／ビルマ国内閣総理大臣／ビルマ行政長官／ビルマルート／緬甸国軍		
地名を探す	ミャンマー(ビルマ)	マンダレー	まんだれー	ビルマ第二の都市。イラワジ川中流域の東岸に位置し、中部ビルマの政治・経済・文化の中心。	マンダレー市	第15軍／マンダレー作戦／緬甸義勇軍／ビルマ義勇軍／緬甸独立義勇軍	マンダレイ	

地名を探す	ミャンマー(ビルマ)	モールメン	もーるめん	ビルマ東部、マルタバン湾沿岸の都市。	Moulmein	第15軍／緬甸方面軍／ビルマ方面軍／第4野戦飛行場設定隊	モールメン／モールメイン／ムールメン／ムルメン	
地名を探す	ミャンマー(ビルマ)	ラングーン	らんぐーん	ビルマ南部の中心都市。北西から流れてくるラングーン川と北東から流れてくるペゲー川の合流点にあり、河口から34キロに位置する。現在の名称はヤンゴン。	蘭貢／ヤンゴン	ビルマ／在蘭貢領事／在ラングーン領事／在ラングーン副領事／在ラングーン日本帝国領事館／蘭貢日本国民学校／第十六兵站衛生隊本部蘭貢残部		
地名を探す	インド	インパール	いんぱーる	ビルマ国境近く、インド北東部に位置する都市。		インパール作戦／コヒマ／マニプール／デマプール／デイマプール	イムパール	
地名を探す	北米(アメリカ)	フィラデルフィア	ふいらでるふいあ	アメリカ東海岸のペンシルバニア州最大の都市。	費拉得費亜府／費拉特費府	費拉得費亜府博覧会／費拉特費府博覧会／ペンシルバニア／ペンシルバニア	ヒラデルヒア／フィラデルヒヤ／フィラデルフィヤ／フィラデルヒヤ／フィラデルフィア／フィラデルフィア／フィラデルフィア	
地名を探す	中米	エル・サルバドル	えるさるぼどる	中米のほぼ中央に位置し、太平洋に面する。1841年に独立国家となる。	サルバドル	サン・サルバドル／満洲国承認問題／満洲国サルヴァドル国間修好通商条約／満洲国、サルヴァドル間修好通商条約／レオン・シグエンサ／レオン、シグエンサ／レオンシグエンサ	エルサルバドル／エルサルバドル／エルサルヴァドル／エルサルヴァドル／エル・サルヴァドル／エル・サルヴァドル／エル・サルヴァドル	『日本大百科全書』小学館、1994年(ウェブ版)。
地名を探す	中米	サン・サルバドル	さんさるぼどる	エル・サルバドルの首都。		エル・サルバドル／在サンサルバドル帝国領事官／在サン、サルバドル帝国領事館／在サン、サルヴァドル領事館事務代理	サン、サルバドル／サン、サルヴァドル／サン・サルヴァドル／サンサルバドル／サン・サルヴァドル／サン・サルヴドル／サンサルヴドル	
地名を探す	中米	キューバ	きゅーば	西インド諸島のキューバ島と周辺のサンゴ礁の小島群から成る。1898年の米西戦争の結果、スペインから独立しアメリカの保護下に編入された。	玖馬／古巴	ハバナ／米西戦争	キューバ	『日本大百科全書』小学館、1994年(ウェブ版)。
地名を探す	中米	ハバナ	はばな	キューバの首都。		キューバ／ハバナ領事館／ハヴァナ領事館／在ハヴァナ領事／在ハヴァナ領事館事務代理	ハヴァナ／ハヴァナ／ハバナ／ハウアナ	
地名を探す	中米	ニカラグア	にからぐあ	中米の中部に位置し、東はカリブ海、西は太平洋に面する。1838年に独立。	ニ加拉瓜／ニ加拉瓦	ニカラグア共和国／ニカラグア国／ニカラグア運河／ニカラグア干渉問題／ニカラグア国革命／マナグア市／	ニカラグア／ニカラグワ／ニカラガ	『日本大百科全書』小学館、1994年(ウェブ版)。
地名を探す	中米	パナマ	ぱなま	中米の東端に位置し、北はカリブ海、南は太平洋に面する。1903年に独立。1914年にアメリカにより国土を横断するパナマ運河が建設された。		巴奈馬／巴那馬／巴那麻／巴拿馬	在パナマ日本帝国領事館／駐パナマ重慶公使／パナマ運河／パナマ共和国／パナマ国／パナマ市／パナマ会議／巴奈馬運河／巴奈馬太平洋万国博覧会／巴奈馬太平洋史学大会／巴奈馬共和国／巴奈馬政府／独立巴拿馬共和国／巴那馬運河／巴拿馬運河／巴拿馬運河記念博覧会／米国巴拿馬地帯臨時政府	『日本大百科全書』小学館、1994年(ウェブ版)。
地名を探す	中米	プエルトリコ	ぶえるとりこ	西インド諸島に位置する島。1898年の米西戦争により、アメリカの保護領となる。		米西戦争	ポルトリコ／ポルトリコ／ポルト、リコ	『日本大百科全書』小学館、1994年(ウェブ版)。
地名を探す	中米	メキシコ	めきしこ	北米大陸の南端に位置する。1821年にスペインから独立した。	女喜志古／美希哥／墨／墨国／墨是可／墨是歌／墨是哥／墨西哥／墨其是哥／墨西哥国／墨西哥國／墨哥／メキシコ国／メキシコ合衆国／Mexico／United Mexican States	在墨国公使館／在墨西哥国公使館	メヒコ／メシコ	『日本大百科全書』小学館、1994年(ウェブ版)。
地名を探す	ヨーロッパ(ベネルクス)	海牙	はーぐ	オランダの都市。王宮や政府機関、議会などが置かれ、事実上の首都となっている。オランダ語ではデン・ハーグDen Haagと呼ばれるが、アジ歴資料では「海牙」と表記される場合が多い。	ハーグ／ヘーグ／Haag	ハーグ賠償会議／万国平和会議／海牙会議／海牙密使事件／国際司法裁判所		桜田美津夫『物語オランダの歴史』中公新書、2017年。『百科事典マイペディア』平凡社、2009年(ネット版)



地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	バルト三国	ばるとさんごく	バルト海東南岸地域に位置する3ヶ国、エストニア・ラトヴィア・リトアニアの総称。	バルト諸国／バルチック諸国／バルチック諸邦／バルチック沿岸諸国／波羅的三国／波羅的諸国	バルト三国会議／バルト三国事情／バルト三国司法的協力条約／バルト三国親善大会／バルト三国統計月報／バルト三国の外交／バルト三国併合事情／バルト週間／エストニア／ラトヴィア／リトアニア	バルチック三国／バルカン三国	志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。
地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	エストニア	えすとにあ	バルト三国のひとつ。バルト海東南岸地域の最も北に位置する。	エストニア共和国／「エ」国／Estonia	ターリン／エストニア臨時政府／エストニア国民議会／エストニア国民会議／「エ」国大統領／エストニア首相代理／「エ」国公使会議／エストニア事情／エストニア国事情／エストニア協会／エストニア産業状況／エストニア銀行／日本国「エストニア」国間通商暫定取極／「エストニア」「ラトヴィア」間経済関税同盟／「ラトヴィア」「エストニア」同盟条約／「ラトヴィア」「エストニア」通商条約／「リスアニア」「エストニア」通商条約	エストニヤ	志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。
地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	ターリン	たーりん	エストニアの首都。元のハンザ都市。ドイツ語名はレヴァル。	エストニア国首府／エストニア国首都／レヴァール／レーヴァル／レバル／レパール／レーバル	エストニア／在ターリン公使館／在ターリン帝国名誉領事館／在エストニア国帝国名誉領事館／レヴァール領事館／在レヴァール出張所		志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。
地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	ラトヴィア	らとうゝいあ	バルト三国のひとつ。バルト三国の真ん中に位置する。	ラトヴィア共和国／Latvia	リガ／バルト三国／杉下裕次郎／小幡西吉／大谷二郎／渡辺理恵／七田基玄／佐久間信／木村淳／大鷹正次郎／三井義人／在ラトヴィア日本公使館／在ラトヴィア臨時代理公使／在ラトヴィア特命全権公使／高月保／「ラトヴィア」公使館附武官	ラトヴィア／ラトビヤ／ラトヴィヤ／ラトビヤ／ラドヴィア／ラドビヤ／ラドヴィア／ラドヴィヤ／レトヴィア／レトビヤ	志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。
地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	リガ	リーが	ラトヴィアの首都。元のハンザ都市。ドイツ語名はリガ。	リガ市／里賀／里賀市	ラトヴィア／在リガ出張所／在リガ出張員事務所／在里賀公使館／里賀情報	リガ／リガー	志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。
地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	リトアニア	りとあにあ	バルト三国のひとつ。バルト海東南岸地域の最も南に位置する。	「リ」国政府／リスアニア共和国／Lithuania	ヴァリニユス／カウナス／杉原千畝／波蘭リトアニア国境紛争問題／波蘭リトアニア紛争／波蘭リスアニア紛争	リトアニヤ／リスアニア／リスアニヤ／リチュアニア／リツアニア／リツアニヤ／リトワニア／レトアニア	志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。
地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	ヴァリニユス	うゝいりにゆす	リトアニアの首都。ネリス川とヴァリス川の交差する場所に位置する。1918年2月の独立後に首都となるが、1920年10月ポーランドに併合されたため、1940年までカウナスがリトアニアの臨時首都となっていた。ドイツ語名はヴィルナ、ポーランド語名はヴィルノ。	ヴィルナ／ウィルナ／ヴィルノ／ウィルノ	リトアニア／「リ」国首府／「ヴィルナ」問題／ウィルナ問題		志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。
地名を探す	ヨーロッパ(バルト三国)	カウナス	かうなす	リトアニア第2の都市。ネリス川とネムナス川の合流点に位置する。1920年10月から1940年まで、ヴァリニユスがポーランドに併合されていた時期の臨時首都。	リスアニア国首都／コヴノ／コブノ	リトアニア／在カウナス領事館／在カウナス領事代理／杉原千畝		志摩園子『物語 バルト三国の歴史 エストニア・ラトヴィア・リトアニア』中公新書、2004年。

種別	カテゴリ	基本語	基本語読み	解説	同義語	関連語	表記ゆれ	参考資料
人名を探す	政治家	伊地知正治	いぢまさ はる	1828(文政11)年生。薩摩藩出身。最高爵位は伯爵。父は藩士伊地知季平。藩校造士館教授。1862(文久2)年軍役奉行。1868年東山道先鋒総督参謀として戊辰戦争に従軍。1870年鹿児島藩権大参事。1871年左院議官。1872年左院副議長。1874年左院議長、兼参議。1875年一等侍講、修史局副総裁。1877年修史館総裁。1879年宮内省御用掛。1886年宮中顧問官。1886年死去。	伊地知参議／伊地知副議長／伊地知議長／伊地知大議官／伊地知大儀官／議長伊地知	東山道先鋒総督／留守政府／左院議長／参議／修史館総裁／一等侍講／左院副議長／地方官会議御用掛／宮内省御用掛／大議官／伊地知正一郎／征韓論		宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、118頁(執筆:西尾林太郎)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第1巻』吉川弘文館、1979年、526～527頁(執筆:石塚裕道)。
人名を探す	政治家	板垣退助	いたがきた いすけ	1837(天保8)年生。土佐藩出身。別名に乾退助、板垣正形。最高爵位は伯爵。父は上士乾正成。1861(文久元)年江戸藩邸会計・軍事職。1862(文久2)年御用人。1867(慶応3)年薩土盟約を締結。1868年東山道先鋒総督府参謀。高知藩大参事。1871年廃藩置県を主導。同年参議。1873年征韓論政変では征韓派の立場を取り下野。1874年愛国公党・立志社を結成、民撰議院設立建白書を提出。1875年参議に復職するも同年辞職。1881年自由党総長。1882年岐阜にて相原尚毅に襲撃される。同年外遊。1883年帰国。1884年自由党解党。1890年立憲自由党を結党。1896年内務大臣。1898年憲政党を結党、内務大臣。同年辞職。1919年死去。	乾退助／板垣伯／板垣参議／板垣内務大臣／板垣大臣	東山道先鋒総督府／廃藩置県／参議／征韓論／立志社／民撰議院／自由党／立憲自由党／内務大臣／憲政党／大隈内閣／伊藤内閣／片岡健吉／竹内綱／林有造		宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、131～132頁(執筆:村瀬信一)。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1999年、83頁。
人名を探す	政治家	伊藤博文	いとうひろ ぶみ	1841(天保12)年生。長州藩出身。別名に伊藤俊輔、春畝。最高爵位は公爵。百姓林家に生まれ、後に中間伊藤家に入る。松下村塾に学び、1862(文久2)年の英国公使館焼打に参加。1863(文久3)年英国に密航。1864(元治元)年帰国。1868年兵庫県知事。1869年大蔵少輔兼民部少輔。1871年租税頭、工部大輔。同年岩倉使節団に特命全権副使として随行。1873年帰国、征韓論政変では内地派となる。同年参議兼工部卿。1878年参議兼内務卿。1881年明治十四年政変を経て立憲政体導入を推進。1882年憲法調査のため渡欧。1883年帰国。1884年宮内卿。1885年太政官を廃止して内閣制度を創設し、初代内閣総理大臣となる(～1888年)。1888年枢密院議長。1890年貴族院議長。1892年	伊藤公／伊藤大臣／伊藤総理大臣／伊藤特派大使／伊藤全権大使／伊藤統監／伊藤俊輔／伊藤俊介	伊藤公爵／征韓論争／内閣総理大臣／日清講和会議／日清講和条約／日韓協約／韓国併合／韓国統監／安重根／立憲政友会／伊藤博邦／末松謙澄／西源四郎		日外アソシエーツ株式会社編『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ、2011年、65頁。
人名を探す	政治家	井上馨	いとうえか おる	1835(天保6)年生。長州藩出身。最高爵位は侯爵。実父は地侍井上光亨、後に藩士志道慎平の養子となる。1851(嘉永4)年藩校明倫館に学ぶ。1855(安政2)毛利敬親の参勤交代に随従して上府、江戸で剣術・蘭学を学ぶ。1862(文久2)年毛利定広小姓役。同年高杉晋作と外国公使襲撃を計画して謹慎、さらに英国公使館焼打に加担。1863(文久3)年赦免されてイギリス留学。1864(元治元)年帰国、四国艦隊下関砲撃の講和交渉に従事。同年俗論党に襲撃される。1865(慶応元)年鴻城軍総督。1867(慶応3)年三条実美らの帰京に随行。1868年参与・外国事務局判事、九州鎮撫総督参謀、長崎府判事兼外国判事、佐渡知事。1869年造幣頭、民部大丞兼大蔵大丞。1870年兼造幣頭、大	Inoue Kaoru／Inouye Kaoru／井上大蔵大丞／井上大蔵少輔／井上大蔵大輔／井上大蔵大臣／井上工部卿／井上外具視／源具視／源朝臣具視／岩倉公／岩倉正二位／正二位岩倉／岩倉前中將／岩倉右兵衛督／岩倉議定／岩倉大納言／大	九州鎮撫総督／佐渡知事／岡田平蔵／先収会社／日朝修好条規／参議／工部卿／法制局長官／外務卿／漢城条約／特派全権大使／外務大臣／井上条約改正案／農商務大臣／内務大臣／内閣総理大臣臨時代理／大蔵大臣／王政復古／輔相／外務卿／右大臣／岩倉遣外使節／特命全権大使／征韓論政変／華族会館／国葬／岩倉具定／岩倉具経		我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、4～8頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、168～169頁(執筆:長井純市)。
人名を探す	政治家	岩倉具視	いわくらと もみ	1825(文政8)年生。京都出身。実父は堀川康親、後に岩倉具慶の養子となる。1841(天保9)年元服・昇殿。1854(安政元)近習。1860(万延元)年和宮降嫁を推進。1862(文久2)年辞官落飾、洛北岩倉村に蟄居。1867(慶応3)年赦免、王政復古を実現。同年参与、議定。1868年副総裁、議定兼輔相。1869年大納言。1870年民部省御用掛。1871年外務卿、右大臣。同年特命全権大使として欧米各国を歴訪し、1873年帰国、征韓論政変では内地派の立場を取る。1874年赤坂喰違にて不平士族に襲撃される。同年華族会館長、華族督部長。1883年死去、国葬が営まれる。養子に岩倉具綱、実子に岩倉具定・岩倉具経など。	江藤胤雄／江藤中弁／江藤副議長／江藤司法卿／江藤参議	東征大総督府／鎮将府／留守政府／司法卿／理事官／参議／征韓派／征韓論／征韓党／愛国公党／民撰議院／佐賀の乱／改定律例／憲法類編		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第1巻』吉川弘文館、1979年、843～844頁(執筆:大久保利謙)。上田正昭ほか編『日本人名大辞典』講談社、2001年(執筆:毛利敏彦)。
人名を探す	政治家	江藤新平	えとうしん ぺい	1834(天保5年)生。佐賀藩出身。別名に江藤胤雄。父は下士江藤胤光。1849(嘉永2)年藩校弘道館に学ぶ。1850(嘉永3)枝吉神陽の義祭同盟に参加。1859(安政6)年火術方目付。1860(万延元)年上佐賀代官手許。1862(文久2)年貿易方。同年脱藩・入京、姉公路公知を通じた周旋を行うも帰藩・永蟄居。1867(慶応3)赦免。同年郡目付役。1868年東征大総督府軍監、徴士・江戸府判事、鎮将府会計局判事。1869年佐賀藩権大参事、太政官中弁。同年佐賀藩卒族に襲撃される。1870年制度取調専務になり、政府改革案を起草。1871年制度局御用掛、文部大輔、左院副議長。1872年教部省御用掛、司法卿。自ら理事官として岩倉使節団への合流を企図したが実現せず。司法権の独立・司	江藤胤雄／江藤中弁／江藤副議長／江藤司法卿／江藤参議	東征大総督府／鎮将府／留守政府／司法卿／理事官／参議／征韓派／征韓論／征韓党／愛国公党／民撰議院／佐賀の乱／改定律例／憲法類編		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第2巻』吉川弘文館、1980年、309～310頁(執筆:杉谷昭)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、280～281頁(執筆:藤田正)。
人名を探す	政治家	大木喬任	おおきたか とう	1832(天保3)年生。佐賀藩出身。最高爵位は伯爵。父は藩士大木知喬。1849(嘉永2)年枝吉神陽の義祭同盟に参加。1866(慶応2)年川副代官助役。1868年参与・外国事務局判事、京都府判事、軍務官判事、兼東京府知事。同年江藤新平と東京奠都を建議。1869年東京府大参事、東京府権知事。1870年民部大輔。1871年民部卿、文部卿。1872年文部卿として学制頒布に尽力。同年兼教部卿。1873年参議、兼司法卿。1880年参議兼元老院議長、民法編纂総裁。1881年兼司法卿。1883年文部卿。1885年元老院議長。1888年兼枢密顧問官。1889年枢密院議員。1891年文部大臣。1892年枢密院議長。1899年死去。子に大木遠吉・岡崎えんなど。	大木参議／大木文部卿／大木民部大輔／大木司法卿／大木議長／大木元老院議長／大木枢密院議長／大木枢密顧問官／大	東京府知事／東京奠都／民部卿／文部卿／学制／教部卿／参議／司法卿／元老院議長／民法編纂総裁／文部大臣／枢密院議長／大木遠吉／江藤新平／東京府大参事／東京府知事／民部大輔／枢密顧問官／大木伯	大木高任	我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、159～164頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、315～316頁(執筆:友田昌宏)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第2巻』吉川弘文館、1980年、534頁(執筆:由井正臣)。

人名を探す	政治家	大久保利通	おおくぼとしみち	1830(天保元)年生。薩摩藩出身。父は御小姓組大久保利世。1846(弘化3)年記録所書役助。1850(嘉永3)年嘉永朋党事件により謹慎。1853(嘉永6)年復職。1857(安政4)年徒目付。1861(文久元)年小納戸役。1863(文久3)年御側役。1866(慶応2)年薩長盟約を実現。1867(慶応3)年王政復古のため周旋。同年参与。1868年徴士、内国事務掛、総裁局顧問、鎮将府参与。1869年参議。1871年大蔵卿。同年岩倉使節団に特命全権副使として参加。1873年帰国。同年内務卿。1874年台湾出兵問題のため全権弁理大臣として渡清。1875年地租改正事務局総裁、博覧会事務局総裁。1878年紀尾井坂にて不平士族により暗殺。子に大久保利和・牧野伸顕・大久保利武、孫に大久保利謙など。	大久保一蔵／大久保市蔵／大久保参議／大久保全権弁理大臣／大久保大臣／大久保大蔵卿／大久保内務卿／大久保弁理大	王政復古／鎮将府／参議／大蔵卿／岩倉遣外使節／特命全権副使／内務卿／征台の役／台湾一件／全権弁理大臣／日清両国互換條款／地租改正事務局／博覧会事務局／島田一郎／大久保利和／牧野伸顕／大久保利武／大久	国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第4巻』吉川弘文館、1980年、546～547頁(執筆:遠山茂樹)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、319～320頁(執筆:毛利敏彦)。
人名を探す	政治家	大隈重信	おおくましげのぶ	1838(天保9)年生。佐賀藩出身。最高爵位は侯爵。父は藩士大隈信保。1844(弘化元)年藩校弘道館に入る。1855(安政2)年枝吉神陽が主催する義祭同盟に参加。1856(安政3)年蘭学寮に入る。1861(文久元)年蘭学寮教授。1864(元治元)年代品方として産物交易に従事。1867(慶応3)年蓄学稽古所を設立。1868年徴士参与・外国事務局判事。浦上キリシタン問題で英国公使パークスと交渉。同年長崎府判事兼外国官判事、外国官副知事。1869年兼会計官副知事、大蔵大輔兼民部大輔。1870年参議。1871年岩倉使節団が派遣されると留守政府において藩債整理・太陽暦採用・地租改正を主導。1873年大蔵省事務総裁、参議兼大蔵卿。秩禄処分・殖産興業を進める。1874年兼蕃地事務	大隈八太郎／大隈侯／大隈大蔵大輔／大隈民部大輔／大隈大蔵省総裁／大隈大蔵卿／大隈参議／大隈蕃地事務局長官／大勝海舟／勝安房／勝義邦／勝麟太郎／勝海軍卿／勝大輔／勝参議／勝顧問官／勝勝伯爵	参議／太陽暦／地租改正／大蔵卿／秩禄処分／征韓／蕃地事務局／蕃地事務長官／征討費総理事務局／地租改正局／開拓使官有物払下／国会開設の勅諭／立憲改進黨／東京専門学校／外務大臣／和親通商航海条約／改進黨	真辺将之『大隈重信』中央公論新社、2017年。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、321～322頁(執筆:木下恵太)。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1999年、186頁。秦郁彦『日本近現代人物事典』東京大学出版会、2002
人名を探す	政治家	勝安房	かつあわ	1823(文政6)年生。江戸出身。別名に勝麟太郎、勝安房、勝義邦、勝海舟。最高爵位は伯爵。父は御家人勝小吉。1845(弘化2)年ごろ永井青崖に師事して蘭学を学ぶ。1850(嘉永3)年氷解塾を開く。1855(安政2)年蕃書翻訳御用。同年長崎海軍伝習に派遣。1859(安政6)年軍艦操練所教授方頭取。1860(万延元)年遣米使節の一員として渡米、同年中帰国。蕃書調所頭取助。講武所砲術師範役、軍艦操練所頭取。1862(文久2)年軍艦奉行並。1864(元治元)年軍艦奉行。神戸海軍操練所を開設するも同年罷免。1866(慶応2)年軍艦奉行。幕長戦争の停戦交渉に従事。1867(慶応3)年海軍伝習掛。1868年海軍奉行並、若年寄格陸軍総裁。江戸城開城・江戸鎮撫取締に尽力。1869年外務大	勝海舟／勝安房／勝義邦／勝麟太郎／勝海軍卿／勝大輔／勝参議／勝顧問官／勝勝伯爵	軍艦奉行／海軍奉行／陸軍総裁／留守政府／参議／海軍卿／元老院議員／枢密顧問官／勝小鹿／西郷隆盛／徳川慶喜	我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、198～199頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、520頁(執筆:森田朋子)。松浦玲『勝海舟』筑摩書房、2010年。
人名を探す	政治家	木戸孝允	きどたかよし	1833(天保4)年生。長州藩出身。別名に桂小五郎、木戸準一郎。実父は藩医の和田昌景、後に桂孝古の養子となる。1852(嘉永5)年江戸遊学。1858(安政5)年大検使・大番手。1859(安政6)年有備館用掛。1864(元治元)年京都留守居。1865(慶応元)年政事堂用掛、国政方用談役心得。1866(慶応2)年薩長盟約を主導。1868年太政官徴士、総裁局顧問、外国事務掛、参与。1869年版籍奉還を推進。同年待詔院学士、待詔院出仕。1871年参議。同年特命全権副使として岩倉使節団に参加。1873年帰国、征韓論政変では内治優先を主張。1874年参議辞職、宮内省出仕。1875年参議、地方官会議議長。1876年参議辞職、内閣顧問、宮内省出仕。1877年死去。娘婿に木戸孝正、孫に木戸幸一な	桂小五郎／木戸貞治／木戸準一郎／木戸参議／木戸副使／木戸文部卿／木戸顧問	版籍奉還／外国事務掛／待詔院／参議／文部卿／政体取調／岩倉遣外使節／特命全権副使／征韓論／明治六年の政変／地方官会議／総裁局顧問／内閣顧問／木戸孝正／木戸幸一	木戸孝充 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第4巻』吉川弘文館、1984年、170～171頁(執筆:遠山茂樹)。
人名を探す	政治家	黒田清隆	くろだきよたか	1840(天保11)年生。薩摩藩出身。最高爵位は伯爵、最終階級は陸軍中将。父は下士黒田清行。1863(文久3)年蕪山塾に入門、砲術を学ぶ。1866(慶応2)年薩長盟約の実現に協力。1868年戊辰戦争に従軍。薩摩藩小銃隊一番隊長、奥羽征討参謀、北越征討参謀、会津征討越後口参謀。1869年軍務官出仕、青森口総督府参謀。箱館において榎本武揚らを降伏させ功績を挙げる。同年薩摩藩参政、外務権大丞、兵部大丞。1870年開拓次官(樺太専務)。1871年渡米、ケブロンらの招聘を決定。同年帰国、開拓長官代理。開拓使による女子留学生派遣を実現。1874年屯田兵制度を導入、北海道屯田兵憲兵事務局総理を務める。同年参議兼開拓長官。1876年日朝修好条規締結のため特命全	黒田了介／黒田中将／黒田陸軍中将／黒田参謀／黒田開拓次官／黒田次官／黒田長官代理／黒田参議／黒田開拓長官／黒後藤元輝／後藤工部大輔／後藤参議／後藤参与／後藤副議長／逋信大臣伯後藤／逋大伯後藤／逋臣伯後藤／逋伯後藤／後	奥羽征討／北越征討／会津征討越後口／青森口／ケブロン／開拓長官／女子留学生／留守政府／屯田兵／屯田憲兵／北海道屯田兵憲兵事務局／参議／日朝修好条規／特命全権弁理大臣／征討参軍／開拓使官有物払下事件／農	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、815～816頁(執筆:長井純市)。前田亮介『全国政治の始動 帝国議会開設後の明治国家』東京大学出版会、2016年。
人名を探す	政治家	後藤象二郎	ごとうしょうじろう	1838(天保9)年生。土佐藩出身。別名に後藤元輝。最高爵位は伯爵。父は上士後藤助右衛門。叔父の吉田東洋が参政に就くと郡奉行・御近習目付となる。1863(文久3)年開成所に学ぶ。1864(元治元)年大監察。1865(慶応元)年参政、兼軍艦奉行・開成館奉行。1867(慶応3)年薩土盟約を締結、さらに大政奉還・王政復古を主導。同年参与。1868年外国事務掛、徴士・参与、兼外国事務局判事、参与、兼大坂府知事。1870年麁香間祇候、制度御用掛。1871年工部大輔、制度御用取調専務、左院議長。1873年参議、左院事務総裁。征韓論政変では征韓派の立場を取り辞職・下野。1874年愛国公党を結成、民撰議院設立建白書を提出。1875年元老院議員、副議長。1876年依願免官。1881年自由党	後藤元輝／後藤工部大輔／後藤参議／後藤参与／後藤副議長／逋信大臣伯後藤／逋大伯後藤／逋臣伯後藤／逋伯後藤／後	後藤議長／後藤大臣／後藤逋信大臣／大阪府知事／麁香間祇候／左院議長／留守政府／参議／征韓論／愛国公党／民撰議院設立建白書／元老院議員／自由党／板垣退助／進歩党／逋信大臣／条約改正全権委員／農商務大臣	後藤象次郎 我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、417～420頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、1004頁(執筆:小林和幸)。
人名を探す	政治家	近衛文麿	このえふみまる	1891年生。東京出身。公爵近衛篤麿の長男。1904年1月の父の死去により、近衛家の当主となる。1912年に東京帝国大学哲学科に入学したが、京都帝国大学法科に転籍。1916年に貴族院議員となり、1917年に京都帝国大学を卒業後、内務省地方局の見習となる。1919年にパリ講和会議に随員として出席した経験を持つ。1931年には貴族院副議長、1933年には同議長となる。また、1922年に東亜同文会副会長、1936年には同会会長にも就任した。1937年6月4日に林銑十郎内閣の後を受けて第一次内閣を組閣。日中戦争勃発後は国家総動員法の成立、国民精神総動員運動の推進に関わった。また、「爾後国民政府を相手とせず」と言明した第一次近衛声明(1938年1月)、「東亜新秩序建設」を	近衛内閣総理大臣／近衛首相／近衛公爵／近衛公／近衛議長／近衛会長	近衛篤麿／巴里講和会議／貴族院議長／東亜同文会会長／昭和研究会／国家総動員法／国民精神総動員運動／近衛声明／「爾後国民政府を相手とせず」／東亜新秩序建設／枢密院議長／近衛新体制／新体制運動／大政翼	「近衛文麿」(伊藤隆執筆)臼井勝美ほか編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001年、428-429頁。

人名を探す	政治家	西郷隆盛	さいごうたかもり	1827(文政10)年生。薩摩藩出身。最終階級は陸軍大将。父は西郷吉兵衛。1844(弘化元)年郡方書役助。1846(弘化3)年下鍛冶屋町二才頭。1854(安政元)年藩主島津斉彬の参勤に中小姓・定御供として随行、江戸にて庭方役を務める。1857(安政4)徒目付。1859(安政6)年將軍継嗣問題・安政大獄の影響により奄美大島に流される。1862(文久2)年島津久光の率兵上京に伴い召還されるも、沖永良部島に流される。1864(元治元)年赦免、軍賦役兼諸藩応接係、側役。藩の周旋役として政局に関与。1865(慶応元)年大番頭。1866(慶応2)年薩長盟約を締結。1867(慶応3)年薩土盟約を締結。王政復古を主導、参与となる。1868年東征大総督下参謀として江戸城開城を行う。1869年鹿児島	西郷吉之助／西郷陸軍元帥／陸軍元帥西郷／西郷陸軍大将／賊魁西郷／賊魁隆盛／西郷南洲／西郷南州	西郷参議／西郷元帥／西郷大将／東征大総督／近衛都督／陸軍元帥／参議／陸軍大将／廃藩置県／留守政府／征韓論政変／西南戦争／西郷従道／西郷寅太郎／西郷菊次郎		家近良樹『西郷隆盛』ミネルヴァ書房、2017年。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2011年、5～6頁(執筆:落合弘樹)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第6巻』吉川弘文館、1985年、156～157頁(執筆:遠山茂樹)。国史大辞典編集委員会
人名を探す	政治家	嵯峨實愛	さがさねなる	1820(文政3)年生。京都出身。別名に正親町三条実愛。父は正親町三条実義。1827(文政10)年元服・昇殿。1858(安政5)年通商条約締結に反対、憤を命じられる(後に赦免)。1860(万延元)年議奏。1862(文久2)年国事御用掛。1863(文久3)年辞職。同年八・一八政変に伴い復職。1866(慶応2)年辞職。1867(慶応3)年踐祚に伴い復職。王政復古により議定となる。1868年内国事務総督、輔弼、議定。1869年刑法官知事、刑部卿。1870年大納言。同年正親町三条から嵯峨に改姓。1871年大嘗会御用掛、麁香間祇候。1872年教部卿、麁香間祇候。1909年死去。	正親町三条実愛／三条実愛／正親町三条刑部卿／正親町三条前大納言／正親町三条大納言／正親町三条殿／嵯峨大納言／	刑部卿／大嘗会／麁香間祇候／留守政府／教部卿／議定／内国事務総督／学校知事／国事掛／議奏／大納言／薩長両藩密勅／嵯峨公勝	嵯峨実愛	「嵯峨家譜」(東京大学史料編纂所)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第2巻』吉川弘文館、1980年、536～537頁(執筆:小西四郎)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、316頁(執筆:内藤一成)。
人名を探す	政治家	佐々木高行	ささきたかゆき	1830(文政13)年生。土佐藩出身。最高爵位は侯爵。父は藩士佐佐木高順。土佐藩において郡奉行・普請奉行・大目付などを歴任。1867(慶応3)年後藤象二郎と大政奉還建白を協議。1868年戊辰戦争に際して海援隊を率いて長崎奉行所を接收。同年徴士・長崎裁判所判事兼九州鎮撫使参謀、天草・富岡知果事、鎮将府判事、刑法官判事。1869年耶蘇宗徒処置取調掛、刑法官副知事、刑部大輔。1870年参議。1871年司法大輔。司法理事官として岩倉使節団に随行、欧米の司法制度を調査。1873年帰国後、免官の後に大判事。1874年司法大輔、左院副議長。1875年元老院議官。1878年一等待補、海軍省御用掛。1879年宮内省御用掛。1880年元老院副議長。1881年参議兼工部卿。1885年	佐々木三四郎／佐々木工部卿／佐々木侍補／佐々木議官／佐々木副議長／佐々木顧問官／佐々木顧問官／佐々木顧問官／	九州鎮撫使／耶蘇宗徒処置／参議／岩倉遣外使節団／理事官／工部卿／侍補／皇典講究所／國學院官／佐々木副議長／海軍省御用掛／明宮御用掛／宮中顧問官／元老院／枢密顧問官／元田永孚／吉井友実／土方	佐佐木高行	国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第6巻』吉川弘文館、1985年、344～345頁(執筆:鳥海靖)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、52頁(執筆:清水唯一朗)。我部政男ほか編『勅委任官履歴原書』上、柏書房、1995年、450～456頁。鳥海
人名を探す	政治家	佐野常民	さのつねたみ	1823(文政5)年生。佐賀藩出身。別名に佐野栄寿左衛門。最高爵位は伯爵。父は藩士下村充實、後に藩医佐野常徴の養子となる。藩校弘道館に学び、さらに江戸・京都・大坂に遊学する。1853(嘉永6)年精煉方頭人。1855(安政2)年長崎会郡伝習に参加。1858(安政5)年三重津海軍学寮監督。1867(慶応3)年佐賀藩代表としてパリ万博に参加。1868年帰国。1870年兵部少丞、工部省出仕。1871年工部権少丞、工部少丞、工部大丞兼灯台頭。1872年兼博覧会御用掛、工部三等出仕、兼澳国博覧会理事官、兼博覧会事務副総裁。1873年弁理公使(イタリア・オーストリア在勤)、兼工部省御用掛。1874年帰国。1875年元老院議官。1877年博愛社を設立。1879年中央衛生会会長。1880年大蔵卿、内	佐野栄寿左衛門／佐野兵部少丞／佐野少丞／佐野元少丞／佐野工部大丞／佐野工部三等出仕／佐野三等出仕／	巴里万国博覧会／灯台頭／博覧会御用掛／澳国博覧会理事官／博覧会事務副総裁／在澳国弁理公使／博愛社／中央衛生会会長／大蔵卿／内国勸業博覧会事務副総裁／内国絵画共進会／元老院議長／絵画共進会／亜細亜大博		
人名を探す	政治家	三條實美	さんじょうさねとみ	1837(天保8)年生。京都出身。最高爵位は公爵。父は三条実万。1854(安政元)年家督継承・元服・昇殿。1862(文久2)年議奏加勢、議奏、国事御用掛。同年攘夷督促の勅使として江戸下向。1863(文久3)年八・一八政変に伴い官位褫奪・京都追放。1865(慶応元)年太宰府に移送。1867(慶応3)年王政復古により赦免、議定となる。1868年議定・副総裁、外国事務取調掛、議定兼輔相。戊辰戦争において関東大監察使・鎮将を務め江戸に入る。1869年右大臣。1871年兼神祇伯宣教長官、太政大臣。岩倉使節団派遣中の留守政府の最高責任者を務める。1873年征韓論政変において辞表提出(後に復職)。1878年兼賞勲局総裁。1879年兼修史館総裁。1883年華族会館長。1885年内大臣。1889	三条前中納言／三条大納言／三条左大将／三条輔相／三条右大臣／三条右府／三条太政大臣／三条内大臣／故三条内大臣	輔相／関東監察使／関東大監察使／鎮将／右大臣／神祇伯／宣教長官／太政大臣／留守政府／征韓論政変／賞勲局／修史館／華族会館／内大臣／国葬／三条公爵	三条実美	宮内省図書寮編『三条実美公年譜』宗高書房、1969年。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2011年、92～93頁(執筆:松尾正人)。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1999年、469頁。
人名を探す	政治家	宍戸璣	ししどたまき	1829(文政12)年生。長州藩出身。最高爵位は子爵。実父は藩士安田直温、後に藩儒山県太華の養子となる。藩校明倫館に学び、江戸・長崎に遊学。1858(安政5)年明倫館都講本役、毛利定広の侍読。1864(元治元)年下関戦争の和議に尽力。1865(慶応元)年幕長戦争において問罪使の応接に当たる。その功績により家老宍戸家の末家となり、直目付を務める。1869年山口県権大参事。1870年刑部少輔。1871年司法少輔、司法大輔。1872年教部大輔、兼文部大輔。1877年元老院議官。1879年特命全権公使(清国在勤)。琉球処分をめぐる覚書を清国側に伝達。1881年交渉決裂のため帰国。1882年宮内省出仕。1884年参事院議官。1885年元老院議官。1890年貴族院議員、錦鶏間祇候。1901年	宍戸少輔／宍戸刑部少輔／宍戸司法大輔／宍戸教部大輔／在清宍戸公使／宍戸駐清公使／宍戸議官／宍戸特命	在清国特命全権公使／琉球処分／錦鶏間祇候／宍戸功男／皇居御造営事務副総裁／宍戸子爵／李鴻章／元老院議官／参事院議官／文部大輔		宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2011年、130頁(執筆:松尾正人)。我部政男ほか編『勅委任官履歴原書』下、柏書房、1995年、577～582頁。人事興信所編『人事興信録 第13版』人事興信所、1941年、シ22-23頁。安岡昭男ほか編『幕末維新
人名を探す	政治家	副島種臣	そえじまたねおみ	1828年生。佐賀藩出身。最高爵位は伯爵。父は藩儒枝吉忠左衛門、後に副島利忠の養子となる。藩校弘道館に学び、兄である枝吉神陽が主催する義祭同盟にも参加。1852年(嘉永5)京都に遊学。帰藩後に弘道館国学教授を務める。1864(元治元)年致遠館学監。フルベッキから英学・国際法を学ぶ。1867(慶応3)年大隈重信と脱藩、謹慎。1868年参与・制度事務局判事。同年福岡孝弟と「政体書」起草。1869年参議。1871年樺太境界談判のため渡露。同年外務卿。1873年日清修好条規批准のため特命全権大使として北京に渡る。兼参議。征台・征韓論を唱え、征韓論政変で辞職・下野。1874年愛国公党に参加、民撰議院設立建白書に連署。1879年宮内省御用掛・一等待補。1887年宮中	副島二郎／副島次郎／副島参議／副島外務卿／副島全権大使／副島大使／副島卿／副島顧問官／副島伯	政体書／参議／樺太境界談判／外務卿／日清修好条規／特命全権大使／マリア・ルス号事件／征韓論／愛国公党／民撰議院／内務大臣／侍講／宮中顧問官／枢密顧問官／枢密院副議長／宮内省御用掛／東邦協会／フルベッ		宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、471～472頁(執筆:富塚一彦)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第8巻』吉川弘文館、1987年、610頁(執筆:杉谷昭)。

人名を探す	政治家	高崎正風	たかさきまさかぜ	1836(天保7)年生。薩摩藩出身。別名に高崎豊麿。最高爵位は男爵。父は藩士高崎温恭。1850(嘉永3)年嘉永朋党事件に連座して奄美大島に配流。1853(嘉永6)年赦免。1862(文久2)年島津久光に従って上京、国事に奔走する。以後、使番、応接掛並供目付、京都留守居附役勤などを務める。1868年征討軍事参謀。維新後は鹿児島藩地頭職として垂水地方の行政に従事。1871年左院少議官。1872年左院視察団として欧米派遣、主に英仏の議会・法制の調査研究に従事。同年三等議官。1873年帰国。1874年全権弁理大臣大久保利通の清国派遣に随従。同年帰国。1875年侍従番長。1876年歌道御用掛。1877年二等侍補。1878年皇后宮亮、宮内四等出仕・文学御用掛。1884年宮内三等出	高崎豊麿／高崎少議官／高崎三等議官／高崎二等議官／高崎議官／高崎侍従番長／高崎番長／高崎式部職次官／高崎式部	征討將軍軍事参謀／左院視察団／岩倉使節団／大久保利通／侍従番長／歌道御用掛／皇后宮亮／文学御用掛／式部次官／御歌掛長／御歌所長／東京音楽学校商議委員／帝室制度取調委員／小松宮別当／国学院／北白川宮家	高崎清風／高橋正風／高崎正風	国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻、吉川弘文館、1988年、22頁(執筆:武川忠一)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2012年、538頁(執筆:兼築信行)。「高崎正風」A06051171400。
人名を探す	政治家	田中不二麿	たなかふじまる	1845(弘化2)年生。尾張藩出身。最高爵位は子爵。父は藩士田中儀兵衛。1862(文久2)年出仕。1866(慶応2)年藩校明倫堂監生、助教並。1867(慶応3)年参与。1868年弁事。1869年大学校御用掛。1870年中弁。1871年枢密大史、大内史、文部大丞。文部理事官として岩倉使節団に随従。1873年帰国後、調査報告「理事功程」を上奏・刊行。同年文部少輔。1874年文部大輔。1876年フィラデルフィア博覧会教育事務取調のため渡米。1877年帰国。学制に基づく学校制度創設や教育令公布に尽力。1878年元老院議官。1880年司法卿。1881年参事院副議長。1884年参事院議官兼特命全権公使(イタリア在勤)。1887年特命全権公使(フランス在勤)。1890年帰国、枢密顧問官に就任。1891	田中国之輔／田中邦之助／田中国之助／田中輔／田中五位／田中從五位／田中中弁／田中文部少輔／田中文部大輔／田中	岩倉遣外使節／理事官／フィラデルフィア／万国博覧会／文部省／学制／教育令／司法卿／参事院副議長／参事院／参事院議官／駐伊特命全権公使／駐仏特命全権公使／司法大臣／枢密顧問官／条約実施準備委員／高等捕獲	田中不二麻呂／田中富士麿	国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻』吉川弘文館、1988年、253～254頁(執筆:佐藤秀夫)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、244～248頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻』吉川弘文館、2012年、606頁(執筆:寄田啓夫)。
人名を探す	政治家	田中光顕	たなかみつあき	1843(天保14)年生。土佐藩出身。最高爵位は伯爵。父は山内家陪臣の浜田充美。1861(文久元)年武市半平太に師事、後に勤王党に参加。1864(元治元)年脱藩・上洛。1866(慶応2)年第二次幕長戦争に従軍。1867(慶応3)年陸援隊に参加。1868年御親兵取調役、兵庫県判事。1869年会計官監督知事、監督正。1871年大蔵少丞、戸籍正、戸籍頭。大蔵理事官として岩倉使節団に随従、大使会計を務める。1873年帰国。1874年陸軍会計監督、兼参謀局御用。1875年第五局副長。1877年西南戦争に際し征討軍団会計部長を務める。1878年陸軍会計監督長、第五局長。1879年会計局長。1881年兼参事院議官。1884年兼恩給局長官。1885年元老院議官。1886年内閣書記官長。1887年会	浜田辰弥／田中顕助／田中監督正／田中大蔵少丞／田中戸籍頭／田中大蔵理事官／田中会計監督長／田中会計	御親兵／監督司／戸籍寮／岩倉遣外使節／理事官／征討軍団会計部長／陸軍会計監督／第五局／会計局／恩給局長官／内閣書記官長／会計検査院長／警視總監／帝室会計審査局／学習院長／議定官／図書頭／宮内大臣／聖		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻』吉川弘文館、1988年、255頁(執筆:鳥海靖)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻』吉川弘文館、2012年、607～608頁(執筆:長井純市)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、258～264頁。
人名を探す	政治家	沼間守一	ぬまもりかず	1844(天保14)年生。江戸出身。別名に沼間慎次郎。実父は幕臣高梨仙太夫、後に沼間平六郎の養子となる。長崎・横浜で英学を学ぶ。1865(慶應元)年陸軍伝習所に入る。歩兵差図役頭取、歩兵頭並、第二伝習兵隊長を歴任。1868年歩兵奉行並。伝習隊や遊撃隊を率いて戊辰戦争に従軍、酒田にて捕縛される。1869年放免後、英語指南所を開設、高知藩に招聘される。1871年廃藩置県後、横浜で生糸・両替商を営む。1872年租税寮七等出仕・横浜税関勤務、司法省七等出仕。司法理事官随員として岩倉使節団に合流。1873年帰国後、司法省六等出仕。河野敏謙らと法律講義所を設立。1874年少判事。1875年六等判事、五等判事、元老院権大書記官。1879年依願免官、嚶鳴社社		戊辰戦争／高知藩／横浜税関／租税寮／岩倉遣外使節／河野敏謙／益田克徳／元老院／元老院権大書記官／東京横浜毎日新聞／自由党／立憲改進黨／東京府会議長／沼間平六郎／高梨哲四郎		柳原豊太郎編『沼間先生之伝』毎日新聞社、1890年。石川安次郎『沼間守一』毎日新聞社、1901年。『近代政治関係者年譜総覧 戦前篇』第6巻』ゆまに書房、1990年、172～177頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻』吉川弘文館、2013年、94頁(執筆:松崎稔)。我部
人名を探す	政治家	野村靖	のむらやすし	1842(天保13)年生。長州藩出身。最高爵位は子爵。父は足輕野村嘉伝次。松下村塾に入門、尊攘運動に参加。1871年宮内権大丞、宮内少丞、外務大記。同年岩倉使節団に随従。1873年帰国。1874年外務省五等出仕。1875年外務権大丞。1876年神奈川権令。1878年神奈川権令。1881年駅運総官。1883年兼博物館長。1886年駅運次官。1888年枢密顧問官。1891年特命全権公使(パリ在勤)。1893年依願免官、枢密顧問官。1894年内務大臣。1896年依願免官、逓信大臣。1898年依願免官。1900年枢密顧問官。1909年死去。実兄に入江九一、義弟に伊藤博文、子に入江貫一など。	野村和作／野村枢密顧問官／野村全権公使／野村在仏公使／野村県令／野村神奈川権令／野村神奈川	岩倉遣外使節／神奈川県令／駐仏特命全権公使／内務大臣／逓信大臣／駅運局／入江九一／伊藤博文／入江貫一／野村顧問官	野邨靖	「枢密院高等官転免履歴書」明治ノ二(Ref.A06051170000)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第11巻』吉川弘文館、1990年、434頁(執筆:佐々木隆)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻』吉川弘文館、2013年、122～123頁(執筆:内藤一成)。
人名を探す	政治家	東久世通禧	ひがしくぜみちとみ	1833(天保4)年生。京都出身。最高爵位は伯爵。父は東久世通徳。1847(弘化4)年元服・昇殿。1862(文久2)年国事書記御用、国事御用掛。1863(文久3)年国事参政。同年八・一八政変に伴い官位停止。1865(慶応元)年太宰府に流される。1867(慶応3)年王政復古により官位復旧・帰洛、参与となる。1868年軍事参謀、外国事務総督、兵庫鎮台、兼兵庫裁判所総督、外国事務局輔、横浜裁判所総督、議定、神奈川府知事、外国官副知事。1869年参与、大弁、開拓長官。1871年侍従長。宮内理事官として岩倉使節団に随従。1872年帰国。1874年台湾出兵問題に伴い渡台、同年中帰国。1877年元老院議官。1881年元老院幹事。1882年元老院副議長、兼宮内省御用掛。1888年枢密顧問官。	東久世保丸／東久世少将／東久世前少将／東久世前侍従／東久世中將／東久世中納言／東久世正四位／東久世從三位／東	外国事務総督／兵庫鎮台／兵庫裁判所／外国事務局／横浜裁判所／江戸開市事務／江戸開市取扱／議定／外国官副知事／外国官准知事／神奈川府知事／開拓長官／岩倉遣外使節／宮内理事官／台湾一件／元老院幹事／元老		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第11巻』吉川弘文館、1990年、841頁(執筆:板垣哲夫)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻』吉川弘文館、2013年、211～212頁(執筆:小林和幸)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、537～543頁。
人名を探す	政治家	平田東助	ひらたとうすけ	1849(嘉永2)年生。米沢藩出身。最高爵位は伯爵。実父は藩士伊東諱、後に藩医平田亮伯の養子となる。藩校興讓館に学ぶ。1864(元治元)年江戸に遊学、古賀謹堂に師事。1868年医師として戊辰戦争に従軍。1869年大学南校に入学。1870年大学少舎長、中舎長、大舎長。1871年岩倉使節団に同行して渡欧、ロシアに留学(後にドイツに転学)。1873年ベルリン大学に入学。1876年帰国。同年内務省御用掛。1877年大蔵省御用掛。1878年大蔵権少書記官兼太政官権少書記官。1880年大蔵少書記官、兼太政官少書記官。1882年伊藤博文に随従して渡欧、同年帰国。大蔵権大書記官。1883年太政官文書局長。1884年太政官大書記官兼大蔵大書記官。1885年参事院議官補、法制局参事	平田中舎長／平田文書局長／平田参事官／平田書記官長／平田枢密院書記官長／平田法制局部長／平田法制局局長官／平田	大学南校／岩倉遣外使節／ベルリン大学／伊藤博文／貴族院勅選議員／枢密院書記官長／法制局長官／内閣恩給局長／農商務大臣／大日本産業組合中央会／国勢調査準備委員会／内務大臣		秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』第2版、東京大学出版会、2013年、477頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、248～249頁(執筆:内藤一成)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第11巻、吉川弘文館、1990年、1062頁(執筆:鳥海

人名を探す	政治家	福岡孝弟	ふくおかた かちか	1835(天保6)年生。土佐藩出身。最高爵位は子爵。父は藩士福岡孝順。吉田東洋に師事。1857(安政4)年大監察。1862(文久2)年吉田東洋暗殺事件の影響で一時失脚。1863(文久3)年御側役。1867(慶応3)年後藤象二郎と大政奉還に尽力。同年参与。1868年参与・制度事務局判事。由利公正と五箇条誓文を起草。1869年病気のため辞職・帰藩。1870年高知藩少参事、権大参事。1872年文部大輔、司法大輔。1873年依願免官。1874年左院一等議官。同年依願免官。1875年元老院議官。同年依願免官。1880年元老院議官。1881年参議兼文部卿。1883年参事院議長。1885年宮中顧問官。1888年枢密顧問官。1919年死去。	福岡藤次／福岡文部卿／福岡司法大輔／福岡参議／福岡顧問官／福岡枢密顧問官／福岡子爵	御誓文／政体書／参議／文部卿／参事院議長／後藤象二郎／大政奉還／由利公正／宮中顧問官／枢密顧問官／元老院議官	福岡孝悌	我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、408～412頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第12巻』吉川弘文館、1991年、67～68頁(執筆:福地悌)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、283～284頁(執筆:朝井佐智子)。
人名を探す	政治家	福羽美静	ふくばよし すず	1831(天保2)年生。津和野藩出身。最高爵位は子爵。父は藩代官福羽美質。藩校養老館に学ぶ。1853(嘉永6)年京都に游学、大内隆正に師事。1858(安政5)年江戸に游学、平田鍬胤に師事。1860(万延元)年帰藩、養老館教授。1862(文久2)年上洛、御親兵取調御用。1863(文久3)年帰藩、社寺政策・葬祭改革に従事。1868年徴士・神祇事務局権判事、神祇官判事。同年大坂行幸中の明治天皇に「古事記」進講。1869年兼議事取調、待講、兼耶蘇宗徒御処置取調、神祇官副知事、神祇少副、兼宣教次官、兼大学校御用掛。1871年歌道御用掛、兼制度分局、大嘗会御用掛、神祇大輔。1872年教部大輔、宮内省三等出仕。1875年二等侍講、元老院議官。1876年国憲取調委員。1877年宮内省	福羽文三郎／福羽従四位／福羽四位／福羽五位／福羽判事／福羽権判事／福羽神祇少副／福羽神祇大輔／福羽教部大輔	侍講／耶蘇宗徒御処置取調掛／宣教次官／大嘗会／留守政府／元老院議官／国憲取調委員／文学御用掛／文部省御用掛／東京女子師範学校／参事院議官／編纂局／錦鶏間祇候／福羽逸人／福羽恩蔵／福羽真城		我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、474～483頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、297頁(執筆:中村聡)。安岡昭男ほか編『幕末維新人名事典』新人物往来社、1994年、830頁。日外アソシエーツ編『明治大正人物事
人名を探す	政治家	牧野伸顕	まきののぶ あき	1861(文久元)年生。薩摩藩出身。最高爵位は伯爵。実父は大久保利通、後に牧野吉之丞の養子となる。1871年大久保利通随員として岩倉使節団に同行、アメリカに留学。1874年帰国、東京開成学校に入学。1879年外務省御用掛。1880年外務三等書記生・ロンドン公使館勤務。1882年大蔵省少書記官。1883年兼制度取調局勤務。1884年兼参事院議官補。1885年全権大使伊藤博文に随員して北京に派遣。同年兵庫大書記官、法制局参事官。1888年内閣総理大臣秘書官。1889年兼法制局参事官、内閣記録課長。1890年兼内閣官報局長。1891年福井県知事。1892年茨城県知事。1893年文部次官。1897年駐イタリア特命全権公使。1899年駐オーストリア特命全権公使。1906年帰国。同	牧野伯／牧野子／牧野男／牧野書記官／牧野書記生／牧野領事代理／牧野公使／牧野大使／牧野特命全権公使／牧野在壤	牧野委員／大久保利通／岩倉遣外使節／東京開成学校／伊藤博文／内閣総理大臣秘書官／福井県知事／茨城県知事／文部次官／文部大臣／農商務大臣／外務大臣／貴族院議員／巴里講和会議／駐伊特命全権公使／在壤特命		秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』第2版、東京大学出版会、2013年、520頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第13巻、吉川弘文館、1992年、36～37頁(執筆:鳥海靖)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、455～456頁(執筆:熊
人名を探す	政治家	山田顕義	やまだあき よし	1844(弘化元)年生。長州藩出身。最高爵位は伯爵、最終階級は陸軍中将。父は藩士山田顕行、大伯父に村田清風。藩校明倫館に学ぶ。1863(文久3)年狙撃隊を設立。1864(元治元)年禁門の変・下関戦争に従軍。同年御楯隊を結成、司令を務める。1866(慶応2)年第二次幕長戦争に従軍。1867(慶応3)年整武隊総督。1868年征討総督副参謀、海軍参謀、青森口陸軍参謀。1869年兵部大丞、山口藩少参事。同年大村益次郎暗殺に伴い近代兵制の整備に尽力。1871年兵部大丞。兵部理事官として岩倉使節団に随員。1873年帰国、東京鎮台司令長官、兼駐清特命全権公使。1874年兼司法大輔。1877年西南戦争に際し別働第二旅団司令長官などとして従軍。1878年兼元老院議官。1879年参	山田市之允／山田中将／山田陸軍中将／山田兵部大丞／山田大丞／山田大輔／山田司法大輔／山田長官／山田参議／山田	征討総督／山口藩／兵部大丞／遣外使節／理事官／東京鎮台司令長官／在清特命全権公使／別働第二旅団司令長官／参議／工部卿／内務卿／司法卿／司法大臣／皇典講究所／日本法律学校／國學院／生野銀山／大村益次郎		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第14巻』吉川弘文館、1993年、164～165頁(執筆:佐々木隆)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、725頁(執筆:西川誠)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、347～353頁。
人名を探す	政治家	由利公正	ゆりきみ まさ	1829(文政12)年生。越前藩出身。別名に三岡八郎。最高爵位は子爵。父は藩士三岡義知。1859(安政6)年越前蔵屋敷や物産会所を設立、藩財政再建・産物奨励に尽力する。1862(文久2)年側用人。1863(文久3)年藩論転換により蟄居。1867(慶応3)年徴士・参与。1868年会計事務掛兼制度寮掛、会計事務局判事、参与、皇居御造営掛。五箇条の御誓文を起草、不換紙幣の発行を進める。1869年免職。1871年福井藩出仕、東京府知事。銀座大火後の煉瓦街建設を進める。1872年岩倉使節団に随員。1873年帰国。1874年板垣退助らと民撰議院設立建白書を提出。1875年元老院議官。1876年依願免官。1885年元老院議官。1890年貴族院勅選議員、麝香間祇候。1909年死去。	三岡八郎／由利議官／由利府知事	皇居御造営掛／福岡孝弟／御誓文／東京府知事／岩倉遣外使節／板垣退助／民撰議院／元老院議官／貴族院議員／麝香間祇候		我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、547～553頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第14巻』吉川弘文館、1993年、319頁(執筆:石塚裕道)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、762頁(執筆:落合功)。
人名を探す	官僚(外務省)	安藤太郎	あんどうた ろう	1846(弘化3)年生。鳥羽藩出身。父は藩医安藤文沢。1871年大蔵省出仕、外務省文書大佑、外務大録。同年岩倉使節団に四等書記官として随員。1873年帰国。同年外務省七等出仕。1874年副領事(香港在勤)。1877年領事。1883年外務少書記官。1884年領事(上海在勤)、兼判事。1885年総領事。この頃より禁酒運動に従事する。1890年公使館参事官。1891年非職、外務書記官・通商局長。1892年依願免官。1895年農商務省商工局長。1897年退官。1898年禁酒同盟会長。1906年青山学院財団法人理事。1917年安藤記念講義所を設立。1924年死去。	安藤忠経／安藤大蔵省十一等出仕／安藤副領事／安藤領事／安藤香港副領事／安藤香港領事／安藤上海領事／安藤両領事	岩倉遣外使節／禁酒運動／禁酒同盟会／青山学院		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第1巻』吉川弘文館、1979年、390頁(執筆:波多野和夫)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、81頁(執筆:知野愛)。
人名を探す	官僚(外務省)	池田寛治	いけだか んじ	1846(弘化3)年生。長崎出身。別名に池田政懋。維新前にフランス語を修める。1868年長崎府仏学助教。1869年仏学教授、仏学教導、大学少助教。1870年外務省中訳官、大学少助教、大学中助教、大学大助教。1871年副島種臣に随従して渡露。帰国後、岩倉使節団に四等書記官として随員。1873年帰国。同年文部省七等出仕、大蔵省七等出仕。1874年内務省七等出仕。同年大久保利通の清国派遣に随員・帰国。1875年内務省六等出仕、副領事(天津在勤)。1878年領事。1879年帰国。1880年大蔵省少書記官・長崎税関長。1881年死去。	池田政懋／吳常十郎／池田大助教／池田領事／池田内務省七等出仕	柯太境界談判／岩倉遣外使節／台湾一件／副島種臣／大久保利通／池田副領事	池田寛次	「故少書記官池田寛治祭料下賜ノ件」(公03019100)。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1982年、63頁。富田仁編『海を越えた日本人人名事典』日外アソシエーツ、1985年、78頁(執筆:楠家重敏)。

人名を探す	官僚(外務省)	大橋忠一	おおはし ちゅういち	1893年12月生。岐阜県出身。1918年7月に東京帝国大学法科大学法律学科(英法科)を卒業し、同年同月に外務属・電信課勤務となる。同年10月には文官高等試験外交科試験に合格。同年同月領事官補・香港在勤、1919年6月領事官補・奉天在勤、1920年7月外交官補・アメリカ在勤(高等官七等)、1921年大使館三等書記官、1923年5月在シアトル領事、1925年6月在ロサンゼルス領事、1927年12月外務書記官・通商局第三課長、1929年7月外務書記官兼拓務書記官(高等官四等)、同年8月公使館二等書記官・中国在勤、1930年6月一等書記官、1931年3月在ハルビン総領事を歴任。1932年3月に依願免本官となり、同時に満洲国外交部総務司長に就任。同年6月には満洲国外交部次長、1937年には満洲国外務局長官、同年12月からは満洲国参議を務め、1939年8月に依願免本官。帰国後は、1940年4月外務省嘱託・蘭領東インド出張、同年8月外務次官心得、同年11月外務次官(高等官二等)を歴任し、1941年7月に依願免本官となる。1941年12月から1942年9月までは蒙古連合自治政府最高顧問を務めた。日本敗戦後は、1947年10月から1951年8月まで公職追放となる。追放解除後、1952年10月から1958年4月まで衆議院議員、1959年7月から1961年5月までカンボジア駐劄特命全権大使を務め、1961年6月に退官。12月没。関連資料として、小池聖一・森茂樹編『大橋忠一関係文書』現代史料出版、2014年がある。	大橋書記官／大橋外務書記官／大橋大使館三等書記官／大橋領事／大橋第三課長／大橋総領事／大橋司長／大橋次長／大橋外交部次長／大橋長官／大橋外務局長官／大橋次官／大橋外務次官／大橋顧問／大橋最高顧問	在哈爾濱總領事／満洲国外交部／北満鉄道買収／満洲国外務局／満洲国参議／蒙古連合自治政府		秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、111頁。国立公文書館デジタルアーカイブ「任免裁可書」各年度。
人名を探す	官僚(外務省)	栗本貞次郎	くりもとて いじろう	1839(天保10)年生。江戸出身。実父は堀七郎右衛門、後に旗本栗本鋤雲の養子になる。1859(安政6)年軍艦線練所教授方手伝出役。1861(文久元)年教授方出役。1862(文久2)年軍艦組一等勤方。1864(元治元)年外国奉行支配書物御用出役、御持小筒組差図役並勤方。1865(慶応元)年横浜仏学伝習所に入所。1866(慶応2)年大砲差図役頭取、開成所頭取、歩兵頭並。1867(慶応3)年幕府留学生としてパリに留学。1868年帰国。1870年再渡仏。1873年二等書記官として岩倉使節団に随行。同年帰国、五等出仕・大使事務局。1875年免出仕。1876年元老院御用掛。1877年依願免出仕、外務省御用掛。1881年フランスにて死去。		開成所／岩倉遣外使節／大使事務局／元老院／栗本鋤雲		我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、335頁。「歩兵頭並栗本貞次郎明細短冊」(多004663)。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、277頁(執筆:富田仁)。
人名を探す	官僚(外務省)	鮫島尚信	さめじま なおのぶ	1845(弘化2)年生。薩摩藩出身。別名に鮫島誠蔵。父は藩士鮫島尚行。1865(慶応元)年薩摩藩留学生と渡英。1868年帰国。同年外国官権判事、兼東京府権判事。1869年外国官判事兼東京府判事、東京府権大参事。1870年外務大丞、少弁務使(仏国在勤)。1872年中弁務使、弁理公使。1873年特命全権公使。1875年外務大輔。1876年兼議定官。1877年仏国博覧会御用掛。1878年特命全権公使兼ベルギー公使。1880年兼ポルトガル・スペイン公使。同年パリで死去。弟に鮫島武之助、鮫島盛。	Sameshima Naonobu／鮫島誠蔵／鮫島外務大丞／鮫島大丞／鮫島外務大輔／鮫島大輔／鮫島公使／鮫島全権公使／鮫島特命全権公使／鮫島弁理公使／日本公使鮫島／我公使鮫島／鮫島東京府大参事／鮫島少弁務使／鮫島小弁務使／鮫島中弁務使／鮫島両弁務使／鮫島	弁務使／弁理公使／外務大輔／外務大丞／東京府大参事／特命全権公使／議定官／仏国博覧会御用掛／鮫島家墓地／鮫島武之助／鮫島盛		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第6巻、吉川弘文館、1985年、467頁(執筆:吉村道男)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2012年、76～77頁(執筆:熊本史雄)。『百官履歴』下巻、日本史籍協会、1928年、100～104頁。

人名を探す	官僚(外務省)	塩田三郎	しおたさぶろう	<p>1843(天保14)年生。江戸出身。別名に塩田篤信。父は塩田順庵。1856(安政3)年父とともに箱館へ渡り、栗本鋤雲に漢学、カシオンに英仏語を学ぶ。1863(文久3)年帰府。同年外国奉行支配通弁御用。池田使節団に随行して英仏に派遣。1865年横浜仏語伝習所補佐。1867(慶応3)年外国奉行支配組頭。1870年民部省出仕、民部権少丞、鉄道御用専務、外務権少丞、外務権大記。同年鯨島尚信に随行して英仏独に派遣、書記・翻訳事務に従事。1871年特別弁務使としてローマで開催された万国電信会議に参加。同年外務大記。米国にて岩倉使節団に合流、一等書記官を務める。1872年外務二等書記官。1873年帰国。同年外務少丞、外務大丞。1875年理事官(電信御用)として魯国に派遣。1877年外務大書記官、翻訳局長。1879年兼条約改正取調掛。1880年取調局長。1881年外務少輔。1882年条約改正予議会副委員。1884年参事院議官。1885年特命全権公使(北京在勤)。1887年一時帰国。1889年北京にて死去。</p>	<p>塩田篤信／塩田少丞／塩田外務少丞／塩田大丞／塩田外務大丞／塩田大書記官／塩田外務大書記官／塩田少輔／塩田外務少輔／塩田外務少卿／塩田大記／塩田権大記／塩田権少丞／塩田外務権少丞／塩田公使／塩田議官／塩田参事院議官</p>	<p>鉄道御用／万国電信会議／特別弁務使／岩倉遣外使節／条約改正予議会／在清国特命全権公使／日清修好条規／日清条約修正／外国奉行支配／民部権少丞／外務権少丞／外務権大記／外務大記／外務少丞／外務大丞／外務大書記官／翻訳局／外務少輔／特命全権公使／参事院議官</p>	<p>「故塩田特命全権公使履歴」『官報』1889年5月15日。石原千里「塩田三郎とその旧蔵洋書をめぐって」『英学史研究』16、1984年。日外アソシエーツ編『人物レファレンス事典 明治・大正・昭和(戦前)編』日外アソシエーツ、2000年、965頁。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1999年、473頁。</p>
人名を探す	官僚(外務省)	杉原千畝	すぎはらちうね	<p>1900年1月生。岐阜県出身。1919年7月に外務省留学生試験(ロシア語)に合格。同年10月に日露協会学校に入学し、同年11月に早稲田大学高等師範部英語科を中退した。1920年11月に休学し、同年12月に一年志願兵として歩兵第79連隊(朝鮮駐留)に入隊し、1922年3月に満期除隊(陸軍歩兵少尉)。同年9月に復学し、1923年3月に日露協会学校特修科を修了。同年同月、在満洲里領事官に任じられる。1924年2月外務書記生・満洲里在勤、同年3月予備役少尉、同年12月外務書記生・ハルビン総領事館在勤、満洲国成立後の1932年5月大使館二等通訳官(高等官七等)、同年6月満洲国外交部北滿特派員公署事務官、1934年8月満洲国外交部理事官・政務局ロシア科長兼計画科長を歴任し、1933年5月から開始された北滿鉄道買収交渉にも携わった。1935年7月に満洲国外交部を辞して帰国し、外務省情報部第一課勤務、1936年4月外務書記生・ペトロパブロフスク在勤を歴任し、同年9月に帰国。同年12月大使館二等通訳官・ソ連在勤に任じられたが、ソ連側から入国拒否を宣告された。そのため、1937年8月より大使館二等通訳官兼公使館二等通訳官・ソ連在勤兼フィンランド在勤(高等官七等)となる。1939年7月在カウナス領事代理、1940年8月在プラハ総領事代理、1941年2月副領事・在ケーニヒスベルグ総領事代理、同年8月大使館一等通訳官・トルコ在勤、同年11月大使館一等通訳官・ルーマニア在勤、1943年11月公使館三等通訳官・ルーマニア在勤、日本敗戦後、1945年8月にソ連収容所へ連行される。1946年11月にブカレストを出発し、1947年4月博多港に帰国。同年6月付で外務省を退職となり、1951年5月百貨店勤務、1956年4月科学技術情報センター勤務、1957年4月NHK国際局勤務、1960年5月川上貿易モスクワ事務所代表、1965年10月川上貿易モスクワ支店代表を務めた。1986年7月没。</p>	<p>杉原留学生／杉原書記生／杉原領事代理／杉原総領事代理／杉原副領事</p>	<p>外務省留学生／日露協会学校／ハルビン学院／在満洲里領事館／在哈爾濱日本帝国総領事館／大使館二等通訳官／北滿特派員公署／北滿鉄道買収／在芬蘭臨時代理公使／在カウナス領事代理／ケーニヒスベルグ</p>	<p>秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、279頁。国立公文書館デジタルアーカイブ「任免裁可書」各年度。白石仁章『杉原千畝—情報に賭けた外交官—』新潮文庫、2015年。</p>



人名を探す	官僚(外務省)	鈴木貫一	すずきか いち	1843(天保14)年生。彦根藩出身。実父は藩士鈴木重用、後に兄である重威の養子となる。1864(元治元)年母衣役。1865(慶応元)年御供方頭。1867(慶応3)年洋学修業のため江戸に遊学。1868年キリスト教に入信、受洗。同年藩命でアメリカ留学。1869年帰国。1871年彦根に洋学校を設立し、教頭を務める。同年太政官権少外史。1872年左院中議生。同年左院視察団として渡欧。1873年在仏公使館書記官。1874年外務三等書記官。1876年外務二等書記官。1882年「官金私借」問題で送還、帰国後に投獄される。1888年出獄。1890年横浜海岸教会に入会。1893年下田歌子の訪欧に同行。1898年帰郷、滋賀育児院を設立。1914年死去。	鈴木二等書記官／在仏鈴木書記官	鈴木書記官／鈴木代理公使／岩倉遣外使節／在仏公使館／外務書記官／横浜海岸教会／下田歌子		中島一仁「彦根藩士・鈴木貫一とキリスト教」(『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』50、2017年)。杉井六郎「『公会名簿』に見える鈴木貫一について」(『キリスト教社会問題研究』20、1972年)。
人名を探す	官僚(外務省)	田辺太一	たなべや すかず	1831(天保2)年生。江戸出身。父は儒学者田辺石庵。昌平坂学問所に学び、甲府徴典館教授。1857(安政4)年長崎海軍伝習に参加。1859(安政6)年外国方・書物方出役。1863(文久3)年組頭。同年池田使節団に欧州を歴訪。1864(元治元)年謹慎。外国奉行手附。1866(慶応2)年組頭勤方。1867(慶応3)年パリ博覧会派遣使節に随行。1868年目付、1869年沼津兵学校教授。1870年外務少丞。1871年樺太境界談判のため副島種臣に随行して渡露。帰国後、一等書記官として岩倉使節団に随行。1873年帰国、外務四等出仕。1874年記録局長心得、兼台湾蕃地事務局御用掛。1875年大使事務局書類取調御用、外務大丞。1876年大久保利通に随行して渡清。1877年外務大書記官、公信局長心得。1879年外務一等書記官、清国公使館在勤、臨時代理公使。1882年帰国。1883年元老院議官。1890年錦鶏間祇候。1915年死去。娘に三宅花園(田辺竜子)、甥に田辺朔郎など。	Tanabe Taichi ／田辺外務大丞／田辺外務少丞／田辺外務大書記官／田辺外務書記官／田辺外務大書記／田辺外務四等出仕／田辺外務省四等出仕／田辺外務元大丞／田辺大丞／田辺少丞／田辺大書記官／田辺四等出仕／外務省田辺書記官／在清公使館田辺書記官／在北京田辺代理公使	沼津兵学校／柯太境界談判／琉球処分／岩倉遣外使節／征台の役／台湾一件／蕃地事務局／大使事務局／巴里万国博覧会／元老院議官／錦鶏間祇候／田辺朔郎／副島種臣／大久保利通／田辺書記官／田辺代理公使／維新史料編纂会／幕末外交談		我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、259～263頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第9巻』吉川弘文館、1988年、262頁(執筆：田中正弘)。
人名を探す	官僚(外務省)	坪上貞二	つぼかみ ていじ	1884年6月生。佐賀県出身。1909年に東京高商専攻部を卒業し、高等文官試験に合格。大使館書記官、外務書記官、外務省亜細亜局会計課長等を経て、対支文化事業調査会幹事、外務省文化事業部長、拓務次官、満洲拓殖公社総裁、満洲国参議を歴任し、1941年8月15日よりタイ国駐節特命全権大使に就任。1944年9月1日に辞して、1945年1月23日に依願免官となり、大倉山文化科学研究所理事長に就任した。	坪上書記官／坪上文化事業部長／坪上部長／坪上拓務次官／坪上次官／坪上大使	外務省亜細亜局／対支文化事業調査会幹事／外務省文化事業部長／拓務次官／満洲拓殖公社／満洲国参議／タイ国駐節特命全権大使		人事興信所編『第十四版 人事興信録 下巻』1943年、ツ49頁。人事興信所編『第十五版 人事興信録 下巻』1948年、ツ14頁。

人名を探す	官僚(外務省)	鳥居忠文	とりいただぶみ	1847(弘化4)年生。壬生藩出身。最高爵位は子爵。父は第6代藩主鳥居忠挙、兄に第7代藩主鳥居忠宝。1868年藩主名代として政局・藩政に関与。1870年忠宝の養子となり家督相続、壬生藩知事となる。1871年廃藩置県に伴い免官。司法中録となるも海外渡航のため免官。司法理事官随員として岩倉使節団に参加。1872年アメリカにて私費留学生となり、アーマスト大学・ボストン大学で法学を学ぶ。1880年一時帰国、再渡米。1882年帰国。1883年外務省御用掛。1885年外務書記生(ハワイ在勤)。1886年領事館書記生、副領事。1890年公使館書記官、貴族院議員。1891年外務書記官。1892年公使館書記官。1914年死去。	鳥居右近／鳥居壬生藩知事忠文／書記生子爵鳥居	壬生藩／鳥居忠宝／岩倉遣外使節／貴族院議員		富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、418頁(執筆:楠家重敏)。「領事館書記生子爵鳥居忠文ノルル駐節副領事二任命ノ件 自明治十九年十二月十七日」(Ref.B16080057400)。壬生町立歴史民俗資料館編『壬生のサムライ太平洋を渡る 咸臨丸渡米から岩倉使節団へ』壬生町・壬生町教育委員会、2004年。「鳥居家譜」(東京大学史料編纂所)。
人名を探す	官僚(外務省)	蜂谷輝雄	はちやてるお	1895年10月生。東京府出身。1919年3月に東京高商専攻部領事科を卒業し、同年6月外務属・外務省臨時調査部勤務となる。同年10月文官高等試験外交科試験に合格し、同年11月領事官補、1921年10月ハンブルグ在勤、1923年2月副領事、1924年8月外務事務官・外務省亜細亜局第三課勤務、同年12月外務省亜細亜局第二課勤務、1926年3月領事・奉天在勤、1929年4月大使館二等書記官・アメリカ在勤、1931年3月領事・バンクーバー在勤、1933年2月に奉天総領事、1934年6月大使館一等書記官・イギリス在勤、1938年3月外務省文化事業部長、同年12月駐ポーランド大使館参事官、1939年10月にブルガリア特命全権公使を歴任。1941年1月より台湾総督府外事部長に就任し、外務省調査官を兼務。1945年3月には自由インド仮政府特派特命全権公使に任じられ、ビルマのラングーンに着任する。日本敗戦後、1946年8月にバンコクより帰国し、同年11月より外務省総務局勤務となり、1948年5月に依願免本官。退官後、在外同胞援護会理事を務め、1958年10月より日米協会主事、1961年9月から1977年7月まで日米協会専務理事を務めた。1979年7月没。	蜂谷総領事代理／蜂谷総領事／蜂谷文化事業部長／蜂谷外事部長／蜂谷部長／蜂谷公使	在奉天総領事／外務省文化事業部長／台湾総督府外事部長／自由インド仮政府／自由印度仮政府／自由印度仮政府特派特命全権公使／在外同胞援護会		秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、406頁。外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会『新版 日本外交史辞典』山川出版社、1992年、834頁。
人名を探す	官僚(外務省)	林董	はやしただす	1850(嘉永3)年生。佐倉藩出身。最高爵位は伯爵。実父は佐倉藩医佐藤泰然、後に幕府御殿医林洞海の養子となる。1866(慶応2)年幕府留学生としてロンドンで学ぶ。1868年帰国。同年榎本武揚に随従して箱館戦争に参加。1870年釈放。1871年神奈川県出仕、外務省七等出仕。同年岩倉使節団に二等書記官として随員。1873年帰国。同年工学助。工部大書記官、太政官大書記官を歴任。1882年兼宮内大書記官。同年有栖川宮熾仁親王に随員して渡露。1883年帰国。1885年逓信省駅通局長。1887年内信局長。1888年香川県知事。1890年兵庫県知事。1891年外務次官。1895年特命全権公使(清国駐節)。1897年露国駐節。1899年第一回ハーグ平和会議に委員として参加。1900年英国駐節。1902年日英同盟協約の締結に当たる。1905年特命全権大使。1906年外務大臣。日仏協約・第三次日韓協約・日露協約の締結を実現。1908年依願免官。1911年逓信大臣、兼外務大臣。1913年死去。実兄に松本良順など。	林董三郎／林通信大臣／林駐英公使／林駐英全権大使／英国駐節林大使／在露林公使／在露林全権公使／在露林特命全権公使／在露国林公使／露国駐節林全権公使／林大書記官／林宮内大書記官／林宮内書記官／林工部大書記官／林工部権大書記官／林工部書記官／林子爵	林伯爵／林外務大臣／在英国林大使／林特命全権大使／箱館戦争／岩倉遣外使節／香川県知事／兵庫知事／在清国特命全権公使／在露特命全権公使／万国平和会議／駐英公使／駐英大使／日英同盟協約／特命全権大使／西園寺内閣／奉天半島還付二関スル条約／三国干涉／日仏協約／日韓協約／第一回日露協約／松本順／ランスダウン	林薫	「伯爵林董特旨叙位ノ件」(Ref.A12090150400)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第11巻』吉川弘文館、1990年、682～683頁(執筆:大畑篤四郎)。

人名を探す	官僚(外務省)	山口尚芳	やまぐちますか	1839(天保10)年生。佐賀藩出身。1853(嘉永6)年藩命により長崎に遊学。1863(文久3)年御次見習。1866(慶応2)年御備立方附役、御次通。1868年外国事務局御用掛、大阪府判事試補、越後府判事、外国官判事。1869年兼東京府判事、通商司総括、会計官判事、大蔵大丞兼民部大丞。1870年北海道開拓御用掛。1871年外務少輔。同年岩倉使節団に特命全権副使として随行。1875年元老院議官。1880年元老院幹事。1881年会計検査院長、参事院議官。1882年内閣委員、元老院議官。1887年高等法院陪席裁判官。1890年貴族院勅選議員。1894年死去。子に山口俊太郎など。	Yamaguchi Naoyoshi／山口範蔵／山口判事／山口大蔵大丞／山口民部大丞／山口外務少輔／山口少輔／山口副使／山口議官	開拓使御用掛／外務少輔／大蔵大丞／民部大丞／岩倉遣外使節／特命全権副使／会計検査院長／山口俊太郎	武雄市図書館・歴史資料館平成13年度特別企画展『岩倉使節団一三〇年 海に火輪を 山口尚芳の米欧廻覧』武雄市図書館・歴史資料館、2002年。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第14巻』吉川弘文館、1993年、136頁(執筆:石塚裕道)。
人名を探す	官僚(外務省)	山本熊一	やまもとくまいち	1889年4月8日生。山口県出身。1912年6月に上海東亜同文書院政治科を卒業し、1919年10月高等文官試験に合格。1919年11月外務省嘱託となり、1920年3月より外務事務官任官。在トルコ大使館三等書記官、在英国大使館三等書記官、外務省通商局勤務を経て、1934年3月より満洲国駐在二等書記官(同年6月より一等書記官)、1938年4月より外務省調査部第五課長、外務省東亜局長、亜米利加局長、外務次官、大東亜次官を歴任し、1944年9月よりタイ国駐劄特命全権大使に就任。終戦による帰国後、タイでの抑留中に執筆した「大東亜戦争秘史」をまとめた。1946年7月13日に依願免本官となる。退官後、山本製作所株式会社社長に就任。1952年5月には日中貿易促進会議常任議長に就任し、中華人民共和国・ソ連などを訪問した。1957年8月以降、日本国際貿易促進協会会長として、中華人民共和国・ベトナム・ソ連などを歴訪した。1963年1月に病気のため死去。	山本書記官／山本東亜局長／山本亜米利加局長／山本外務次官心得／山本次官心得／山本外務次官／山本大東亜次官／山本大使	外務省通商局／東亜局長／亜米利加局長／外務次官／大東亜次官／タイ国駐劄特命全権大使／「大東亜戦争秘史」	人事興信所編『第十五版 人事興信録 下巻』1948年、ヤ36頁。山本熊一遺稿「大東亜戦争秘史」(アジ歴Ref: B02033035200)。
人名を探す	官僚(外務省)	松岡洋右	まつおかようすけ	1880年3月生。山口県出身。1893年2月に渡米し、1901年にオレゴン州立大学法科を卒業して、同年8月に帰国。1904年10月に外交官及領事館試験に合格し、同年11月領事館補・上海在勤となる。1906年10月に関東都督府事務官に転任となり、同年11月関東都督府外事課長に就任。帰国後、1907年11月外務書記官・政務局勤務、1908年12月公使館三等書記官・ベルギー在勤(未赴任)、1909年2月公使館三等書記官・清国在勤、同年9月より1910年4月まで領事兼任・上海在勤、1910年9月公使館二等書記官、1912年8月大使館二等書記官・ロシア在勤、1913年10月大使館二等書記官・アメリカ在勤、1916年6月大使館一等書記官、1917年2月外務省臨時調査部勤務、1917年11月より1918年5月まで外務大臣秘書官兼任、1918年5月より同年9月まで総理大臣秘書官兼任、1919年2月講和会議全権随員、1920年3月外務省政務局勤務、同年5月在間島総領事(未赴任)を歴任し、1921年6月に依願免本官となる。1921年7月より1926年3月まで南満洲鉄道株式会社理事、1927年7月南満洲鉄道株式会社副社長を務め、1929年8月に辞職。1930年2月より1933年12月まで衆議院議員となり、1932年9月には外務省事務嘱託となる。1932年10月国際連盟臨時会議における日本帝国代表(親任待遇)を務め、1933年12月には政党解消連盟	松岡事務官／松岡書記官／松岡理事／松岡満鉄副社長／松岡満鉄総裁／松岡外相／松岡外務大臣／松岡大臣／松岡全権／松岡代表	領事官補／関東都督府事務官／関東都督府外事課長／外務書記官／公使館三等書記官／公使館二等書記官／大使館二等書記官／大使館一等書記官／外務省臨時調査部／外務大臣秘書官／総理大臣秘書官／外務省政務局／南満洲鉄道株式会社理事／満鉄理事／南満洲鉄道株式会社副社長／満鉄副社長／南満洲鉄道株式会社総裁／満鉄総裁／内閣参議／外務大臣／拓務大臣／松岡外相訪欧／日独伊	秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、477頁。
人名を探す	官僚(内務省)	内海忠勝	うつみただかつ	1843(天保14)年生。長州藩出身。最高爵位は男爵。実父は吉敷毛利家家来の吉田治助、後に内海亀之進の婿養子となる。宣徳隊や吉敷隊など諸隊に参加。1868年兵庫県出仕。1870年兵庫県大参事、神奈川県大参事。1871年岩倉使節団に随行。1873年帰国。同年大阪府権参事。1874年大阪府参事。1877年大阪府大書記官、長崎県権令。1878年長崎県令。1884年三重県令。1885年兵庫県令。1886年兵庫県知事。1889年長野県知事。1891年神奈川県知事。1895年大阪府知事。1897年京都府知事。1898年貴族院勅選議員。1900年会計検査院長。1901年内務大臣。1903年辞職。1905年死去。	内海精一／内海兵庫県大参事／内海大参事／内海大阪府参事／内海長崎県権令／内海権令／内海長崎県令／内海兵庫県令／内海三重県令／内海県令／内海兵庫知事／内海知事／内海内務大臣	岩倉遣外使節／長崎県令／三重県令／兵庫知事／長野知事／神奈川知事／大阪府知事／京都府知事／会計検査院長／内務大臣	大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、853頁。高橋文雄『内海忠勝伝』内海忠勝顕彰会、1966年。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第2巻』吉川弘文館、1980年、135頁(執筆:成沢光)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、252頁(執筆:西尾林太郎)。
人名を探す	官僚(内務省)	大島久満次	おおしまくまじ	1865生。愛知県出身。1888年7月に帝国大学法科大学を卒業したのち、1888年法制局参事官試補、衆議院書記官兼法制局参事官を経て、1896年に台湾総督府参事官に就任。その間、総督府臨時対岸事務掛長、警察本署長などを務め、1901年には同府警視総長となり、1908年5月には後藤新平の後任として台湾総督府民政長官に就任し、臨時台湾工事部長も兼任した。その後、1910年7月に依願免本官となったが、1912年1月には神奈川県知事に就任し、1915年まで務めたのち、政友会から出馬して衆議院議員に当選し、1918年まで務めた。1918年4月没。	大島民政長官／大島警視総長	台湾総督府参事官／台湾総督府臨時対岸事務掛長／台湾総督府警察本署長／台湾総督府警視総長／台湾総督府民政長官／臨時台湾工事部長／神奈川県知事／衆議院議員	人事興信所『人事興信録 第三版』1911年、を155頁。日外アソシエーツ株式会社編『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業篇』2011年、123頁。岡本真希子『植民地官僚の政治史 朝鮮・台湾総督府と帝国日本』三元社、2008年、410-411頁。

人名を探す	官僚(内務省)	大津敏男	おおつとしお	<p>1893年10月生。福岡県出身。1918年7月に東京帝国大学法科大学を卒業。1917年10月文官高等試験合格。1919年12月に歩兵第56連隊に入隊し、1921年10月に召集解除となる。1921年7月より大阪府属、1923年2月大阪府西成郡長、1925年3月大阪府九條警察署長、1925年9月大阪府警察部刑事課長を経て、1928年7月に内務事務官となる。1931年12月に福岡県警察部長、1932年1月に警視庁警務部長となり、1932年6月より長崎県内務部長、1935年1月神奈川県経済部長、1936年7月内閣調査局調査官を歴任した。1936年11月から満洲国民政部総務司長、1937年7月満洲国内務局長官、1937年10月関東州庁長官を経て、1938年3月に関東局総長に就任。1942年1月より埼玉県知事を務め、1943年7月からは樺太庁長官に就任し、日本敗戦後の1947年11月まで務めた。1950年4月にシベリアから帰国。1951年8月に公職追放が解除された。1951年12日より全国権太連盟会長に就任した。</p>	大津長官	<p>大阪府西成郡長／大阪府九條警察署長／大阪府刑事課長／福岡県警察部長／警視庁警務部長／長崎県内務部長／神奈川県経済部長／内閣調査官／満洲国民生部総務司長／満洲国内務局長官／関東州庁長官／関東局総長／埼玉県知事／樺太庁長官</p>		<p>人事興信所編『第十四版 人事興信録 上巻』1943年、才119頁。秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、106頁。</p>
人名を探す	官僚(内務省)	大橋武夫	おおはしたけお	<p>1904年11月生。島根県出身。1924年4月に東京帝国大学文学部社会学科に入学し、1925年4月に同法学部政治学科に転学。1927年11月に文官高等試験司法科・行政科試験に合格し、1928年3月に東京帝国大学法学部政治学科を卒業。同年4月に内務属・土木局河川課勤務に任じられ、1929年11月地方事務官・埼玉県社会課長、1930年9月埼玉県社会局事務官・社会部勤務を務める。1938年1月より厚生事務官となり、同年4月傷兵保護院業務局補導課長、同年11月内務省計画局計画課長、1939年7月厚生省労働局賃金課長、1942年7月岡山県警察部長を歴任し、1943年4月に休職となる。復職後、1944年8月より内務省国土局都市計画課長となり、1945年4月から同年8月までは防空総本部施設局建物疎開課長を兼務した。日本敗戦後、1945年11月に戦災復興院計画局長に就任し、1946年3月から同年6月までは特別建設部長を兼務した。1947年3月より戦災復興院特別建設局長となり、1947年7月には戦災復興院次長に就任。同年12月に辞職。1948年4月に弁護士登録。1949年1月から1976年12月まで衆議院議員を務め、その間、1950年6月から1952年8月までは国務大臣の職にあり、1950年6月から1951年12月までは法務総裁を務めた。1962年7月から1964年7月まで労働大臣、1966年12月から1967年11月まで運輸大臣を歴任した。1981年10月没。</p>		<p>内務省土木局河川課／傷兵保護院／内務省計画局／厚生省労働局／岡山県警察部／内務省国土局／都市計画課／防空総本部／戦災復興院／特別建設部／特別建設局／衆議院議員／法務総裁／労働大臣／運輸大臣</p>		<p>秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、110頁。</p>

人名を探す	官僚(内務省)	沖守固	おきもりかた	1841(天保12)年生。鳥取藩出身。別名に沖探三。最高爵位は男爵。父は御用絵師沖一峨。1863(文久3)年池田慶徳上京に随従して京都詰となる。1864(元治元)年御小姓。弟剛介による暗殺事件に連座して謹慎。1866(慶応2)年赦免。1868年京都留守居、公用人、公議人。1869年徴士。1870年鳥取藩権大参事。1871年大蔵七等出仕。大蔵理事官随伴として岩倉使節団に参加、後に英国留学生となる。1878年帰国、内務少書記官。1879年群馬県大書記官。1880年外務少書記官。1881年神奈川県令。1886年神奈川県知事。1889年長崎県知事。1890年元老院議官、貴族院勅選議員。1891年滋賀県知事となるも大津事件の引責で辞職。1892年和歌山県知事。1897年大阪府知事。1898年愛知県知事。1911年維新史料編纂会員。1912年死去。	沖探三／沖和歌山県知事／沖神奈川県令／沖外務少書記官	公議人／岩倉遣外使節／神奈川県令／神奈川県知事／長崎県知事／滋賀県知事／大津事件／和歌山県知事／大阪府知事／愛知県知事／維新史料編纂会／徴士／大蔵理事官／英国留学生／群馬県大書記官／外務少書記官／元老院議官／貴族院勅選議員		宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、408頁(執筆:西尾林太郎)。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、234頁。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、151～154頁。
人名を探す	官僚(内務省)	何禮之	がのりゆき	1840(天保11)年生。長崎出身。父は唐通事何静谷。1863(文久3)年長崎奉行所英語稽古所学頭。1867(慶応3)年開成所教授職並。1868年瓊江塾を開設、大阪洋学校の設立にも尽力。同年開成所御用掛、一等訳官。1869年兼造幣局権判事、洋学校督務。1870年大学少博士。1871年文部少教授。同年岩倉使節団に一等書記官として参加、特に木戸孝允に随伴して憲法制度調査に従事。1872年外務二等書記官。1873年帰国。同年駅遞寮五等出仕。1874年内務省五等出仕、台湾蕃地事務局御用掛。1875年第三局長心得。1876年翻訳課長心得、内務権大丞。1877年内務権大書記官兼図書局長。1880年内務大書記官。1884年元老院議官。1890年錦鶏間祇候。1891年貴族院勅選議員。1923年死去。	何一等書記官／何内務省五等出仕／何図書局長／何礼之助	大坂洋学校／開成所／岩倉遣外使節／駅遞寮／台湾一件／蕃地事務局／元老院議官／錦鶏間祇候	何礼之	我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、219～224頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、562～563頁(執筆:清水唯一朗)。
人名を探す	官僚(内務省)	川路利良	かわじとしよし	1834(天保5)生。薩摩藩出身。最終階級は陸軍少将。父は与力川路利愛。1850(嘉永3)年兵具方与力附。1867(慶応3)年兵具方一番小隊長、学兵隊長。同年撃剣稽古場を開設、比志島抜刀隊を組織。1868年戊辰戦争に従軍。1869年兵具奉行。1871年東京府大属、権典事、典事。1872年邏卒総長。東京府の警察権が司法省警保寮に移管されるに伴い司法省に移籍、警保助兼大警視を務める。同年司法理事官随伴員として岩倉使節団に合流、警察制度調査に従事。1873年帰国後、警察制度改革を建議するなど警察制度の整備に尽力。1874年警視庁大警視。1877年西南戦争に際し別働第三旅団を率いる。1879年警察・監獄制度視察のため渡欧するも病状悪化により帰国。同年死去。養子に川路利恭。	川路大警視／河路大警視／川路警視長／川路警保頭／川路少将／河路少将／川路陸軍少将／川路兩少将／川路ノ兩少将	邏卒総長／警保寮／岩倉遣外使節／警視庁／別働第三旅団／抜刀隊／東京府大属／権典事／西南戦争／川路旅団／川路利恭／大久保利通	川路利長	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、599～600頁(執筆:友田昌宏)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第3巻』吉川弘文館、1983年、715～716頁(執筆:小西四郎)。
人名を探す	官僚(内務省)	日下義雄	くさかよしお	1851(嘉永4)年生。会津藩出身。父は藩医石田龍玄。藩校日新館に学ぶ。1868年戊辰戦争に従軍して負傷。1870年大阪英学校に入学。1871年岩倉使節団に同行して渡米、アメリカに留学。1874年帰国。同年紙幣寮七等出仕。1875年免官。1876年正院七等出仕。同年井上馨に同行して渡欧、イギリスに留学。1877年太政官御用掛、太政官権少書記官。1880年帰国。1881年太政官権大書記官兼内務権大書記官。1881年登記法取調局。1882年内務権大書記官。1884年非職、農商務権大書記官・統計課長、一等駅遞官、兼農商務大書記官。1885年駅遞局総監官房長。1886年長崎県令(後に長崎県知事と改称)。1889年非職。1892年福島県知事。1895年弁理公使。1896年免官、第一銀行監査役。1901年京釜鉄道株式会社常務取締役。1902年衆議院議員。1908年第一銀行取締役。1912年衆議院議員、東邦火災保険株式会社社長。1923年死去。	日下権少書記官／日下権大書記官／日下駅遞官／日下知事／日下長崎県知事／日下福島県知事	岩倉遣外使節／井上馨／登記法取調局／長崎県知事／福島県知事／第一銀行／京釜鉄道株式会社／東邦火災保険株式会社		秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』第2版、東京大学出版会、2013年、214～215頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、吉川弘文館、2011年、777頁(執筆:村瀬信一)。

人名を探す	官僚(内務省)	熊谷喜一郎	くまがいき いちろう	1866年生。東京府出身。1892年に帝国大学医科大学を卒業し、すぐに内務省試補となる。1893年、北海道庁参事官に任じられ、以降、内務書記官、拓殖務書記官、農商務省参事官、陸軍省参事官(1901年)、内務省参事官、1902年から1905年には内務大臣官房台湾課長、1905年より樺太民政署民政長官を歴任。1908年には山梨県知事に就任するが休職し、1914年4月より石川県知事に任じられ復職した。	熊谷長官	内務省試補／北海道庁参事官／内務書記官／拓殖務書記官／農商務省参事官／陸軍省参事官／内務省参事官／内務大臣官房台湾課長／樺太民政署民政長官／山梨県知事／石川県知事		人事興信所編『第四版 人事興信録』1915年、<41頁。
人名を探す	官僚(内務省)	後藤新平	ごとうしん ぺい	1857年生。岩手県水沢市出身。1880年からの愛知医学校長を経て、1883年より内務省衛生局に勤務し、1892年に衛生局長となる。1895年の臨時陸軍検疫部勤務を経て、1898年に台湾総督・児玉源太郎より台湾総督府民政局長(のち民政長官)に指名され、1898年3月～1898年6月まで務め、旧慣調査や産業育成を推進した。民政局が民政部に改編されると民政長官として1906年11月まで勤務。その後、満鉄の初代総裁に就任し、ほどなくして台湾時代からの部下である中村是公に総裁の職を引き継いで帰国。1908年に通信大臣(鉄道院総裁兼務)となり1911年8月に辞職、1912年に再度通信大臣(鉄道院総裁・拓殖局総裁兼務)に就任、1913年2月辞職。1916年には寺内内閣の内務大臣兼鉄道院総裁となり、1918年には外務大臣に就任して日本のシベリア出兵を推し進めた。1920年より東京市長を務め、1923年には再度内務大臣に就任し、関東大震災後には帝都復興院総裁を兼務して、被災した東京の復興計画に従事した。1929年4月没。	後藤民政長官 ／後藤台湾総督府民政長官 ／後藤長官 ／後藤帝都復興院総裁 ／後藤鉄道院総裁 ／後藤後藤総裁 ／後藤拓殖局副総裁 ／後藤外務大臣 ／後藤伯 ／後藤子 ／後藤男 ／内務大臣 後藤男爵	後藤大臣／後藤内務大臣 ／後藤通信大臣 ／内務省衛生局長 ／臨時陸軍検疫部 ／台湾総督府民政長官 ／南満洲鉄道株式会社総裁 ／鉄道院総裁 ／通信大臣 ／拓殖局総裁 ／シベリア出兵 ／西比利亞出兵問題二関スル意見 ／日露協会 ／内務大臣 ／東京市長 ／帝都復興院総裁 ／大日本連合青年団 ／後藤一蔵		「後藤新平」(鳥海靖執筆)臼井勝美ほか編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001年、423-424頁。「後藤新平」(加藤聖文執筆)貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、76-77頁。
人名を探す	官僚(内務省)	重田忠保	しげただ ただやす	1901年8月生。東京府出身。在学中に文官高等試験に合格し、1925年に東京帝国大学政治科を卒業。同年4月警視庁属兼警部、1927年6月警視庁警視、1928年7月地方警視、1935年1月警視庁部長・消防部長、1937年2月岐阜県書記官・警察部長、1939年4月長野県書記官・経済部長、1941年3月大分県書記官・総務部長、1942年11月神奈川県官房長、1943年7月大阪府部長、1945年4月東京都民生局長を歴任。日本敗戦後は、1946年1月戦災復興院次長、特別調達庁総裁を務めた。		警視庁属／地方警視 ／警視庁消防部長 ／岐阜県書記官 ／岐阜県警察部 ／長野県書記官 ／大分県書記官 ／大分県総務部 ／東京都民生局 ／戦災復興院 ／特別調達庁		人事興信所編『第十四版 人事興信録 上巻』1943年、シ19頁。人事興信所編『第十五版 人事興信録 上巻』1948年、シ5頁。「元戦災復興院次長重田忠保」(アジ歴Ref: A17112891800)。

人名を探す	官僚(内務省)	杉山一成	すぎやまか ずなり	1843(天保14)年生。江戸出身。1871年大蔵省監督大佑、出納司一等出仕、検査大属。大蔵理事官随行人員として岩倉使節団に参加。1873年帰国、検査権助。1875年内務省勤業七等出仕。フィラデルフィア博覧会事務官として渡米。1876年帰国。1877年内務権少書記官、仏国博覧会事務官。1878年内務少書記官。1880年死去。	杉山内務少書記官	岩倉遣外使節／フィラデルフィア博覧会／仏国博覧会		「故内務少書記官杉山一成へ祭料下賜」(公02855100)。友田清彦「内務省期における農政実務官僚のネットワーク形成」『農村研究』104、東京農業大学農業経済学会、2007年。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人事典』日外アソシエーツ、2005年、376頁(執筆：富田仁)。
人名を探す	官僚(内務省)	武部六蔵	たけべろく ぞう	1893年生。長崎県出身。1918年7月に東京帝国大学法科大学法律学科を卒業、内務省入省。卒業前の1915年10月に文官高等試験合格。1919年10月長崎県理事官・内務部農林課長、1921年11月福岡県学務課長、1922年8月に内務事務官となり内務省都市計画局勤務。1923年10月帝都復興院建築局庶務課長兼営繕課長、1924年2月内務省復興局建築部庶務課長を歴任。1928年3月に万国著作権会議に参加するためローマへ出張し、その後ヨーロッパ各国、南米を歴訪した。1929年4月に内務省復興局長官官房計画課長、1929年5月復興局長官官房文書課長、1930年4月復興事務局文書課長、1931年1月復興事務局計画課長、1931年4月復興事務局庶務課長を経て、1931年10月に内務	武部関東局総長／武部企画院次長／武部次長／武部総務長官	長崎県理事官／福岡県学務課長／都市計画局／帝都復興院／復興局書記官／秋田県知事／関東局司政部長／関東局総長／企画院次長／満洲国総務長官		「武部六蔵」(山本裕執筆)貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、341-342頁。秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、312頁。
人名を探す	官僚(内務省)	長岡隆一郎	ながおか りゅういち ろう	1884年1月生。東京府出身。1907年11月に文官高等試験に合格。1908年7月に東京帝国大学法科大学法律学科(独法科)を卒業し、東京府属・内務部庶務課勤務となる。同年8月内務属・内務省警保局勤務兼内務大臣官房台湾課勤務、1909年1月兼内務省地方局勤務、同年3月兼内務大臣官房樺太課勤務、同年7月佐賀県事務官・内務部学務課長兼農務課長、1911年3月神奈川県勧業課長兼外事課長、1912年12月和歌山県警察部長、1915年7月内務書記官・内務省警保局警務課長兼衛生局保健課長を務める。1918年1月より休職し、欧米各国へ出張した。1920年1月に休職が満期となり、同年3月内務書記官兼内務監察官・内務大臣官房勤務、同年6月内務監察官兼内務省参事官、1922年10月内務省都市計画局長心得、1923年7月内務省都市計画局長、1923年10月内務省土木局長、1924年12月内務省社会局長官、1929年6月警視總監を歴任して、同年7月依願免本官となる。同年同月より日本敗戦後の1946年3月まで貴族院議員を務めた。その間、1934年12月から1935年5月まで関東局総長兼駐満洲国大使館参事官を務めた。1935年5月に退官し、満洲国國務院総務庁長に就任するが1936年3月に辞職した。日本敗戦後は1946年9月から1951年8月まで公職追放となった。1963年11月没。	長岡内務書記官／長岡社会局長官／長岡総長／長岡関東局総長／長岡総務庁長	内務属／内務省警保局／内務大臣官房台湾課／内務省地方局／内務大臣官房樺太課／佐賀県事務官／警保局警務課長／衛生局保健課長／内務書記官／内務監察官／内務省参事官／都市計画局／土木局長／社会局長官／警視總監／貴族院議員／関東局総長／在満洲国大使館／國務院総務庁長		人事興信所編『第十二版 人事興信録 下巻』1939年、ナ158頁。人事興信所編『第十四版 人事興信録 下巻』1943年、ナ144頁。秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、364-365頁。
人名を探す	官僚(内務省)	中野健明	なかのた けあきら	1844(弘化元)年生。佐賀藩出身。父は藩士中野忠大夫。1869年大学校中助教兼中寮長、大寮長、外務少丞、神奈川県大参事。1870年司法少判事、外務権大丞。1871年司法権中判事。司法理事官随行人員として岩倉使節団に参加。1873年帰国、外務一等書記官(仏国在勤)。1878年帰国、外務権大書記官・公信局副長。1879年公信局長心得。1880年外務一等書記官(蘭国在勤)。1882年帰国、大蔵大書記官・関税局長。1886年兼主税局長。1890年長崎県知事。1893年神奈川県知事。横浜検疫所・横浜商業会議所の設立に尽力。1898年死去。甥に岡田三郎助。	中野神奈川県知事／中野外務少丞／中野外務権大丞／中野外務権大書記官／中野外務一等書記官／中野大蔵大書記官	岩倉遣外使節／公信局／関税局／主税局／長崎県知事／神奈川県知事／横浜検疫所／横浜商業会議所／岡田三郎助／外務少丞／外務権大丞／外務一等書記官／外務権大書記官／大蔵大書記官		宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、951頁(執筆：西尾林太郎)。秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、372頁。

人名を探す	官僚(内務省)	長與專齋	ながよせん さい	1838(天保9)年生。大村藩出身。別名に長与兼繼。父は侍医長与中庵。1849(嘉永2)年藩校五教館に学ぶ。1854(安政元)年大坂に遊学、適塾に学ぶ。1858(安政5)年適塾塾頭。1860(万延元)年長崎に遊学。1861(文久元)年養生所にてポンペに師事。1864(元治元)年大村藩侍医。1866(慶応2)年長崎に遊学。精得館にてボードウィンに師事。1868年精得館医師頭取、長崎医学学校学頭。1870年大学少博士。1871年文部少丞兼文部中教授、文部省六等出仕、文部中教授。文部理事官随員として岩倉使節団に参加、衛生制度の調査に従事。1873年帰国後、医務局長を務める。1874年東京医学学校長。1875年内務省衛生局長となり、医制・医師免許制度を整備。1876年内務大丞、1877年東京大学医学部総理心得、内務大書記官・衛生局長。1879年中央衛生会議員。1881年文部省御用掛。1882年東京検疫局長、衛生局長、中央衛生会副長。1885年検疫事務取調委員。1886年衛生局長、元老院議員。1889年医術開業試験委員長。1890年兼中央衛生会長、貴族院議員。1891年依願免官。1892年宮中顧問官。1895年臨時検疫局長。1900年臨時検疫局副総裁。1901年大日本私立衛生会頭。1902年死去。子に長与称吉・長与程三・長与又郎・岩永裕吉・長与善郎。	長与文部五等出仕／長与中教授／長与内務三等出仕／長与衛生局長／長与内務大書記官	ポンペ／ボードウィン／精得館／長崎医学学校／岩倉遣外使節／医務局／東京医学学校／衛生局／医制／中央衛生会議／東京検疫局／医術開業試験委員／中央衛生会／臨時検疫局長／大日本私立衛生会／長与程三／長与又郎／岩永裕吉／長与善郎	長与專齋	外山幹夫『医療福祉の祖長与專齋』思文閣出版、2002年。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012、971頁(執筆:林彰)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、342～351頁。小川鼎三ほか校注『松本順自伝・長与專齋自伝』平凡社、1980年。
人名を探す	官僚(内務省)	松村光磨	まつむらみ つまる	1894年1月生。佐賀県出身。1917年10月に文官高等試験に合格し、1918年7月に東京帝国大学法科大学法律学科(英法科)を卒業。同年10月三重県警部兼三重県工場監督官補、1919年6月三重県警察部工場課長、同年9月内務属・監察官室勤務兼警保局図書課勤務、1920年5月長野県理事官・内務部地方課長、1922年6月静岡県内務部産業課長、1923年5月静岡県内務部地方課長、1924年10月視学官、1925年9月広島県庶務課長、1928年7月長崎県学務部長、1929年7月徳島県警察部長、1930年3月内務事務官兼内務書記官・土木局港湾課長、1932年6月内務省土木局河川課長、1934年3月内務大臣官房都市計画課長、1936年3月栃木県知事、1937年10月内務省計画局長、1940年4月神奈川県知事、1942年1月東京府知事、1943年7月東京都次長、1944年8月広島県知事を歴任し、1945年4月に依願免本官となる。日本敗戦後、1945年11月に戦災復興院次長に就任し、1946年1月に依願免本官。同年3月より弁護士登録。同年9月から1951年8月まで公職追放となった。1963年6月没。	松村事務官	三重県警部／工場監督官／三重県警察部／内務属／監察官室／内務省警保局図書課／長野県理事官／静岡県内務部／視学官／長崎県学務部／徳島県警察部／内務事務官／内務書記官／内務省土木局港湾課／内務省土木局河川課／内務大臣官房都市計画課／栃木県知事／内務省計画局／神奈川県知事／東京府知事／東京都次長／広島県知事／戦災復興院		秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、484頁。
人名を探す	官僚(内務省)	安場保和	やすばや すかず	1835(天保6)年生。熊本藩出身。最高爵位は男爵。父は藩士安場源右衛門。藩校時習館や横井小楠のもとで学ぶ。歩頭、鉄砲副頭を務める。1868年徴士・内国事務掛、東海道鎮撫総督府参謀。1869年東京府大属、胆沢県大参事。1870年酒田県大参事、胆沢県大参事、熊本藩権大参事試補、少参事。1871年大蔵大丞、租税権頭。同年岩倉使節団に随員。1872年帰国。同年福島県権令、福島県令。1875年愛知県令。1878年地方官会議幹事。1880年元老院議員。1881年参事院議員。1885年元老院議員。1886年福岡県令、福岡県知事。1892年愛知県知事、貴族院勅選議員。1897年北海道長官。1898年辞職。1899年死去。子に安場末喜、孫に安場保健、安場保雄、娘婿に後藤新平など。	安場一平／安場参事院議員／安場租税権頭／安場福島県令／安場福島県権令／安場愛知県令／安場福岡県知事／安場北海道庁長官	東海道鎮撫総督府／岩倉遣外使節／福島県令／愛知県令／地方官会議／福岡県令／福岡県知事／愛知県知事／北海道長官／租税権頭／大蔵大丞／元老院議員／参事院議員／安場末喜／安場保健／安場保雄／後藤新平	安場安勝	我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、364～370頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、686～687頁(執筆:小林和幸)。



人名を探す	官僚(農商務省)	岩山敬義	いわやまたかよし	<p>1839(天保10)年生。薩摩藩出身。別名に岩山直樹。父は藩士岩山直克。従兄弟に西郷隆盛。島津斉彬の御小姓を務める。斉彬死後は表方吏員・薩兵隊副隊長を歴任。1864(元治元)年上野景範に英学を学ぶ。1866(慶応2)年騎兵科諸科伝習を受け、騎兵隊長となる。維新後は共立学舎に学び、塾監を務める。1871年民部省地理司権少佐准席、農事取調御用のため米国派遣。同年勸業司五等出仕、勸業少属。大蔵理事官随行として岩倉使節団に合流、農事牧畜視察に従事。1872年租税少属。1873年帰国、租税大属・勸業課勤務。1874年勸業権助・農務課長、牧羊開業掛。1877年内務少書記官、勸農局事務取扱、動植課長。1878年動植課長兼総州牧羊場長取香種畜場長。1879年兼庶務課長、内務権大書記官。1880年陸産課兼下総種畜場長、兼三田育種場長。1881年農商務権大書記官・陸産課長。1882年下総種畜場長。1883年製糸諮詢会会頭、農務局長、農商務大書記官、製茶共進会幹事、繭糸織物陶漆器共進会幹事。1885年兼駒場農学校長、兼宮内省御用掛。1886年農務局長、元老院議官。1887年宮崎県知事。1891年石川県知事。1892年死去。</p>	岩山直樹／岩山壮八郎／岩山勸業権助／岩山権助／岩山農務局長／岩山議官	西郷隆盛／共立学舎／民部省出仕／民部省地理司／大蔵省出仕／勸業司／勸業寮／勸農寮／岩倉遣外使節／勸業権助／農務課／勸農局／動植課／下総国牧羊場／取香種畜場／下総種畜場／三田育種場／農商務権大書記官／製糸諮詢会／農商務省農務局／製茶共進会／繭糸織物陶漆器共進会／駒場農学校／宮崎県知事／石川県知事		友田清彦「明治初期の農業結社と大日本農会の創設(1)」『農村研究』102、2006年。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、9～17頁。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上巻、新人物往來社、2010年、194頁(執筆:寺尾美保)。
人名を探す	官僚(農商務省)	富田冬三	とみたふゆぞう	<p>1838(天保9)年生。江戸出身。別名に富田達三、富田命保。父は代官手付富田命孝。昌平黌に学ぶ。1860(万延元)年外国奉行書物御用出役。1861(文久元)年水野忠徳に随行して小笠原へ派遣。1865(慶応元)年外国奉行支配調役。同年柴田剛中に随行して渡欧。1870年民部省・大蔵省に出仕。1871年大蔵権大録、大蔵中録、租税権大属。大蔵理事官随行として岩倉使節団に参加、会計専務を務める。1873年帰国、租税大属。1874年勸業大属、条約改正掛。1877年内務省書記官・勸商局勤務。1879年庶務局勤務、兼図書局勤務。1881年内国勸業博覧会審査官、農商務少書記官・商務局勤務、会社課長、農商務権大書記官、工務局長。1885年兼書記局勤務。1889年非職。1891年依願免官。1914年死去。甥に高田早苗。</p>	富田達三／富田命保／富田工務局長	小笠原／柴田日向守／岩倉遣外使節／条約改正掛／内国勸業博覧会審査官／会社課／工務局／高田早苗		富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、480～481頁(執筆:富田仁)。田中弘之『幕末の小笠原 欧米の捕鯨船で栄えた緑の島』中公新書、1997年。福地桜痴『懐往事談』民友社、1894年。友田清彦「内務省期における農政実務官僚のネットワーク形成」『農村研究』104、2007年。『官報』第1698号、1889年3月1日。「富田冬三特旨叙位ノ件」(Ref.A12090220800)。

人名を探す	官僚(通信省)	田健治郎	でんけんじろう	1855年2月生。柏原藩出身。1873年より豊岡・熊谷・愛知の諸県にて官務に就く。1876年司法省に出仕(愛知裁判所・名古屋裁判所安濃津支庁詰)。1879年高知県警察に移る。高知県警部長(1882)・神奈川県警部長(1883)・埼玉県警部長(1888)を歴任。通信書記官住復課長・兼大臣官房第四課長・兼文書課長(1890)、兼記録課長・兼通信大臣秘書官官房秘書課・文書課長(1891)、通信省郵便局長・通信局長(1893)、電務局長・依願免本官(1897)、通信次官・依願免本官・関西鉄道株式会社総支配人・同社長(1898)、通信総務長官(1900)、依願免本官・衆議院議員(1901)、通信総務長官・通信次官(1903)、依願免本官・貴族院議員(1906)、九州炭鉱汽船株式会社社長(1907)、通信大臣(1916)、台湾総督(1919)、農商務大臣(1923)、枢密顧問官(1926)。1930年11月没。		通信書記官／通信総務長官／衆議院議員／通信次官／貴族院議員／通信大臣／台湾総督／農商務大臣／枢密顧問官／南洋協会会頭	秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、345頁。
人名を探す	官僚(通信省)	堂本貞一	どうもとていいち	1893年12月生。東京府出身。1916年3月に東京外国語学校ドイツ語科を卒業し、1919年10月高等文官試験に合格。通信書記官を経て、1920年6月に朝鮮総督府通信事務官(通信局書記)となり、1921年3月には朝鮮総督府通信副事務官を務め、続いて釜山郵便局監督課長、1922年6月朝鮮総督府通信局外事課勤務、1923年6月同電気課勤務となり、1926年11月より朝鮮総督府道事務官として忠清北道財務部長を務め、1929年1月より慶尚北道財務部長、同年11月より仁川税関長、1931年1月より新義州税関長を歴任。1932年2月より江原道内務部長を務め、同年12月からは朝鮮総督府事務官に就任し、朝鮮総督官房外事課勤務となり、満洲国新京に駐在した。1936年3月より朝鮮総督府殖産局商工課長を務め、同年12月南洋庁事務官に任じられ、南洋庁内政部長に就任し、南洋庁長官官房調査課長を兼務した。1944年6月8日に依願免本官。	堂本事務官	通信書記官／朝鮮総督府通信局／朝鮮総督府道事務官／忠清北道財務部長／仁川税関長／新義州税関長／朝鮮総督府事務官／朝鮮総督府官房外事課／朝鮮総督府殖産局／南洋庁事務官／南洋庁内政部長	朝鮮人事興信録編集部『昭和十年版 朝鮮人事興信録』1935年、322-323頁。人事興信所編『第十三版 人事興信録 下巻』1941年、ト28頁。
人名を探す	官僚(拓務省)	高橋進太郎	たかはししんたろう	宮城県出身。1928年に東北帝大法理科を卒業し、拓務大臣官房司計課勤務、南洋庁拓殖部長を経て、1939年11月に拓務書記官・拓務省殖産局鉱務課長を務め、1940年11月より拓務省拓南局第一課長に就任。		拓務大臣官房／南洋庁拓殖部長／拓務書記官／拓務省殖産局鉱務課／拓務省拓南局第一課	人事興信所編『第十三版 人事興信録 下巻』1941年、夕142頁。
人名を探す	官僚(大蔵省)	大野直輔	おおのなおすけ	1841(天保12)年生。徳山藩出身。父は藩士大野篤直。藩校興讓館・長州藩校明倫館に学ぶ。1865(慶応元)年山崎隊総管。1868年毛利元功の従者として渡英、経済学を学ぶ。1872年大蔵理事官随員として岩倉使節団に合流。1873年帰国、租税寮七等出仕、造幣寮七等出仕。1874年造幣権助。1877年大蔵少書記官・造幣局勤務。1880年造幣局副長、大蔵権大書記官。1881年造幣局長。1882年議案局理事。1885年預金局長兼造幣局勤務。1888年兼銀行局長。1889年会計検査院部長、第三部主管、文官普通試験委員長。1899年第四部主管。1921年死去。子に大野守衛。	大野会計検査院部長	毛利元功／岩倉遣外使節／租税寮／造幣寮／大蔵省権大書記官／造幣局／議案局／預金局／銀行局／会計検査院部長／文官普通試験委員／日本赤十字社常議員／錦鶏間祇候／大野守衛	富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人事典』日外アソシエーツ、2005年、177頁(執筆:楠家重敏)。秦郁彦編『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会、1981年、357-359頁。「正四位勲三等大野直輔以下二名叙位ノ件」(Ref.A10110638100)。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上巻、新人物往来社、2010年、276頁(執筆:富成博)。人事興信所編『人事興信録 第5版』(人事興信所、1918年)、106頁。

人名を探す	官僚(大蔵省)	杉浦 儉一	すぎうらけんいち	1877年生。東京府出身。1901年東京帝国大学英法科を卒業し、1902年に文官高等試験に合格。同年1月に司法官試験に採用される。1904年4月には大蔵省試験に転任となり、煙草専売局事務官、煙草専売局書記官、大蔵省専売局参事を経て、1906年に関東都督秘書官に就任し、関東都督官房秘書課長、関東都督秘書官兼関東都督府参事官を務める。帰国後、1907年12月に大蔵省専売局主事となり、1910年12月には大蔵省参事官兼任、1912年より大蔵省専売局経理課長、大蔵省専売局事業部長を歴任し、1918年6月7日から同年同月20日までは大蔵省専売局長官心得を勤めた。1920年2月には南満洲鉄道株式会社理事に就任し、帰国後は、1924年日本勧業銀行理事、1934年極東練乳株式会社監査役、1938年8月東洋葉煙草株式会社社長、加藤製作所株式会社社長、産直島出身。		大蔵省試験補／煙草専売局／関東都督秘書官／関東都督府秘書官／関東都督府官房秘書課／関東都督府参事官／南満洲鉄道株式会社理事／日本勧業銀行	杉浦 儉一	人事興信所編『第十三版 人事興信録 上巻』1941年、27頁。日本勧業銀行編『日本勧業銀行三十年志』日本勧業銀行、1927年、246頁。秦郁彦編『日本官僚制総合事典 1868-2000』東京大学出版会、2001年、35頁。国立公文書館デジタルアーカイブ「任免裁可書」各年度。
人名を探す	官僚(大蔵省)	床次竹二郎	とこなみたけじろう	1866年12月生。鹿児島県出身。1890年に帝国大学法科大学を卒業して大蔵省試験補となり、大蔵省書記官、愛媛県収税長、山形県書記官、新潟県書記官を経て、徳島県知事、秋田県知事を歴任。1906年内務省地方局長となり、1908年4月から同年6月まで樺太庁長官を務めた。1911年、第2次西園寺内閣下で内務次官をつとめたのち、1913年に山本内閣で鉄道院総裁。1914年4月に辞して野に下り、同年5月に衆議院議員となる。その後、1918年に原内閣下で内務大臣兼鉄道院総裁をつとめた。1924年に政友会を離党して政友本党を結成	床次総裁	大蔵省試験補／大蔵省書記官／愛媛県収税長／山形県書記官／新潟県書記官／徳島県知事／秋田県知事／内務省地方局長／樺太庁長官／鉄道院総裁／衆議院議員		人事興信所編『第四版 人事興信録』1915年、と33頁。「床次竹二郎」(瀧口剛執筆)伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典2』吉川弘文館、2005年、162～163頁。日外アソシエーツ株式会社編『明治大植四郎』明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、186頁。
人名を探す	官僚(大蔵省)	中山信彬	なかやまのぶよし	1842(天保13)年生。佐賀藩出身。維新後堺県大参事を経て1870年兵庫県権知事。1871年岩倉使節団に随行。1876年外務権大丞。1878年大阪株式取引所頭取。1884年死去。	中山五等出仕／中山大参事／中山兵庫県大参事／中山兵庫県権知事／中山権知事	兵庫県権知事／岩倉遣外使節／外務権大丞／大阪株式取引所		大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、186頁。
人名を探す	官僚(大蔵省)	長岡義之	ながおかよしゆき	1840(天保11)年生。長州藩出身。1871年正院一等出仕。1872年租税寮七等出仕。大蔵理事官随員として岩倉使節団に合流。1874年帰国、租税権助。1877年大蔵少書記官・神戸税関長兼大阪税関長。1880年大蔵権大書記官。1881年会計検査院二等検査官。1883年審査第一部長。1884年兼恩給局御用掛、兼恩給局主事。1886年死去。子に長岡春一。	長岡租税権助／長岡租税助／長岡大属／長岡税関訳官／長岡少書記／長岡大蔵少書記官／長岡大原令之助／吉原租税助／吉原租税権頭／吉原租税局長／吉原少輔／吉原大蔵少輔	岩倉遣外使節／神戸税関／大阪税関／審査第一部／長岡春一		大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、229頁。手塚晃編『幕末明治海外渡航者総覧』第2巻、柏書房、1992年、128頁。「検査官長岡義之の一名同局御用掛兼勤」(件ノ02846100)「検査官小川原正道」(初代日銀総裁)・吉原重俊の思想形成と政策展開』『法学研究』87-9、2014年。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、1073頁。
人名を探す	官僚(大蔵省)	吉原重俊	よしはらしげとし	1845(弘化2)年生。薩摩藩出身。別名に大原令之助、吉原弥次郎。藩校造士館に学ぶ。1862(文久2)年寺田屋事件に関与し謹慎。翌年釈放。横浜でブラウニングに師事し英語を学び、さらに開成所で英学を修める。1866(慶応2)年薩摩藩留学生として渡米、モンソンアカデミーに入学。1869年卒業、イエール大学にて非正規学生として語学を学ぶ。1870年イエール・ロースクールに入学。同年大山巖の普仏戦争視察に通訳として同行。1872年三等書記官として岩倉使節団に随行。1873年帰国。同年外務省五等出仕、考法局副長、外務一等書記官、大蔵省五等出仕。1874年租税助、横浜税関長。大久保利通の北京派遣に随行。同年帰国、租税権頭。1875年地租改正局四等出仕。1876年大蔵大丞。1877年租税局長兼関税局長。1879年議案局長。1880年横浜正金銀行管理長、大蔵少輔。1882年日本銀行創立委員、日銀総裁。1887年死去。	大原令之助／吉原租税助／吉原租税権頭／吉原租税局長／吉原少輔／吉原大蔵少輔	造士館／海外留学生／開成所／普仏戦争／岩倉遣外使節／外務省五等出仕／外務一等書記官／大蔵省五等出仕／租税助／横浜税関／征台の役／台湾出兵／租税権頭／地租改正局四等出仕／大蔵大丞／租税局／関税局／議案局／横浜正金銀行／大蔵少輔／日本銀行創立委員／日本銀行／日本銀行総裁		小川原正道「初代日銀総裁」・吉原重俊の思想形成と政策展開』『法学研究』87-9、2014年。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、1073頁。
人名を探す	官僚(大蔵省)	若山儀一	わかやまよしかず	1840(天保11)年生。江戸出身。別名に緒方正。実父は医師西川宗庵、後に若山家の養子となる。適塾にて医業を学ぶ。1867(慶応3)年開成所英学教授手伝並出役。1869年大学中助教。1871年大学大助教准席、民部省地理権正、大蔵省租税権助。大蔵省理事官随員として岩倉使節団に参加、米国税制の調査に従事。1874年帰国後、租税助、租税法革制課長。1877年退職。1880年日東保生会社を設立。1881年大政官権大書記官兼農商務権大書記官。1884年参事院議官補。1885年非職。1891年死去。	若山租税権助／若山租税助	岩倉遣外使節／日東保生会社／租税権助／農商務権大書記官／参事院議官補／租税助／租税寮		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第14巻』吉川弘文館、1993年、865頁(執筆:岩崎宏之)。富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、636頁(執筆:楠家重敏)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、900頁(執筆:宮地正人)。
人名を探す	官僚(文部省)	内村良蔵	うちむらりょうぞう	1849(嘉永2)年生。米沢藩出身。別名に内村公平。父は藩医内村慶玄。1869年慶應義塾に入社。1870年大学南校に入る。同年大学小舎長。1871年文部省九等出仕。文部理事官随員として岩倉使節団に参加。1873年帰国。文部省六等出仕、文部少丞、東京博物館御用掛を歴任。1877年東京外国語学校校長。1885年文部省権大書記官、兼東京商業学校御用掛。同年非職。以後は本郷で金貸などを営んだ。1910年死去。養子に内村達次郎。		慶應義塾／大学南校／岩倉遣外使節／東京博物館／東京外国語学校／東京商業学校／内村達次郎		大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、1182頁。富田仁編『新訂増補海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、149頁(執筆:楠家重敏・富田仁)。安岡昭男編『幕末維新人名事典』日外アソシエーツ編『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ、2011年、443頁。松谷昇蔵『中島永元関係資料』における学事巡視日誌』『古文書研究』82、日本古文書学会、1968年、非部
人名を探す	官僚(文部省)	中島永元	なかじまながもと	1844(弘化元)年生。佐賀藩出身。別名に中島秀五郎。父は藩士中島永遠。藩校弘道館・蘭学寮に学ぶ。1865(慶応元)年長崎にてフルベッキに師事。1867(慶応3)年致遠館にて教官を務める。1869年大学中助教兼中寮長、兼大寮長。1870年大学出仕、大学権少丞。1871年文部権少丞、文部省七等出仕・大学南校事務。文部理事官随員として岩倉使節団に参加、欧米の教育事情を視察。1873年帰国後、学校課長兼報告課長。1874年女子師範学校設立御用掛。1876年文部大丞。1877年文部大書記官、報告課副長。1878年兼会計課	中島秀五郎／中島文部大書記官	フルベッキ／岩倉遣外使節／東京女子師範学校／内記局／大学分校／第三高等中学校／医学校取調委員／錦鶏間祇候		大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、1182頁。富田仁編『新訂増補海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、149頁(執筆:楠家重敏・富田仁)。安岡昭男編『幕末維新人名事典』日外アソシエーツ編『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ、2011年、443頁。松谷昇蔵『中島永元関係資料』における学事巡視日誌』『古文書研究』82、日本古文書学会、1968年、非部

人名を探す	官僚(文部省)	島山義成	はたけやまよしなり	1842(天保13)年生。薩摩藩出身。別名に杉浦弘蔵。1865(慶應元)年薩摩藩留学生として渡英、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジで学ぶ。1869年渡米してラドガース・カレッジで修士号を得る。1872年岩倉使節団に三等書記官として合流。1873年帰国。同年文部省五等出仕、開成学校長兼外国語学校長。1874年兼宮内省御用掛、文部省丞、学務局長、督学局長、中督学。1875年大使事務局書類取調御用掛、書籍館長兼博物館長、省督学、中督学。1876年田中不二麿に随行してフィラデルフィア博覧会に参加。同年死去。	杉浦弘蔵	岩倉遣外使節／東京開成学校／外国語学校／大使事務局／書籍館／東京博物館／フィラデルフィア博覧会／中督学／文部少丞／宮内省御用掛／米国百年期博覧会		「故中督学島山義成へ祭資金下賜ノ儀上申」(公01773100)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、155～156頁(執筆:神辺靖光)。富田仁編『新訂増補海を越えた日本人人名事典』日外アソシエーツ、2005年、547～548頁(執筆:安藤重和)。
人名を探す	官僚(工部省)	石橋絢彦	いしばしあやひこ	1853年12月18日(嘉永6年11月18日)生。神奈川県出身。1879年に工学寮を卒業し、1880年には燈台科研究のためイギリスに留学。1883年に帰国し工部省御用掛、1884年工部権少技長を務め、以後、神奈川県技師、通信省燈台局次長、航路標識管理所技師を歴任。1887年工学士、1892年工学博士の学位を取得した。日清戦争後の1895年6月より燈台建設位置測量のため、通信省所有の燈台船・明治丸で朝鮮に派遣され、朝鮮半島沿岸の調査を行った。1895年7月には臨時台湾燈標建設部技師兼任となり、鹿児島・南西諸島・台湾において燈台建設に従事した。1898年には通信技監兼通信技師(高等官二等)となる。1901年11月からは燈台建設のため韓国に派遣され、日露戦争開戦中も燈台建設に従事した。1908年2月に休職。	石橋権少技長／石橋技師	工学寮／工部省御用掛／工学博士／神奈川県技師／航路標識管理所技師／通信技監／通信技師／明治丸／臨時台湾燈標建設部		人事興信所編『初版 人事興信録』1903年、い86-87頁。人事興信所編『第二版 人事興信録』1908年、い109頁。「任免裁可書」各年度(国立公文書館デジタルアーカイブ)。
人名を探す	官僚(工部省)	井上勝	いのうえまさる	天保14(1843)年生。長州藩出身。別名に井上彌吉。最高爵位は子爵。父は藩士井上勝行、後に藩士野村作兵衛の養嗣子となるも維新後に井上姓へ復籍。藩校明倫館で学び、後に長崎で洋学を学ぶ。安政6(1859)年萩に一時帰郷、江戸に出て蕃書調所に学ぶ。万延元(1860)年箱館に出て武田斐三郎に師事。文久3(1863)年イギリスに留学、UCLに学ぶ。1868年UCL修了、帰国。1869年大蔵省造幣寮造幣頭兼民部省鉱山司鉱山正。1870年民部権大丞、工部権大丞兼鉱山正。1871年工部大丞、鉱山寮鉱山頭兼鉄道寮鉄道頭。1872	井上鉄道庁長官／井上鉄道局長官／井上鉄道局長／井上鉄道頭／井上工部大輔／井上工部技監	大島高任	村井正利編『子爵井上勝君小伝』井上子爵銅像建設同志会、1915年。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』1巻、吉川弘文館、1979年、761頁(執筆:原田勝正)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』5巻、板倉聖宣監修『事典日本の科学者 科学技術を築いた5000人』日外アソシエーツ、2014年、148頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、346頁(執筆:野原健一)。「正四位勳四	
人名を探す	官僚(工部省)	大島高任	おおしまたかとう	1826(文政9)年生。盛岡藩出身。父は藩医大島周意。1842(天保13)年江戸に行き蘭医実作阮甫・坪井信道に学ぶ。1846(弘化3)年長崎で蘭学・西洋砲術・採鉱冶金術を修める。手塚律蔵とともにオランダの製鉄技術書「鉄煩鑄造篇」を翻訳。1850(嘉永3)年帰藩。1851(嘉永4)年御鉄砲方。1852(嘉永5)年江戸詰となり砲術を研究。釜石鉄山を開発。1857(安政4)年洋式高炉による初出鉄に成功。1860(万延元)年蕃書調所出役教授。1862(文久2)年箱館奉行所着任。1865(慶應元)年藩会より小坂銀山を開坑。1869年新政府に出仕。大学士助	大島惣左衛門／大島總左衛門／大島周禎／大島鉱山助／大島権正／県下士族高任	岩倉遣外使節／鉱山権頭／鉱山寮／内国勸業博覧会審査官／阿仁鉱山局／小坂鉱山分局／小坂鉱山分局／工部大技長／佐渡鉱山局／日本鉱業会／武田斐三郎／大蔵省／土	大島高任	「大使書類原本在英雑務書類」(Ref.A04017149400)。「休職元工部少技長従六位伯林之助外二名特旨ヲ以テ陸叙ノ件」(任A00189100)。『工部省沿革報告』大蔵省、1889年、218～219頁・316～322頁。大植四郎編著『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、1211頁。高木不二「慶応期の越前藩政と中央政局」『近代日本研究』16、1999年。福井県文書館編『福井藩士履歴3』福井県文書館、2015年、10～11頁。
人名を探す	官僚(工部省)	伯林之助	こまりんのすけ	1848(弘化3)年生。福井藩出身。父は家老伯山城。1864(元治元)年第一次幕長戦争に従軍。1865(慶応元)年補兵隊。1866(慶応2)年訓練掛。1868年留学のため渡英、鉱山学を学ぶ。1869年官費留学生となる。1872年大蔵理事官随員として岩倉使節団に合流、鉱山視察に従事。1873年帰国、工部省七等出仕。1874年鉱山寮六等出仕。鉱山の開発のため釜石に派遣。1877年工部権少技長。1879年少技長。1883年佐渡鉱山局長心得。1884年非職。1888年休職。1911年死去。	伯熊勝	岩倉遣外使節／鉱山寮／佐渡鉱山局／官費留学生／福井藩／工部省／釜石鉱山分局／少技長		「大使書類原本在英雑務書類」(Ref.A04017149400)。「休職元工部少技長従六位伯林之助外二名特旨ヲ以テ陸叙ノ件」(任A00189100)。『工部省沿革報告』大蔵省、1889年、218～219頁・316～322頁。大植四郎編著『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、1211頁。高木不二「慶応期の越前藩政と中央政局」『近代日本研究』16、1999年。福井県文書館編『福井藩士履歴3』福井県文書館、2015年、10～11頁。
人名を探す	官僚(工部省)	長野桂次郎	ながのけいじろう	1843(天保14)年生。江戸出身。別名に米田為八、立石斧次郎、米田桂次郎。父は旗本小花和度正。叔父の通詞立石得十郎より蘭語・英語を学ぶ。1858(安政5)年英語伝習所に入学。1859(安政6)年神奈川運上所通弁見習。1860(万延元)年遣米使節団に見習通詞として同行、米国でトミーの愛称で親しまれる。同年帰国、御雇通詞となる。開成所教授職並出役、外国奉行御書翰掛を歴任。1865(慶応元)年歩兵指図役頭取勤方。1868(慶応4)年歩兵頭並。1870年金沢藩中学東校(後の洋学館)教授。1871年岩倉使節団に二等書記官	立石斧次郎／米田桂次郎／長野御用掛	開成所／岩倉遣外使節／工部省／鉱山寮／開拓使御用／北海道炭鉱／ハワイ／移民監督	長野桂仁郎	今井一良「金沢藩中学東校教師長野桂次郎伝 万延遣米使節トミー少年の生涯」(『石川郷土史学々誌』14、石川郷土史学会、1981年)、今井一良「佐野鼎の英学とTommy・立石斧次郎のこゝろ」(『英学史研究』

人名を探す	官僚(工部省)	藤倉見達	ふじくらけんたつ	1851年3月4日(嘉永4年2月2日)生。膳所藩出身。1869年12月27日(明治2年11月25日)に民部省土木少佐に任じられ、以後、1871年7月2日(明治4年5月15日)工部省十二等出仕、1871年(明治4年8月)工部省燈台権大属を務め、1871年12月10日(明治4年10月18日)より工学修得のためイギリスに留学する。帰国後は、1872年4月(明治5年3月)工部省燈台寮八等出仕、1874(明治7)年12月5日工部省燈台三等上師を務め、1875(明治8)年10月25日より製作寮六等出仕・宇都宮三郎に随行してイギリス・アメリカを訪問した。1877(明治10)年1月31日工部一等技手、1879(明治12)年3月15日工部一等技手、1881(明治14)年1月7日権少技長、1882(明治15)年10月30日工部少技長、1885(明治18)年4月24日工部権大技長を歴任し、同年5月25日に工部省燈台局長に就任した。同年12月22日に工部省が廃止となり、逓信省が新設されると、同年12月28日に逓信権大技長となり、1886(明治19)3月3日には逓信省燈台局長となる。同年4月10日奏任官二等に叙せられ、同年4月12日より燈台及海路諸標位置取調委員、同年11月29日より海路諸標位置調査委員を兼務した。1891(明治24)年7月2日に奏任官一等に叙せられ、同年8月16日に廃官となる。在任中はお雇い外国人プラントンの通訳を務め、プラントンが解雇されたあとは燈台業務の中核を担い、燈台補給船テール号(テールボイル船)や明治丸に搭乗して日本各地の燈台を管理した。プラントンはその手記の中で藤倉を高く評価している。	藤倉英昭／藤倉少技長	土木少佐／燈台権大属／燈台寮八等出仕／テールボイル船／明治丸／一等技手／権少技長／少技長／権大技長／燈台位置選定委員／燈台局長／燈台位置諮詢会／海路諸標位置調査委員会	「元逓信省灯台局長勲六等藤倉見達勲位進級ノ件」(国立公文書館デジタルアーカイブ:任A00255100)。リチャード・H・ブランドン(徳力真太郎訳)『お雇い外人のみた近代日本』講談社学術文庫、1986年、34・113-114頁。
人名を探す	官僚(工部省)	安川繁成	やすかわしげなり	1839(天保10)年生。上野国出身。実父は郷土岩崎八十吉、後に白河藩士安川休翁の養子となる。1854(安政元)年出府して佐藤一斎に師事。帰藩して作事方・町方調役などを歴任。1864(元治元)年開成所に入塾。1866(慶応2)年開成所稽古人世話心得。1867(慶応3)年慶應義塾に入塾。1868年外交方兼留守居役となる。1869年制度寮書記、行政官録事、制度局御用掛、太政官権少史。1871年太政官大主記、左院少議生。1872年左院視察団として欧米視察。同年五等議官。1873年帰国。1875年兼権少外史、兼印刷局副長、地方官会議書記官。1876年工部少丞、検査局長。1877年工部権大書記官・検査兼会計局長。1879年工部大書記官。1880年会計局長専務。1881年統計院幹事。同年安場保和らと私設鉄道保護に関する建議を岩倉具視に提出、日本鉄道会社設立発起人の一人となる。1882年会計検査院検査官、兼工部大書記官、書記局長、兼統計課長。1883年辞職。1886年会計検査院検査官、審査第二部長。1889年検査院第二部主管。1896年辞職。1898年衆議院議員、日本鉄道会社検査委員。1906年死去。	安川文九郎／安川工部権大書記官／安川工部大書記官／安川大書記官／安川統計院幹事／安川会計検査院部長／安川検査院部長／安川少議生	開成所／慶應義塾／岩倉遣外使節／地方官会議／統計院／安場保和／日本鉄道会社／会計検査院／衆議院議員／日本鉄道会社検査委員	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、682頁(執筆:西川誠)。「従三位勲三等安川繁成」A10112609400。
人名を探す	官僚(工部省)	山尾庸三	やまおようぞう	1837(天保8)年生。長州藩出身。最高爵位は子爵。父は庄屋山尾忠治郎。1861(文久元)年箱館奉行によるニコライエフスク航海に随行。1862(文久2)年高杉晋作と英国公使館焼打を行う。1863(文久3)年留学のため渡欧、ロンドン大学やグラスゴーで工学・造船を学ぶ。1868年帰国。1870年民部権大丞兼大蔵権大丞、工部権大丞。1871年工部大丞、工学頭兼測量正、工部少輔。1872年工部大輔。1878年元老院議官。1880年工部卿。1881年参事院議官。1885年法制局長官、京中顧問官、1888年臨時建築局長総裁、また兼善会訓育院を設立	山尾民部権大丞／山尾工部権大丞／山尾権大丞／山尾工学頭／山尾工部少輔／山尾少輔／山吉雄氏	留守政府／工部卿／工学寮／法制局長官／臨時建築局／京中顧問官／参事院／兼善会／訓育院／訓盲啞院／木戸幸一	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、702頁(執筆:鈴木淳)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上柏書房、1995年、354～357頁。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、109～110頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第1巻』吉川弘文館、1979年、753～754頁(執筆:大久保利謙)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、79頁。大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、326頁。「行政裁判所評定官勲六等山尾庸三」
人名を探す	官僚(工部省)	吉雄永昌	よしおながまさ	1843(天保14)年生。長崎出身。別名に吉雄辰太郎。父はオランダ通詞吉雄作之丞。1854(安政元)年稽古通詞。1861(文久元)年オランダ小通詞並。1868年神奈川裁判所通詞、属司補通弁官。1871年四等訳官、大蔵省十一等出仕。大蔵理事官随員として岩倉使節団に参加。1872年随員差免となり米国に滞留。1873年帰国、大蔵省紙幣寮出仕。1874年紙幣寮九等出仕。1875年工部省製作寮八等出仕。同年フィラデルフィア博覧会視察のために渡米。1877年帰国。1878年工部省工部出仕、1882年工部四等属、1882年退職、1884年死去	神奈川裁判所／岩倉遣外使節／紙幣寮／製作寮／阿蘭陀通詞	神奈川裁判所／岩倉遣外使節／紙幣寮／製作寮／阿蘭陀通詞	富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、727頁(執筆:富田仁)。菅原彬州「岩倉使節団のメンバー構成」『法学新報』91-1・2、中央大学法学会、1984年、加藤吉「明治初期の
人名を探す	官僚(司法関係)	井上毅	いのうえこわし	1843(天保14)年生。熊本藩出身。最高爵位は子爵。実父は陪臣飯田権五兵衛、後に陪臣井上茂三郎の養子となる。1852(嘉永5)年必由堂に学ぶ。1862(文久2)年藩校時習館に学ぶ。1867(慶応3)年江戸に遊学、昌平黉にてフランス学を学ぶ。1868年長崎に遊学、名村泰蔵に師事。1870年大学少舎長、中舎長。1871年依願免官、司法省十等出仕。1872年司法中録。司法理事官随員として岩倉使節団に合流。同年司法大録、明法大属。1873年帰国。1874年台湾出兵問題のため大久保利通に随行して渡湾、同年帰国後、司法権中法官	井上文部大臣／井上法制局長官／井上書記官長／井上内閣書記官長／井上枢密院書記官長／井上村法制局参事官	岩倉遣外使節／台湾一件／大久保利通／別働第二旅団／刑法草案審査委員／地方官会議御用掛／琉球処分／明治十四年政変／参事院議官／条約改正御用掛／内閣書記官長／井上馨岩倉遣外使節／中央衛生会議／地方官会議／内閣委員／板垣退助／法律取調委員／法制局／行政裁判所評定官	日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、109～110頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第1巻』吉川弘文館、1979年、753～754頁(執筆:大久保利謙)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、79頁。大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、326頁。「行政裁判所評定官勲六等山尾庸三」
人名を探す	官僚(司法関係)	今村和郎	いまむらわろう	1846(弘化3)年生。土佐藩出身。1869年眞作麟祥の私塾共学社にて仏語を学ぶ。1870年大学少助教。1871年中助教兼大舎長、大舎長兼少助教、文部大助教、文部中助教。文部理事官随員として岩倉使節団に参加。1873年帰国後、左院御用掛。1878年司法省御用掛、太政官権書記官兼司法権少書記官・法制局専務。1879年内務少書記官、中央衛生会議委員、地方官会議御用掛。1880年内閣委員、内務権大書記官。1881年兼参事院院外議官。1882年依願免官、板垣退助の外出遊に随員として随行、1884年帰国後、外務権大書記	岡内俊太郎／岡内大判事	岩倉遣外使節／長崎上等裁判所／大審院刑事局／高等法院／元老院議官／錦鶏間祇候	富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、159頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、378頁(執筆:西尾林太郎)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』
人名を探す	官僚(司法関係)	岡内重俊	おかうちしげとし	1842(天保13)年生。土佐藩出身。最高爵位は男爵。父は藩士岡内清胤。藩の横目職を務め、英国水兵殺害事件や小銃購入に奔走した。1869年刑法官鞫獄判司事、鞫獄副知司事、鞫獄司知事、刑部大解部、刑部少判事。1871年刑部中判事、司法少判事、司法権中判事。司法理事官随員として岩倉使節団に参加。1873年帰国後、司法権大検事。1875年中検事、権大検事。1877年大審院詰判事。1878年長崎上等裁判所長心得。1880年長崎上等裁判所長。1881年大審院刑事局詰、1882年高等法院陪席裁判官、1886年元老院議官	岡内俊太郎／岡内大判事	岩倉遣外使節／長崎上等裁判所／大審院刑事局／高等法院／元老院議官／錦鶏間祇候	富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、159頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、378頁(執筆:西尾林太郎)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』

人名を探す	官僚(司法関係)	岸良兼養	きしらかねやす	1837(天保8)年生。薩摩藩出身。父は藩士岸良兼善。維新前は島津久光の小姓として政局に関与。1868年議政官史官。1869年監察司知事、弾正台大疏、弾正大巡察。1871年刑部少丞、司法少判事、司法権中判事。1872年司法理事官随員として岩倉使節団に合流、パリでポアソナードの講義を受けるなど司法制度調査に従事。同年司法少丞兼司法権大検事。1873年帰国、司法大検事。1875年大審院詰大検事。1877年兼検事局長、大審院詰検事長。九州臨時裁判所などで土族乱の裁判に従事。1879年大審院長。1881年司法小輔	岸良七之丞／岸良大巡察／岸良少丞／岸良検事／岸良大検事／岸良検事長	議政官史官／監察司／岩倉遣外使節／弾正台／刑部省／司法省／ポアソナード／検事局／九州臨時裁判所／大審院長／元老院議官／岸良俊介	岸良兼養	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、670頁(執筆:犬飼ほなみ)。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、327頁。安岡昭男ほか編『幕末維新人名事典』新人物往来社、2011年、670頁(執筆:犬飼ほなみ)。
人名を探す	官僚(司法関係)	小松清治	こまつせいじ	1848(嘉永元)年生。会津藩出身。別名に馬島清治、小松熹盛。父は医師馬島瑞謙。会津藩校日新館にて蘭学を学ぶ。1865(慶応元)年長崎に遊学してレマンよりドイツ語を学び、さらに渡欧してハイデルベルク大学に留学(医学部のち法学)。1870年帰国、和歌山藩に出仕。1871年兵部省御用掛、兵部省七等出仕、外務省七等出仕。同年岩倉使節団に二等書記官として随員。1872年外務三等書記官。1873年兼ウィーン万博事務官。同年帰国、大使事務局に出仕。1874年陸軍省七等出仕・第一局第六課。1875年参謀局第三課、司法省六等出仕・東京上等裁判所詰、六等判事。1877年大阪上等裁判所在勤。1878年宮城上等裁判所在勤、大審院詰。1879年司法省詰。同年依願免官。1885年司法省御用掛、司法書記官。1887年民事局長、民事局長。1891年判事。1893年死去。近年の研究により、ハイデルベルク大学の学籍簿より1868年に学籍登録していたことが判明、最初の日本人ドイツ留学生であることが分かった。	小松熹盛／小松寿盛／小松民事局長	岩倉遣外使節／万国博覧会／埃国博覧会／博覧会事務局／大使事務局／一級事務官／二等書記官／外務三等書記官／陸軍第一局／六等判事／東京上等裁判所／司法書記官／総務局記録課長／司法省書記課長／民事局長	小松清治／小松清次／小松清二	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』(公04081100)。大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、376頁。荒木康彦『近代日独交渉史研究序説』雄松堂出版、2003年。日外アソシエーツ編『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ、2011年、264頁。
人名を探す	官僚(司法関係)	近藤鎮三	こんどうやすぞう	1849(嘉永2)年生。江戸出身。別名に近藤昌綱。父は旗本近藤庫三郎。開成所に学ぶ。1865(慶応元)年開成所教授手伝並出役。1868年静岡学問所四等教授。1869年大学校中得業生。1870年大得業生、大学少助教。1871年文部権大助教、文部中助教。文部理事官随員として岩倉使節団に参加。1873年外務二等書記生・ベルリン公使館在勤。1874年帰国、文部省八等出仕。1875年報告課。1880年文部省御用掛。1881年独逸学協会会員、この頃独逸教育文獻の翻訳に従事。1884年司法少書記官。1886年東京地裁裁判所公員掛	近藤鎮三／近藤二等書記生	岩倉遣外使節／ベルリン公使館／独逸学協会／ベルリン大学／ハイデルベルク大学／長野地方裁判所		上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版、2001年。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上、新人物往来社、2010年、549頁。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、549頁。
人名を探す	官僚(司法関係)	鶴田皓	つるたあきら	1835(天保6)年生。佐賀藩出身。父は陪臣鶴田斌。1853(嘉永6)年江戸に遊学。1856(安政3)年郷学教諭。1868年戊辰戦争に従軍。1869年大学校教授試験補、少助教。1870年大学大録。1871年刑部少判事、司法中判事、明法助。中国法に造詣が深く新律綱領・改定律例の制定に従事。1872年司法理事官随員として岩倉使節団に合流、司法制度を研究。1873年帰国、明法権頭。1875年司法省四等出仕、兼法制局御用掛、刑法按取調掛。1876年司法少丞。1877年司法大書記官。兼大政官大書記官。兼刑法編纂委員。1879年生年不詳。江戸出身。父は代官手代富永惣一郎。1871年田辺太一厄介という身分で岩倉使節団に随員。後に兵部理事官随員を命じられる。1873年帰国。1875年司法七等判事。1878年東京上等裁判所判事。1882年東京控訴裁判所判事。1884年松江始審裁判所長。1888年京都始審裁判長。大審院部長判事。1894年辞職。1899年死去。実弟に矢野次郎、子に富永敏麿。	鶴田弥太郎／鶴田明法助／鶴田元老院議官	新律綱領／改定律令／岩倉遣外使節／明法寮／治罪法草按審査委員／検事局／勅任検事／元老院議官／陸軍刑法審査委員／参事院議官／参事院司法部／商法編纂委員／破産		宮地正人ほか編『明治時代史大事典第2巻』吉川弘文館、2011年、718頁(執筆:西尾林太郎)。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、640頁。我部政男ほか編『勅任官履歴原書』上、大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、568頁。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、482頁(執筆:楠家重敏・富田仁)。
人名を探す	官僚(司法関係)	富永冬樹	とみながふゆき	1835(天保6)年生。佐賀藩出身。別名に西岡周碩、西岡宜軒。父は藩医西岡春益。1868年酒田表取締。1869年酒田県大参事、東京府権少参事。1870年東京府少参事。1871年東京府権大参事、左院少議官、中議官。1872年左院視察団として議事・立法機関等についての調査のため渡仏、パリで統計学・経済学者モーリス・ブロックに師事。同年二等議官。1873年帰国。1875年四等判事・東京上等裁判所詰。1881年宮城控訴裁判所長。1883年長崎控訴裁判所長。1887年大審院判事第一局長。1888年高等法院陸度裁判官。1890年函館控訴	富永七等判事	岩倉遣外使節／田辺太一／東京上等裁判所／七等判事／東京控訴裁判所／松江始審裁判所／京都始審裁判所／大審院部長／矢野次郎／富永敏麿		大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、568頁。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、482頁(執筆:楠家重敏・富田仁)。
人名を探す	官僚(司法関係)	長野文炳	ながのふみあきら	1845(弘化2)年生。高槻藩出身。別名に長野卓之允。1868年刑法官書記試験補。1869年昌平学校教授試験補、刑部大録。1871年庶務大佑、司法七等出仕、司法権少判事。司法理事官随員として岩倉使節団に参加。1873年帰国、権中法官。1875年東京上等裁判所詰七等判事、六等判事。1877年司法省判事。1880年大審院詰判事。1882年死去。	長野刑部大録	昌平学校／岩倉遣外使節／東京上等裁判所／大審院判事		富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、433頁(執筆:楠家重敏)。手塚晃ほか編『幕末明治海外渡航者総覧第2巻』柏書房、1992年、142頁。大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』
人名を探す	官僚(司法関係)	名村泰蔵	なむらたいぞう	1840(天保11)年生。長崎出身。別名に北村元四郎。実父は島村義兵衛、後に通詞名村八右衛門の養子となる。1859(安政6)年オランダ小通詞。1861(文久元)年神奈川奉行所詰。1864(元治元)年横浜製鉄所建築掛。1865(慶応元)年軍艦用材購入のため上海に渡る。1866(慶応2)年仏国博覧会御用掛として徳川昭武一行に随員。1868年長崎府上等通弁。1869年仏学局助教、外務省文書権大佑。1872年司法省七等出仕。司法理事官随員として岩倉使節団に合流。ポアソナードを法律顧問として随員。1873年帰国。1874年台湾出兵に随員。1875年司法省七等出仕。司法理事官随員として岩倉使節団に参加。1873年帰国、権中法官。1875年東京上等裁判所詰七等判事、六等判事。1877年司法省判事。1880年大審院詰判事。1882年死去。	名村検事長／名村司法権大書記官／名村司法大書記官	岩倉遣外使節／ポアソナード／台湾一件／征台の役／大久保利通／翻訳課／治罪法草案審査委員／大審院検事長／加波山事件／大阪事件／大審院判事		宮地正人ほか編『明治時代史大事典第2巻』吉川弘文館、2011年、978頁(執筆:岩谷十郎)。大植四郎『明治過去帳 物故人名事典』東京美術、1971年、1041頁。古川増寿『大札記 長崎人物』長崎県教育委員会
人名を探す	官僚(司法関係)	西岡遼明	にしおかゆめい	1835(天保6)年生。佐賀藩出身。別名に西岡周碩、西岡宜軒。父は藩医西岡春益。1868年酒田表取締。1869年酒田県大参事、東京府権少参事。1870年東京府少参事。1871年東京府権大参事、左院少議官、中議官。1872年左院視察団として議事・立法機関等についての調査のため渡仏、パリで統計学・経済学者モーリス・ブロックに師事。同年二等議官。1873年帰国。1875年四等判事・東京上等裁判所詰。1881年宮城控訴裁判所長。1883年長崎控訴裁判所長。1887年大審院判事第一局長。1888年高等法院陸度裁判官。1890年函館控訴	西岡周碩／西岡東京府少参事／西岡東京府小参事／参事西岡／西岡二等議官／西岡武者小路正五位	酒田表取締／酒田民政局／酒田県大参事／東京府少参事／東京府大参事／左院少議官／中議官／高崎正風／小室信夫／鈴木貫一／安川繁成／岩倉遣外使節／モーリス・ブロック	西岡遼明	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2012年、10頁(執筆:宮崎修多)。「休職判事三位勲三等西岡遼明」A10112750400。
人名を探す	官僚(司法関係)	武者小路實世	むしゃのこうじさねよ	1851(嘉永4)年生。京都出身。最高爵位は子爵。実父は公卿武者小路実建、後に兄の武者小路公香の養子となる。1859(安政6)年元服・昇殿。1871年岩倉使節団に同行して渡欧、ドイツ留学。1874年帰国。1875年華族会館幹事。1876年華族会館司計局長。同年家督相続。1879年麹町区議会議長、司法省御用掛。1881年判事・熊谷裁判所浦和支庁詰、浦和初審裁判所詰、工部省御用掛。1883年参事院御用掛・法制部勤務。1884年参事院議官補。1887年死去。子に武者小路実篤	武者小路正五位	岩倉遣外使節／華族／華族会館／熊谷裁判所／武者小路實篤／武者小路公共／西南戦争	武者小路実世	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、593頁(執筆:小川原正道)。富田仁編『新訂増補海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、664頁(執筆:富田仁)。大津山園夫

人名を探す	官僚(宮内省)	五辻安仲	いつつじやすな	1845(弘化2)年生。京都出身。最高爵位は子爵。父は五辻高仲。1859(安政5)年元服・昇殿。1864(元治元)年禁門の変に伴い参朝停止。1867年赦免。同年書記御用掛。1868年参与・内国事務局権判事、権弁官事、弁官事、東京行幸御用掛。1869年少弁。1870年雅楽長。1871年式部助。同年岩倉使節団に随行。1872年帰国。1876年依願免官、華族第三部長。1877年宮内省御用掛。1884年兼式部寮御用掛、華族局主事。1888年爵位局次官。1906年死去。	五辻大夫／五辻殿／五辻式部助／式部助五辻／五辻弾正大弼／弾正大弼五辻／五辻少丞／五辻	東京行幸御用／岩倉遣外使節／華族局／内国事務局権判事／少弁／権弁官事／弁官事／雅楽長／式部助／爵位局／五辻高仲／五辻長仲／五辻治仲		「五辻家譜」(東京大学史料編纂所)。「宮内省華族局主事五辻安仲叙勲ノ件」(任A00115100)。『人事興信録』初版、人事興信所、1903年。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1999年、95頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、482～483頁(執筆:上野秀治)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第3巻』吉川弘文館、1983年、159頁(執筆:石塚松道)。「枢密院官等
人名を探す	官僚(宮内省)	香川敬三	かがわけいぞう	1839(天保10)年生。水戸藩出身。別名に鯉沼伊織・小林彦次郎・香川広安。最高爵位は伯爵。実父は庄屋蓮田孝定、後に神主鯉沼意信の養子となる。藤田東湖に師事。1863(文久3)年上京して政局に関与、岩倉具視に仕える。1867(慶応3)年高野山拳兵に参加。1868年東山道鎮撫総督府軍監として戊辰戦争に従軍。軍務官権判事、軍務官判事。1869年兵部権大丞。1870年依願免官、制度局出仕、宮内権大丞兼内舎人長。1871年兼制度局御用掛、宮内少丞、岩倉の従者として岩倉使節団に随行。後に宮内理事官随行心得となる。1872年帰国。1876年依願免官、華族第三部長。1877年宮内省御用掛。1884年宮内省少書記官・明宮御用掛。1885年伊藤博文に渡清。帰国後、東宮亮、皇太后宮亮、帝室会計寮奉仕官を歴任。1897年東宮侍従長、1902年宮内卿	鯉沼伊織／香川広安／香川少丞／香川宮内少丞／香川大丞／香川兵部権大丞／香川宮内権大丞／香川高辻少納言／高辻侍従／高辻従三位／修長卿	東山道鎮撫総督府／岩倉遣外使節／岩倉具視／出納課／有栖川宮／閑院宮／皇后宮大夫／華族局長／主殿寮／諸陵寮／主馬寮／帝室制度取調委員／閑院宮別当／土曜寮／議岩倉遣外使節／岩倉具視／侍従／明宮御用掛／伊藤博文／帝室会計審査官／東宮侍従長／大阪行幸／ヘルトミー／宮内少書記官／子爵／宮内書記／東宮亮／東宮主事／皇太后	香川敬蔵	「徳大寺家譜」(東京大学史料編纂所)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』吉川弘文館、1989年、326頁(執筆:川田貞夫)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、852頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第10巻、吉川弘文館、1989年、728～729頁(執筆:杉谷昭)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2011年、976～977頁(執筆:飯塚一幸)。非邦
人名を探す	官僚(宮内省)	高辻修長	たかつじおさなが	1840(天保11)年生。京都出身。最高爵位は子爵。父は高辻以長。1852(嘉永5)年元服・昇殿、文章得業生。1860(万延元)年文章博士。1863(文久3)年大内記、学習院有職。1866(慶応2)年廷臣列参に伴い差控。1867(慶応3)年赦免。1868年大学寮代学頭、侍従。1871年辞職。岩倉具視の従者として岩倉使節団に参加、後に宮内理事官随行心得となる。1872年帰国。1873年侍従。1884年宮内省少書記官・明宮御用掛。1885年伊藤博文に渡清。帰国後、東宮亮、皇太后宮亮、帝室会計寮奉仕官を歴任。1897年東宮侍従長、1902年宮内卿	徳大寺宮内卿／恵大寺宮内卿／宮内卿徳大寺／徳大寺侍従長／徳大寺侍従長／徳大寺内士郎／徳大寺内士郎	徳大寺宮内卿／恵大寺宮内卿／宣撫使／麁香間祇候／侍従長／宮内卿／留守政府／外賓待遇礼式取調／華族局／爵位局／内大臣／先帝御事蹟取調掛／西園寺公朝／徳大寺則摩	徳大寺実則／恵大寺実則	「徳大寺家譜」(東京大学史料編纂所)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』吉川弘文館、1989年、326頁(執筆:川田貞夫)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、852頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第10巻、吉川弘文館、1989年、728～729頁(執筆:杉谷昭)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2011年、976～977頁(執筆:飯塚一幸)。非邦
人名を探す	官僚(宮内省)	徳大寺實則	とくだいじさねつね	1839(天保10)年生。京都出身。最高爵位は公爵。祖父は鷹司政通、父は徳大寺公純。1851(嘉永4)年元服・昇殿。1861(文久元)年議奏加勢。1862(文久2)年国事御用書記。1863(文久3)年議奏。同年八・一八政変に伴い罷免・参内遠慮。1867(慶応3)年赦免、神宮上卿。1868年参与・議定、内国事務局督、権大納言。1869年内廷知事、大納言。1870年脱隊騒動に際し宣撫使として山口藩に派遣。1871年麁香間祇候、宮内省出仕、侍従長、宮内卿。1877年兼一等侍従。1879年外賓待遇礼式取調次長。1894年侍従長、1905年華族局長官	鍋島茂実／鍋島肥前守／松平肥前守／鍋島少将／肥前少将／佐賀藩知事／在伊国鍋島公使／左万里小路右大臣	佐賀藩／小城藩／蓮池藩／鹿島藩／鍋島侯爵／鍋島侯／議定／外国事務局／横浜裁判所／外国官副知事／麁香間祇候／岩倉遣外使節／鍋島公使／鍋島全権公使／鍋島貞幹	徳大寺実則／恵大寺実則	「徳大寺家譜」(東京大学史料編纂所)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』吉川弘文館、1989年、326頁(執筆:川田貞夫)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、852頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第10巻、吉川弘文館、1989年、728～729頁(執筆:杉谷昭)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2011年、976～977頁(執筆:飯塚一幸)。非邦
人名を探す	官僚(宮内省)	鍋島直大	なべしまなおひろ	1846(弘化3)年生。佐賀藩出身。別名に鍋島茂実。最高爵位は侯爵。父は佐賀藩主鍋島直正。1860(万延元)年元服。1861(文久元)年家督相続、佐賀藩主となる。1868年議定・外国事務局輔加勢、外国事務局権輔、横浜裁判所副総督、外国官副知事。1869年麁香間祇候、佐賀藩知事。1871年廢藩置県に伴い免官。同年岩倉使節団に随行して渡欧、イギリスに留学。1873年一時帰国するも再渡英。1879年帰国。同年外務省御用掛。1880年特命全權公使(伊国左輔)。1892年帰国。同年元老院議官兼式部頭。1904年兼式部局長官。1906年	鍋島茂実／鍋島肥前守／松平肥前守／鍋島少将／肥前少将／佐賀藩知事／在伊国鍋島公使／左万里小路右大臣	佐賀藩／小城藩／蓮池藩／鹿島藩／鍋島侯爵／鍋島侯／議定／外国事務局／横浜裁判所／外国官副知事／麁香間祇候／岩倉遣外使節／鍋島公使／鍋島全権公使／鍋島貞幹	徳大寺実則／恵大寺実則	「徳大寺家譜」(東京大学史料編纂所)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』吉川弘文館、1989年、326頁(執筆:川田貞夫)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、852頁。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第10巻、吉川弘文館、1989年、728～729頁(執筆:杉谷昭)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2011年、976～977頁(執筆:飯塚一幸)。非邦
人名を探す	官僚(宮内省)	萬里小路博房	までのこうじひろふさ	1824(文政7)年生。京都出身。父は萬里小路正房。1833(天保4)年元服・昇殿。1857(安政4)年右少弁兼蔵人。1862(文久2)年国事御用掛。1863(文久3)年国事参政。同年八・一八政変に伴い差控。1867(慶応3)年赦免、蔵人頭・参与を務める。1868年制度事務局督、制度事務局輔、議定・京都裁判所総督、会計官知事。1869年宮内卿。1871年宮内大輔。1877年皇太后宮大夫。1884年死去。子に萬里小路通房。	村田経満／村田宮内大丞	京都市裁判所総督／会計官知事／宮内卿／留守政府／万里小路通房／議奏／制度事務局督／参与／議定／山陵総管／制度事務局輔／宮内大輔／皇太后宮大夫／萬里小路季丸／岩倉遣外使節／西南戦争	万里小路博房／万里小路博房	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、495～496頁(執筆:今津敏晃)。「万里小路家譜」(東京大学史料編纂所)。安岡昭男ほか編『幕末維新人名事典』新人物往来社、1994年、92頁。日外アソシエーツ編『明治大正人物事典Ⅰ政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ、2011年、609～610頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、606頁(執筆:落合弘樹)。日本歴
人名を探す	官僚(宮内省)	村田新八	むらたしんぱち	1836(天保7)年生。薩摩藩出身。別名に村田経満。実父は高橋良中、後に村田経典の養子となる。1859(安政6)年誠忠組に参加。1862(文久2)年寺田屋騒動に伴い喜界島に遠島。1864(元治元)年赦免。以後政局に関与し、薩長盟約や薩土盟約の締結に尽力。1868年二番隊監軍として戊辰戦争に従軍。1869年常備隊砲兵隊長。1871年宮内大丞。宮内理事官随行員として岩倉使節団に参加。1874年帰国後、辞職して鹿児島に帰郷。私学校設立に参画し、砲隊学校監督を務めた。1877年二番大隊長として西南戦争に従軍、戦死	大島総督／大島関東総督／大島都督／大島関東都督／大島第三師団長／第九旅団長大島少将／混成旅団長大島少将／関東都督大島子爵／駐遼男爵大島	大島大将／大島中将／大島少将／大島陸軍少将／大島大佐／大島中佐／大島師団長／大島参謀長／中部監軍部参謀／仙台鎮台参謀長心得／東京鎮台参謀長／对馬警備隊司令官／関東総督／関東都督／臨時防疫部長／軍事参議官／混成第九旅団／第三師団／日露戦争		日外アソシエーツ編『明治大正人物事典Ⅰ政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ、2011年、609～610頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、606頁(執筆:落合弘樹)。日本歴
人名を探す	陸軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	大島義昌	おおしまよしまさ	1850年生まれ。山口県(長州藩)出身。最終階級は中将。東京海南義塾を経て、1880年陸士卒。1881-1885年フランス留学。1886年陸大教官。1887年欧州出張(乃木希典・川上操六に随行)。1889年参謀本部第1局員。1890年参謀本部副官。1892年ロシア公使館付。1894年臨時京城公使館付(韓国政府軍部顧問)。1895年-1896年閔妃事件で入獄。1896年1月無罪判決。同年台湾総督府参謀兼軍務局陸軍部第1課長。1898年西部都督部参謀長。1900年第12師団参謀長。1901年対馬警備隊司令官。1902年大阪砲兵工廠提理。1904年第2軍兵站監。同年第4軍砲兵部長。1905年満洲軍重砲隊司令官。1906年由良要塞司令官。同年樺太守備隊司令官。1907年樺太庁長官兼任。1908年由良要塞司令官。1911年陸軍技術審査部長。1913年陸軍大臣(山本内閣)1914年待命。1917年予備役編入。1921年後備役編入。1927年没。	楠瀬陸軍大臣／楠瀬少将／楠瀬司令官／楠瀬中将／楠瀬大佐／楠瀬中佐／楠瀬少佐／楠瀬少尉／楠瀬中尉／楠瀬樺太庁長官／楠瀬砲兵	砲兵少尉／砲兵少佐／台湾総督府軍務局陸軍部第一課長／砲兵中佐／砲兵大佐／第十二師団参謀長／大阪砲兵工廠提理／樺太守備隊司令官／樺太庁長官／第四軍砲兵部長／由良要塞司令官／陸軍技術審査部長／陸軍大臣		秦郁彦編『陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、59-60頁。人事興信所編『第四版 人事興信録』1915年、<48頁。
人名を探す	陸軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	楠瀬幸彦	くすのせさちひこ	1858年3月15日生。高知県出身。最終階級は中将。東京海南義塾を経て、1880年陸士卒。1881-1885年フランス留学。1886年陸大教官。1887年欧州出張(乃木希典・川上操六に随行)。1889年参謀本部第1局員。1890年参謀本部副官。1892年ロシア公使館付。1894年臨時京城公使館付(韓国政府軍部顧問)。1895年-1896年閔妃事件で入獄。1896年1月無罪判決。同年台湾総督府参謀兼軍務局陸軍部第1課長。1898年西部都督部参謀長。1900年第12師団参謀長。1901年対馬警備隊司令官。1902年大阪砲兵工廠提理。1904年第2軍兵站監。同年第4軍砲兵部長。1905年満洲軍重砲隊司令官。1906年由良要塞司令官。同年樺太守備隊司令官。1907年樺太庁長官兼任。1908年由良要塞司令官。1911年陸軍技術審査部長。1913年陸軍大臣(山本内閣)1914年待命。1917年予備役編入。1921年後備役編入。1927年没。	楠瀬陸軍大臣／楠瀬少将／楠瀬司令官／楠瀬中将／楠瀬大佐／楠瀬中佐／楠瀬少佐／楠瀬少尉／楠瀬中尉／楠瀬樺太庁長官／楠瀬砲兵	砲兵少尉／砲兵少佐／台湾総督府軍務局陸軍部第一課長／砲兵中佐／砲兵大佐／第十二師団参謀長／大阪砲兵工廠提理／樺太守備隊司令官／樺太庁長官／第四軍砲兵部長／由良要塞司令官／陸軍技術審査部長／陸軍大臣		秦郁彦編『陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、59-60頁。人事興信所編『第四版 人事興信録』1915年、<48頁。

人名を探す	陸軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	児玉源太郎	こだまげん たろう	1852年生。徳山藩出身。最終階級は陸軍大将。兵部省御雇(1869)、第2大隊副官(1871)、歩兵第19大隊副官・大阪鎮台副官(1872)、熊本鎮台准参謀(1874)、熊本鎮台幕僚参謀副長(1876)、近衛局参謀・近衛幕僚参謀副長(1878)、東京鎮台歩兵第2連隊長(1880)、参謀本部管東局長・参謀本部1局長(1885)、兼陸大幹事(1886)、監軍部参謀長兼陸大幹事・兼陸大校長(1887)、陸大次官兼軍務局長(1892)、第3師団長・台湾総督(1898)、兼陸軍大臣(1900)、兼内務大臣・兼文部大臣・参謀本部次長(1903)、満洲軍総参謀長(1904)、参謀本部次長事務取扱(1905)、参謀総長・兼満鉄創立委員長(1906)。1906年7月死去。	児玉参謀次長／児玉参謀本部次長／児玉参謀総長／児玉参謀長／児玉陸軍大臣／児玉大臣／児玉総督／児玉司令官／児玉師団長／児玉大将／児玉少将	陸軍大学校長／台湾総督／陸軍大臣／満洲軍総参謀長／児玉秀雄／児玉友雄／後藤新平／乃木希典／熊本鎮台／神風連／西南戦争／日清戦争／日露戦争	児玉源太郎／児島源太郎	秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、66頁。
人名を探す	陸軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	寺内正毅	てらうちま さかた	1852年生まれ。山口(長州藩)出身。御楯隊隊員として第二次長州征討に、また整武隊士として戊辰戦争に従軍した。1872年教導団付、1874年戸山校教則課程卒業、1875年陸士生徒司令副官、1877年後備歩兵第6大隊長心得・近衛歩兵第1連隊第1中隊長、1879年陸士生徒大隊司令官、1882年総務局出仕、1883年フランス公使館付、1886年陸軍大臣官房副長・陸相秘書官・兼戸山校次長、1887年兼陸士校長心得・陸士校長、1891年第1師団参謀長、1892年参謀本部第1局長、1894年大本営運輸通信長官、1895年征清大総督府付・参謀本部第1局長事務取扱、1896年参謀本部付・歩兵第3旅団長、1898年教育総監・陸士校長事務取扱、1900年参謀本部次長・鉄道会議議長、1901年兼陸大校長事務取扱、1902年陸相、1904年兼教育総監、1907年鉄道会議議長、1908年兼馬政長官、1910年兼統監・兼朝鮮総督、1911年朝鮮総督・軍事参議官、1916年首相。1919年死去。	寺内少佐／寺内中佐／寺内大佐／寺内歩兵少佐／寺内歩兵中佐／寺内歩兵大佐／寺内陸軍歩兵大佐／寺内少将／寺内中将／寺内陸軍少将／寺内陸軍中将／寺内参謀本部次長／寺内参謀次長	陸軍歩兵少佐／陸軍歩兵中佐／歩兵第三連隊長／参謀本部次長／陸軍大臣／外務大臣／教育総監／馬政長官／韓国統監／朝鮮総督／軍事参議官／内閣総理大臣		日外アソシエーツ株式会社編『明治大正人物事典 I 政治・軍事・産業篇』2011年、416-417頁。秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』東京大学出版会、1991年、105-106頁。陸軍省編『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿 大正3年7月1日調』(陸軍省、1914年)3頁。
人名を探す	陸軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	中村覚	なかむらさ とる	1854年生まれ。滋賀県(彦根藩)出身。最終階級は大将。藩徒士を経て、1873年教導団卒、1874年陸士入、1875年少尉任官。1879年参本管西局員、1886年歩10連隊大隊長、1887年参本2局員、1888年第1師団参謀、1889年陸大教官、1891年第5師団参謀、同年東宮武官、1894年大本営侍従武官、同年東宮武官兼侍従武官、1896年侍従武官、1897年歩46連隊長、1898年東部都督部参謀長、1900年台湾総督府陸軍幕僚参謀長、1902年歩2旅団長、1904年出征、旅順にて戦傷(白襪隊指揮官)、1905年教総参謀長仰付、1906年教総参謀長、1907年第15師団長、同年男爵、1908年侍従武官長、1913年東京衛戍総督、1914年関東都督、1917年軍事参議官、1919年後備役。1925年死去。	中村都督／中村関東都督／中村東宮武官／中村侍従武官長	教導団／東宮武官／東部都督部参謀長／台湾総督府陸軍幕僚参謀長／教育総監部参謀長／侍従武官長／東京衛戍総督／関東都督／軍事参議官	中村覚	秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、113頁。
人名を探す	陸軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	乃木希典	のぎまれす け	1849年11月生。長府藩出身。最終階級は陸軍大将。長州藩報国隊などに参加、維新後には伏見御親兵や豊浦藩陸軍練兵教官に就く。東京鎮台第2分営(1871)、東京鎮台第3分営第2心得(1872)、名古屋鎮台第2心得(1873)、陸軍卿伝令使(1874)、歩兵第14連隊長心得(1875)、兼第1旅団参謀・熊本鎮台参謀(1877)、歩兵第1連隊長(1878)、東京鎮台参謀長(1883)、歩兵第11旅団長(1885)、近衛歩兵第2旅団長(1889)、歩兵第5旅団長(1890)、歩兵第1旅団長(1892)、第2師団長(1895)、台湾総督(1896)、第11師団長(1898)、留守近衛師団長・第3軍司令官(1904)、軍事参議官(1906)、兼学習院院長(1907)。1912年9月自決。	乃木大将／乃木中将／乃木少将／乃木陸軍大将／乃木陸軍少将／乃木大佐／乃木中佐／乃木少佐／乃木陸軍中佐／乃木陸軍少佐／乃木陸軍歩兵大佐／乃木歩兵大佐	台湾総督／学習院院長／軍事参議官／第3軍／近衛師団／第2師団／第11師団／東京鎮台／熊本鎮台／西南戦争／日清戦争／征台の役／日露戦争／旅順／旅順要塞／203高地／水師營／奉天会戦／ステッセル		秦郁彦編『日本陸海軍総合事典 第2版』東京大学出版会、2005年、121頁。
人名を探す	陸軍軍人(将官)	太田徳三郎	おおたとく さぶろう	1849(嘉永2)年生。広島藩出身。最終階級は陸軍中将。1868年藩命によりフランスに留学。1871年兵部理事官随員として岩倉使節団に合流。1875年帰国、陸軍省七等出仕・陸軍士官学校教官。1881年大阪砲兵工廠監務、大砲制式取調委員。同年造兵技術研究のため渡欧。1882年帰国。1885年砲兵局出仕、砲兵会議議員。1886年鳥尾小弥太に随員して渡欧。1887年帰国。1888年砲兵第一方面提理。1889年要塞砲兵幹部練習所長。1890年大阪砲兵工廠提理。1900年渡欧、同年中帰国。1904年死去。	太田砲兵大尉／太田陸軍砲兵大尉／太田砲兵少佐／大砲兵少佐／太田砲兵中佐／太田陸軍砲兵大佐／太田砲兵工廠提理／太田陸軍少将	岩倉遣外使節／陸軍士官学校教官／大阪砲兵工廠／砲兵第一方面／大砲制式取調委員／砲兵会議／鳥尾小弥太／要塞砲兵幹部練習所／大阪砲兵工廠提理	大田徳三郎	『官報』第6360号、1904年9月9日。大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、789頁。「陸軍中将勲三等太田徳三郎叙勲ノ件」(Ref.A10112578900)。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、172頁(執筆:山口公和)。



人名を探す	陸軍軍人(将官)	北白川宮能久親王	きたしらかわのみやよしひさしのう	1847(弘化4)年生。京都出身。最終階級は陸軍中将(死後に贈大将)。実父は伏見宮邦家親王、後に仁孝天皇の養子となる。1848(嘉永元)年青蓮院門室を相続。1852(嘉永5)年梶井門室を相続。1858(安政5)年親王宣下を受け、能久親王を名乗る。同年得度。1867(慶応3)年輪王寺門跡となる。1868年戊辰戦争に際して奥羽越列藩同盟に擁立されて奥州へ移り、軍事総督となる。同年謹慎。1869年赦免、還俗して伏見宮家に復す。1870年軍事研究のために渡欧。1872年北白川宮を相続。1875年プロイセン陸軍大学に入学。1877年帰国。1878年近衛局出仕。1880年参謀本部出仕。1881年兼議定官。1883年戸山学校次長、同校教頭。1884年東京鎮台司令官代理。1885年歩兵第一旅団長。1892年第六師団長。1893年第四師団長。1895年近衛師団長。同年台湾に出征するも戦病死。国葬が営まれた。	能久親王／輪王寺宮／公現親王／輪王寺公現／公現／伏見満宮／北白川二品親王／北白川二品宮／北白川親王／満麻呂／能久王／親王能久	北白川宮／北白川宮成久王／伏見宮／伏見宮邦家親王／山階宮晃親王／久邇宮朝彦親王／満宮／仁孝天皇／軍事総督／李国／普国陸軍大学校／議定官／戸山学校／東京鎮台司令官／歩兵第一旅団長／第六師団長／第四師団長／近衛師団長／国葬／大勲位／陸軍大将／台南神社／台中神社／台湾神		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第14巻、吉川弘文館、1993年、431頁(執筆:川田貞夫)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、805頁(執筆:伊勢弘志)。秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、56頁。
人名を探す	陸軍軍人(将官)	豊辺新作	とよべしんさく	1862年生。新潟県出身。最終階級は中将。1882年少尉任官(士官生徒5期)。1888年11月5日以前は教導団騎兵中隊附。1888年11月5日三本木軍馬育成所監務。日清戦争に混成第9旅団(母体は第5師団)の騎兵隊中隊長として従軍。1896-1897年に第五師管軍法会議判士長をつとめている。1898年騎兵第9連隊長。1901年騎兵第14連隊長。1906年騎兵実施学校長。1908年樺太守備隊司令官。1909年騎兵第4旅団長。1913年騎兵監。1918年予備役編入。	豊辺騎兵中隊長／豊辺騎兵監／豊辺騎兵少佐／豊辺騎兵大尉／豊辺大佐	豊辺支隊／教導団／三本木軍馬育成所／第五師団／混成第九旅団／騎兵第九連隊／騎兵実施学校／騎兵第14連隊／樺太守備隊／騎兵第四旅団		外山操編『陸海軍将官人事総覧』芙蓉書房、1981年、65頁。アジ歴Ref: C10060092800／C06062192100。人事興信所編『第七版 人事興信録』1925年、と29頁。
人名を探す	陸軍軍人(将官)	中村雄次郎	なかむらゆじろう	1852年生まれ。三重県出身。最終階級は中将。1874年大坂鎮台付、同年砲7大隊付、1876年大坂予備砲兵2大隊付、1877年砲兵支廠付、1879年大坂砲兵工廠監務、1880年陸士教官、1882年陸大教授心得兼陸士教官、1886年参本2局員、1886年～1888年兼陸大教授、1887年参本陸軍部1局1課長、1888年砲兵会議事務官兼議員、1889年砲兵第1方面提理、1890年軍務局砲兵事務課長、1896年軍務局砲兵課長、同年軍務局第1軍事課長、1896年～1898年兼砲兵会議議長、1897年陸士校長、1898年陸軍次官、1898年～1900年兼軍務局長、1900年陸軍総務長官、1901年～1902年兼軍務局長、1902年予備役、同年製鉄所長官、1904年～1917年貴族院議員、1907年男爵、1914年～1917年満鉄総裁、1915年後備役、1917年現役復帰、1917年～1919年関東都督、1919年予備役、1919年～1920年貴族院議員、1920年～1921年宮内大臣、1922年～1928年枢密顧問官。1928年死去。	中村宮内大臣／中村枢密顧問官／中村顧問官／中村製鉄所長官／中村総務長官／中村陸軍次官／中村砲兵大佐／中村砲兵中佐／中村砲兵少佐	陸軍砲兵／陸軍中将／陸軍次官／陸軍総務長官／陸軍省軍務局長／製鉄所長官／南満洲鉄道株式会社総裁／関東都督／宮内大臣／枢密顧問官	中村雄二郎	秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、113-114頁。
人名を探す	陸軍軍人(将官)	生田目新	なまためしん	1865年生。茨城県出身。最終階級は少将。1886年少尉任官(士官生徒8期)。歩兵第2旅団副官を経て、1896年第1師団副官・歩兵第3連隊第3大隊長。1902年-1904年当時第1師団副官。1904年歩兵第1連隊長。1907年歩兵第47連隊長。1911年樺太守備隊司令官。1913年歩兵第4旅団長。1915年予備役編入。	生田目歩兵大尉／生田目中佐／生田目少将	歩兵第二旅団／第一師団／歩兵第三連隊／歩兵第一連隊／歩兵第四十七連隊／樺太守備隊／歩兵第四旅団		外山操編『陸海軍将官人事総覧』芙蓉書房、1981年、77頁。人事興信所編『第五版 人事興信録』1918年、な127頁。C04013831500。C03025521900。

人名を探す	陸軍軍人(将官)	原田一道	はらだかずみち	1830(天保元)年生。鴨方藩出身。父は藩医原田碩齊。最高爵位は男爵、最終階級は陸軍少将。山田方谷・広瀬淡窓に学ぶ。後に江戸へ遊学、伊東玄朴に師事。1856(安政3)年蕃書調所取調出役教授手伝。1863(文久3)年池田使節団に随行して渡仏。さらにオランダにて留学。1867(慶応3)年帰国。1868年徴士・兵学校御用掛。1869年軍務官権判事、兵学校頭取、兵学権助、兵学権頭。1870年兼造兵正。1871年兵学大教授。兵部理事官随行として岩倉使節団に参加。1873年陸軍造兵司分課勤務。1874年第一局第六課勤務。1875年参謀局出仕。1876年兼一等法制官、参謀局第一課長、砲兵会議副議長。1877年兼太政官大書記官。1878年兼第三局副長。1879年砲兵局長。1880年陸軍刑法審査員、海軍律刑審査委員。1881年砲兵会議議長。同年陸軍少将、砲兵科初の将官となる。少々1885年国防会議議員。1886年元老院議員。1890年貴族院議員、錦鶏間祇候。1910年死去。子に原田豊吉(地質学者)、孫に原田熊雄。	原田敬策／原田吾一／原田少将／原田陸軍少将／原田砲兵大佐／原田砲兵局長／原田陸軍大佐原田兵学権頭／原田兵学大教授／原田大教授	原田大佐／池田筑後守／兵学校／造兵司／岩倉遣外使節／第一局第六課／参謀局第一課／砲兵会議／砲兵局／陸軍刑法審査局／海軍律刑審査局／国防会議／元老院議員／錦鶏間祇候／原田豊吉／原田熊雄	原田一造／原田一通	宮地正人ほか『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、188頁(執筆:山本智之)。安岡昭男ほか編『幕末維新人名事典』新人物往来社、1994年、793頁(執筆:宗森英之)。外山操編『陸海軍将官人事総覧陸軍篇』芙蓉書房出版、1981年、12頁。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、804頁。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、69～75頁。
人名を探す	陸軍軍人(将官)	福島安正	ふくしまやすまさ	1852年生まれ。長野県(松本藩)出身。最終階級は大将。開成高校を中退後、1873年司法省十三等出仕(翻訳課)。1874年陸軍省十一等出仕、1878年参謀本部長伝令使、1879年教導団歩大隊付、同年参本管西局員、1883年清国公使館付、1884年参本管西局員兼伝令使、1887年ドイツ公使館付、同年着任、1891年命帰朝・参本編纂課員、1892年2月～6月シベリア単騎横断、1894年京城公使館付、同年第1軍参謀、1895年参本編纂課長、1896年参本3部長、1899年～1906年参本2部長、1900年～1904年兼西部都督部参謀長、1900年～1901年北清連合軍総司令官幕僚、1904年大本営参謀、1904年～1905年満洲軍参謀(情報主任)、1906年参謀本部次長、1907年男爵、1908年参謀次長、1912年～1914年関東都督、1914年後備役、同年帝国在郷軍人会副会長。1919年死去。	福島編纂課長／福島参謀次長／福島参謀／福島都督	教導団／参謀本部編纂課長／単騎遠征／単騎旅行／西部都督部参謀長／北清連合軍／清国臨時派遣隊司令官／満洲軍参謀／参謀本部次長／参謀次長／関東都督／帝国在郷軍人会	秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、135頁。	
人名を探す	陸軍軍人(将官)	柳下重勝	やぎしたしげかつ	1865年生。神奈川県出身。最終階級は少将。1886年少尉任官(士官生徒8期)。教導団副官、士官学校教官などを歴任。1895年-1898年陸軍教導団副官。1905年近衛歩兵第3連隊長。1906年歩兵第26連隊長。1909年樺太守備隊司令官。1911年歩兵第51連隊長。1913年予備役編入。		教導団／陸軍士官学校／近衛歩兵第三連隊／歩兵第二十六連隊／樺太守備隊／歩兵第五十一連隊	外山操編『陸海軍将官人事総覧』芙蓉書房、1981年、77頁。人事興信所編『第五版 人事興信録』1918年、や28頁。アジ歴Ref: C06082149900／C06082983100。	
人名を探す	陸軍軍人(将官)	山田保永	やまだやすなが	1850年生。和歌山県出身。最終階級は中将。1971年召集兵少尉心得・大阪鎮台付。1883年歩兵第12連隊大隊長。1885年参謀本部管東局員。同年参謀本部第2局員。1886年歩兵第1連隊大隊長。1887年当時大阪鎮台副官。1892年陸軍省軍務局第2軍事課長。同年陸軍省副官。1893年歩兵第2連隊長。1894年陸軍省軍務局第2軍事課長。同年第2軍副官。1896-1898年当時臨時陸軍建築部事務官。1899年近衛歩兵第4連隊長。1900年歩兵第7旅団長。1902年台湾守備混成第3旅団長。1904年歩兵第9旅団長。同年留守歩兵第21旅団長。1905年第13師団兵站監。同年樺太守備隊司令官。1906年中将昇進と同時に予備役編入。	山田大佐／山田副官／山田兵站監／山田司令官	臨時陸軍建築部／臨時陸軍建築部事務官／臨建／臨時建築委員事務所臨時建築委員／第二軍副官／大阪鎮台副官	秦郁彦編『陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、166頁。アジ歴Ref: C06082423200／C10061693100／C10050343800。	

人名を探す	陸軍軍人(佐官)	坊城俊章	ぼうじょうとしあや	1847(弘化4)年生。京都出身。最高爵位は伯爵。最終階級は陸軍中佐。実父は公卿坊城利克、後に叔父の坊城俊政の養子となる。1857(安政4)年元服・昇殿。1868年弁事、外国事務局権輔、摂泉防禦総督。1869年三陸巡察史、兼三陸磐城両羽按察次官。1870年山形県知事。1871年免官。同年岩倉使節団に同行して渡欧、ロシアに留学(後にドイツに転学)。1874年帰国。1874年兵学寮・戸山学校附。1877年後備歩兵第二大隊第二中隊長。1878年戸山学校教官。1881年家督相続。1888年第一師管軍法会議判士長。1892年近衛歩兵第三連隊第二大隊長。1895年台湾兵站司令官。1897年貴族院議員。その他に軍人遺族救護義会会長・玉川電気鉄道株式会社取締役などを務める。1906年死去。	坊城侍従／坊城左少弁／坊城伯爵／坊城少将／坊城大尉／坊城歩兵大尉／坊城歩兵少佐／坊城歩兵少佐／坊城按察使次官／坊城次官／坊城山形県知事／坊城藤原俊章	弁事／摂泉防禦総督／巡察史／按察使／山形県知事／岩倉使節団／戸山学校／坊城大隊／貴族院議員／坊城俊賢	防城俊章	日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、870～871頁。『明治大正人物事典』I、日外アソシエーツ、2011年、547頁。富田仁編『新訂増補海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、604頁(執筆:村岡正明)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、388頁(執筆:小川原正道)。尚友倶楽部編『坊城俊章日記・記録集成』芙蓉書房出版、1998年。
人名を探す	陸軍軍人(佐官)	渡正元	わたりまさもと	1839(天保10)年生。広島藩出身。別名に渡六之助。最終階級は陸軍少佐。父は藩士田中善平。1868年大坂外国官事務所出仕、鉱山司出仕。1869年仏国に留学。留学中普仏戦争に遭遇し、「法普戦争誌略」を著す(のちに日本国内で刊行)。1871年兵学寮留学生。兵部理事官随員として岩倉使節団に合流。1874年帰国、参謀局第一分課勤務。1875年兼兵学寮幼年学校次長、参謀局謀報提理。1877年太政官少書記官。征討別働隊第三旅団会計部長として西南戦争に従軍。1879年兼陸軍省御用掛、太政官権大書記官。1880年太政官大書記官。1881年参事院議官補。1884年恩給局主事、参事院議官。1885年元老院議官。1890年貴族院勅選議員、錦鶏間祇候。1924年死去。子に渡久雄・渡正監など。	渡六之助／渡六之介／渡元老院議官／渡大書記官／渡権大書記官／渡少書記官	法普戦争誌略／鉱山司／兵学寮／岩倉遣外使節／兵学寮幼年学校／参謀局謀報提理／征討別働隊第三旅団／錦鶏間祇候／参事院議官／元老院議官／渡久雄／渡正監	稲村徹元ほか編『大正過去帳物故人名辞典』東京美術、1973年、295頁。富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、640頁(執筆:湯本豪一)。我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』下、柏書房、1995年、180～187頁。横堀恵一訳『校訂現代語訳 巴里籠城日誌』同時代社、2016年)	
人名を探す	陸軍軍人(尉官)	岩下長十郎	いわしたちょうじゅうろう	1853(嘉永6)年生。薩摩藩出身。別名に岩下長次郎。最終階級は陸軍大尉。父は家老岩下方平。1866(慶応2)年藩命によりフランス留学。1871年官費留学生となる。1872年兵部理事官随員として岩倉使節団に合流。1874年帰国、陸軍省出仕。1876年軍律取調。陸軍律刑法草案に従事。1877年近衛局。1880年陸軍始飾隊式伝令使。同年水難事故により死去。	岩下陸軍大尉／岩下大尉	岩倉遣外使節／軍律取調／近衛局／陸軍始飾隊式／伝令使／岩下方平／岩下家一／岩下氏	富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、137頁(執筆:富田仁)。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上巻、新人物往来社、2010年、187頁(執筆:松尾千歳)。霞信彦『矩を踰えて 明治法制史断章』慶應義塾大学出版会、2007年。	

人名を探す	海軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	榊山資紀	かばやますけのり	1837年10月生。薩摩藩出身。最終階級は海軍大将。薩英戦争・戊辰戦争に従軍、維新後は鹿児島藩常備大隊長を経て、鎮西鎮台鹿児島分営長(1871)、陸軍省第2局次長(1875)、熊本鎮台幕僚参謀長(1876)、近衛参謀長(1878)、大警視兼参謀本部御用掛(1880)、警視總監(1881)、海軍大輔(1883)、軍務局長・海軍次官(1886)、海軍大臣(1890)、枢密顧問官(1892)、軍令部長(1894)、台湾総督(1895)、枢密顧問官・内務大臣(1896)、文部大臣(1898)、枢密顧問官(1904)、教育調査会総裁(1913)。1922年2月死去。	榊山陸軍少佐／榊山軍務局長／榊山警視總監／榊山総督／榊山海軍大臣／榊山軍令部長／榊山大将	警視總監／海軍大臣／枢密顧問官／軍令部長／台湾総督／教育調査会総裁／海軍大将		秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、199頁。
人名を探す	海軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	川村純義	かわむらすみよし	1836(天保7)年生。薩摩藩出身。最高爵位は伯爵、最終階級は海軍大将。父は大砲製造方川村与十郎。1852(嘉永5)年中小姓。小銃四番隊長として戊辰戦争に従軍。1869年兵部大丞。1870年海軍掛、海軍兵学寮学頭。1872年海軍少輔。1874年海軍大輔。1877年西南戦争に征討総督参謀として従軍。1878年参議兼海軍卿。軍艦建造・鎮守府設置を進めるなど、海軍拡張に尽力。1888年宮中顧問官、枢密顧問官。裕仁親王の養育主任を務めた。1904年死去。	川村海軍大将／川村海軍中将／河村海軍中将／川村海軍少将／川村伯爵／川村少輔／川村兵部少輔／川村海軍少輔／河村海軍少輔／川村大輔／川村海軍大輔／河村海軍大輔／河村海軍太輔／川村海軍卿／河村海軍卿／川村陸軍卿／川村長官／	川村大将／川村中将／川村少将／兵部省／海軍兵学寮／参議／海軍卿／宮中顧問官／枢密顧問官／征討総督参謀／裕仁	河村純義／河邨純義	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第1巻』吉川弘文館、2011年、611～612頁(執筆:広中一成)。
人名を探す	海軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	小林躋造	こばやしせいぞう	1877年生。広島出身。旧藩士早川家に生まれ、小林家の養子となる。1898年海兵卒、1909年海大甲。1901年金剛乗組、1902年横須賀水雷団付・浪速砲術長心得、1903年浪速砲術長、1905年第3艦隊参謀・第4艦隊参謀・南清艦隊参謀、1906年厳島砲術長・佐世保鎮台参謀、1909年石見砲術長・軍務局員、1910年海軍省副官兼海軍大臣秘書官、1913年警手副長、1914年教本1部出仕兼海大教官、1915年技本副官、1920年英国大使館付武官、1922年第3艦隊司令官、1923年軍務局長、1928年練習艦隊司令官、1929年艦政本部長、1930年海軍次官、1931年第1艦隊兼連合艦隊司令長官、1933年連合艦隊司令兼第1艦隊長官・軍事参議官、1936年台湾総督、1943年大政翼賛会中央協力会議議長、1944年貴族院議員・翼賛政治会総裁・国務大臣。1962年7月死去。	小林副官／小林司令官／小林海軍次官／小林総督	海軍省副官／海軍大臣秘書官／英国大使館付武官／第三艦隊司令官／軍務局長／練習艦隊司令官／海軍艦政本部長／海軍次官／連合艦隊司令長官／第一艦隊司令長官／第1艦隊司令長官／軍事参議官／台湾総督／大政翼賛会中央協力会議／翼賛政治会		秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年。
人名を探す	海軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	西郷従道	さいごうじゅうどう	1843(天保14)年生。薩摩藩出身。別名に西郷信吾。最高爵位は侯爵、最終階級は元帥海軍大将。父は西郷吉兵衛。島津家に茶坊主として出仕。1861(文久元)年還俗。1862(文久2)年寺田屋事件に加担、謹慎。薩英戦争や禁門の変に従軍。1864(元治元)年細工所下目付助。1868年戊辰戦争に従軍。1869年渡欧。1870年帰国。同年兵部権大丞。1871年兵部少輔。1872年陸軍少輔、近衛副都督。1873年兼陸軍大輔。1874年蕃地事務都督となり台湾出兵を強行、同年中帰国。1875年フィラデルフィア博覧会事務副総裁。1876年博覧会視察のため渡米。1877年陸軍卿代理、兼議定官、近衛都督。1878年特命全権公使(伊国在勤)、参議兼文部卿、兼陸軍卿。1881年兼農商務卿。1882年兼開拓長官、オランダ万博事務総裁。1885年天津条約締結のため伊藤博文と朝鮮に渡る。帰国後、国防会議議員、海軍大臣。1886年兼農商務大臣。同年海軍視察のため渡欧。1887年帰国。1890年内務大臣。1891年大津事件の引責で辞職。1892年枢密顧問官、国民協会会頭。1893年海軍大臣。1898年内務大臣。1902年死去。兄に西郷隆盛。	西郷真吾／西郷海軍大将／西郷中将／西郷陸軍中将／西郷少将／西郷兵部権大丞／西郷権大丞／西郷兵部少輔／西郷陸軍少輔／西郷少輔／西郷陸軍大輔／西郷大輔／西郷蕃地事務都督／西郷事務都督／西郷都督／元都督府西郷／	留守政府／蕃地事務都督／蕃地事務局／台湾一件／費拉得費亞府博覧会／費拉特費府博覧会／近衛都督／陸軍卿／議定官／駐伊特命全権公使／参議／文部卿／農商務卿／開拓長官／安特堤府博覧会／和蘭国安特堤府博覧会／オランダ万国博覧会／天津条約／国防会議／海軍大臣／農商務大臣／内務大臣／枢密院／枢密顧問官／大津事件／国民協会／元老／西郷隆盛／大山巖／西郷大将／西郷元帥	西郷従道／西郷縦道	国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第3巻』吉川弘文館、1983年、749頁(執筆:松下芳男)。

人名を探す	海軍軍人(元帥／軍事参議官／三長官)	長谷川清	はせがわきよし	1883年生。福井県出身。1903年海兵卒、1909年海大乙、1910年水雷校卒、1914年海大甲。最終階級は海軍大将。三笠・巖島・白妙に乗船。1910年笠置分隊長、1911年第2艦隊参謀・水雷校教官、1914年三日月艦長・第2艦隊参謀、1915年人事局員、1916年海軍大臣秘書官兼海軍省副官、1919年米国大使館付武官補佐官、1920年第1水戦参謀・人事局1課員、1922年人事局1課長、1923年米国大使館付武官、1926年日進艦長・長門艦長、1927年横浜鎮台参謀長、1929年第2潜戦司令官、1930年艦本5部長、1931年呉工廠長、1933年軍縮会議全権委員、1934年海軍次官、1936年第3艦隊司令長官、1937年支那方面艦隊兼第3艦隊司令長官、1938年横浜鎮台長官、1940年軍事参議官・台湾総督、1944年軍事参議官、1945年海軍戦力査閲使・海軍高等技術会議議長。1970年死去。	長谷川副官／長谷川次官／長谷川司令長官／長谷川総督	海軍大臣秘書官／海軍省副官／米国大使館付武官／日進艦長／長門艦長／呉工廠長／軍縮会議全権委員／海軍次官／第3艦隊司令長官／支那方面艦隊司令長官／軍事参議官／台湾総督／海軍戦力査閲使／海軍高等技術会議		秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年。
人名を探す	海軍軍人(将官)	松村龍雄	まつむらたつお	1868年生。佐賀県出身。最終階級は中将。攻玉社を経て1887年海兵卒(14期)。1892年海大卒(丙号学生)。同年「干珠」航海長心得→同艦分隊長。1893年「磐城」航海長。1894年運送船「和歌浦丸」監督。1895年西海艦隊参謀。同年「比叡」航海長兼分隊長。1897年軍令部第3局員。1898年海大(甲種学生)卒。同年常備艦隊参謀。1899年侍従武官。1903年「吾妻」副長。1905年「三笠」副長。1906年イギリス駐在。1908年第2艦隊参謀長。1909年海大教官・教頭。1911年「安芸」艦長。1912年海軍教育本部第1部長兼第2部長。1914年第2南遣枝隊司令官。同年臨時南洋群島防備隊司令官。1915年第1戦隊司令官。同年練習艦隊司令官。1916年第1水雷戦隊司令官。同年馬公要港部司令官。	松村旅順要港部司令官／松村司令官／松村中将／松村少将／松村海軍少将／松村海軍大尉／松村海軍中将／松村海軍中佐／東郷大佐／東郷海軍大佐	軍艦干珠／練習艦干珠／軍艦磐城／砲艦磐城／和歌浦丸／西海艦隊／軍艦比叡／軍令部／常備艦隊／侍従武官／軍艦吾妻／巡洋艦吾妻／軍艦三笠／第二艦隊／海軍大学校／戦艦安芸／軍艦安芸／海軍教育本部／第二南遣枝軍艦大島／軍艦橋立／軍艦葛城／軍艦和泉／軍艦松島／軍艦赤城／軍艦富士／軍艦初瀬／軍艦操江／軍艦浪速／軍艦朝日／横須賀海兵団／軍艦高雄／軍艦和泉／軍艦見島／軍艦笠置／横須賀海軍工廠／台湾総督府海軍参謀部／海軍砲術学校／第一戦隊／臨時南洋群島防備隊／鎮海要港部／将官会議		秦郁彦編『陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、253頁。外山操編『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』芙蓉書房、1981年、55頁。海軍歴史保存会編『日本海軍史 第9巻』海軍歴史保存会、1995年、410-411頁。
人名を探す	海軍軍人(将官)	東郷吉太郎	とうごうきちたろう	1866年生。鹿児島県出身。最終階級は中将。1887年海兵卒(13期)。1891-1892年海大丙号学生。1892年「大島」分隊長。1895年「橋立」分隊長。1896年「葛城」分隊長。同年「和泉」砲術長兼分隊長。1897年「松島」砲術長。1898年「赤城」分隊長。同年横須賀海兵団分隊長。1899年「富士」砲術長兼分隊長。1900年初瀬分隊長・初瀬回航委員。1901年「操江」艦長。1902年横須賀海兵団副長。1903年依仁親王付武官。同年「浪速」副長。1905年「朝日」副長。同年横須賀海兵団副長。同年「高雄」艦長。1907年「和泉」艦長。同年「見島」艦長。1908年「笠置」艦長。1909年横須賀海軍工廠検査官。1910年台湾総督府海軍参謀長。1912年軍令部出仕。1913年海軍砲術学校長。1914年第一戦隊司令官。1915年臨時南洋群島防備司令官。1916年鎮海要港部司令官。1918年将官会議議員。1919年待命。1920年予備役編入、1942年没。	東郷大佐／東郷海軍大佐	軍艦大島／軍艦橋立／軍艦葛城／軍艦和泉／軍艦松島／軍艦赤城／軍艦富士／軍艦初瀬／軍艦操江／軍艦浪速／軍艦朝日／横須賀海兵団／軍艦高雄／軍艦和泉／軍艦見島／軍艦笠置／横須賀海軍工廠／台湾総督府海軍参謀部／海軍砲術学校／第一戦隊／臨時南洋群島防備隊／鎮海要港部／将官会議		外山操編『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』芙蓉書房、1981年、52頁。人事興信所編『人事興信録 7版』1925年、と24頁。海軍歴史保存会編『日本海軍史 第9巻』海軍歴史保存会、1995年、321-322頁。

人名を探す	海軍軍人(将官)	吉田増次郎	よしだますじろう	1967年生。静岡県出身。最終階級は中将。1890年海兵卒(17期)。1896年「吉野」分隊長。1897年横須賀水雷団第1水雷艇隊長。同年軍令部謀報課員。同年軍令部第3局員。1900年軍令部第2局員。同年「鎮辺」艦長。同年軍令部第3局員。1902年清国公使館付(天津駐在)。1903年韓国公使館付兼清国公使館付。1906年「周防」副長。同年「松島」副長。1907年「吾妻」副長。1908年第一艦隊副官。同年軍令部参謀。1914年支那公使館付武官。1916年「香取」艦長。同年臨時南洋群島防備隊司令官。1917年軍令部出仕。1918年軍令部参謀兼任(支那出張)。同年軍令部第3班長。1919年第1遣外艦隊司令官。1922年将官会議議員。1923年予備役編入。1942年没。	吉田少佐／吉田司令官／吉田参謀／吉田第三班長	第一水雷艇隊／軍艦鎮辺／清国公使館／韓国公使館／軍艦周防／軍艦松島／軍艦吾妻／第一艦隊／支那公使館／軍艦香取／臨時南洋群島防備隊／第一遣外艦隊／将官会議	秦郁彦編『陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、266頁。外山操編『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』芙蓉書房、1981年、66頁。海軍歴史保存会編『日本海軍史 第9巻』海軍歴史保存会、1995年、467-468頁。
人名を探す	海軍軍人(将官)	永田泰次郎	ながたたいじろう	1866年生。東京府出身。最終階級は中将。攻玉社から慶應義塾幼稚舎・大人部に学ぶ。海軍機関学校を経て1889年海兵卒(15期)。1895年呉水雷隊敷設部分隊長。同年「秋津洲」分隊長。1896年横須賀水雷団第2水雷艇隊長。1897年水雷術練習所教官。1899年「比叡」水雷長。同年「千代田」水雷長。同年「吉野」水雷長。1900年横須賀水雷団第2水雷艇隊長。同年「薄雲」艦長。同年台湾総督府海軍副官。1901年馬公要港部水雷敷設隊分隊長。1902年常備艦隊副官。1903年第1艦隊副官。1905年連合艦隊副官。1907年「出雲」副長。同年「石見」副長。1908年第1駆逐隊司令。1909年第2駆逐隊司令。1910年大湊要港部参謀長。1911年「千代田」艦長。1912年「鞍馬」艦長。1913年舞鶴鎮守府参謀長。1914年「摂津」艦長。1915年第2艦隊参謀長。1916年横須賀鎮守府参謀長。1917年臨時南洋群島防備司令官。1919年将官会議議員。1920年予備役編入。同年神戸高等商船学校長(在職のまま死去)。1923年没。	永田海軍少将／永田大佐	呉水雷隊／軍艦秋津洲／水雷術練習所／比叡／千代田／軍艦吉野／横須賀水雷団第2水雷艇隊／軍艦薄雲／台湾総督府海軍部／馬公要港部／常備艦隊／第1艦隊／連合艦隊／軍艦出雲／軍艦石見／第1駆逐隊／第2駆逐隊／大湊要港部／軍艦千代田／軍艦鞍馬／舞鶴鎮守府／軍艦摂津／第2艦隊／横須賀鎮守府／臨時南洋群島防備隊／将官会議	外山操編『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』芙蓉書房、1981年、60頁。海軍歴史保存会編『日本海軍史 第9巻』海軍歴史保存会、1995年、339-340頁。三田商業研究会編『慶応義塾出身名流列伝』実業の世界社、1909年、427-428頁。
人名を探す	海軍軍人(将官)	野崎小十郎	のざきこじゅうろう	1872年生。高知県出身。最終階級は少将。1894年海兵卒(21期)。1899年「金剛」砲術長兼分隊長。同年佐世保海兵団分隊長。1900年「天竜」航海長兼分隊長。同年横須賀水雷団第2水雷敷設隊分隊長。同年「橋立」分隊長。1901年「葛城」航海長兼「八重山」航海長。1903年常備艦隊参謀。同年第1艦隊参謀。1904年第3艦隊参謀。1905年第4艦隊参謀。同年第3艦隊参謀。同年南清艦隊参謀。1907年海大卒。同年横須賀鎮守府参謀兼望楼監督官。1908年海軍省軍務局局員兼教育本部員。1910年呉工廠艦装員。同年安芸砲術長。1911年呉予備艦隊参謀。1912年海軍砲術学校教官。1913年横須賀鎮守府参謀兼東京湾要塞参謀。1914年「新高」艦長。1915臨時南洋群島防備隊参謀長。1916年「生駒」艦長。1917年横須賀海軍工廠検査官。1919年「金剛」艦長。同年臨時南洋群島防備司令官。1922年将官会議議員。1923年予備役編入。1929-1931年碑衾町長。株式会社玉川計器製作所監査役を務める。1946年没。	野崎海軍省軍務局局員／野崎少佐／野崎臨時南洋群島防備隊参謀長	臨時南洋群島防備隊司令官代理／軍艦金剛／佐世保海兵団／軍艦天竜／横須賀水雷団／軍艦橋立／軍艦葛城／軍艦八重山／常備艦隊／第1艦隊／第3艦隊／第4艦隊／南清艦隊／横須賀鎮守府／海軍省軍務局／海軍教育本部／呉海軍工廠／軍艦安芸／呉予備艦隊／海軍砲術学校／東京湾要塞／軍艦新高／臨時南洋群島防備隊／軍艦生駒／横須賀海軍水雷学校高等科／第1特務艦隊参謀／佐世保鎮守府副官／佐世保鎮守府参謀。海軍大学校／第4戦隊参謀／軍令部第2班第4課参謀／関東戒厳司令部付／夕張副長／日向副長／呉軍需部第1課長／鳥海艦装員長／鳥海艦長／海軍省軍需局第1課長／佐世保工廠造兵部長／陸奥艦長／第5水雷戦隊司令官／海軍通信学校長／海軍水雷学校長／第4	外山操編『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』芙蓉書房、1981年、77頁。海軍歴史保存会編『日本海軍史 第10巻』海軍歴史保存会、1995年、324-325頁。東京府荏原郡碑衾町編『碑衾町誌』碑衾町、1932年、153頁。高知県人名事典編集委員会編『高知県人名事典』高知市民図書館、1971年、274頁。三鍋太朗「戦間期日本の商船教育」(『大阪大学経済学』59-1、2009年)35頁。
人名を探す	海軍軍人(将官)	細萱戌子郎	ほそかやぼしろう	1888年生。長野県出身。最終階級は中将。野沢中学卒。1908年海兵卒(36期)。1914年海軍水雷学校高等科卒。1917年第1特務艦隊参謀。1918年佐世保鎮守府副官兼参謀。1920年海軍大学校(甲種学生)卒。同年第4戦隊参謀。1921年軍令部第2班第4課参謀。1923年関東戒厳司令部付。1924年「夕張」副長。1926年横須賀鎮守府付。1928年「日向」副長。1929年呉軍需部第1課長。同年「鳥海」艦装員長。1931年「鳥海」艦長。1932年海軍省軍需局第1課長。1933年佐世保工廠造兵部長。1934年「陸奥」艦長。1935年第5水雷戦隊司令官。1936年海軍通信学校長。1937年海軍水雷学校長兼任。同年第4水雷戦隊司令官。1938年第1航空戦隊司令官。1939年旅順要港部司令官。1940年第1遣支艦隊長官。1941年第5艦隊長官。1943年予備役編入。同年南洋庁長官(1946年まで)。1944年中部太平洋方面艦隊事務嘱託。同年第3南遣艦隊事務嘱託。1954年没。	細萱大尉／細萱少佐／細萱中佐／細萱大佐	海軍水雷学校高等科／第1特務艦隊参謀／佐世保鎮守府副官／佐世保鎮守府参謀。海軍大学校／第4戦隊参謀／軍令部第2班第4課参謀／関東戒厳司令部付／夕張副長／横須賀鎮守府付／日向副長／呉軍需部第1課長／鳥海艦装員長／鳥海艦長／海軍省軍需局第1課長／佐世保工廠造兵部長／陸奥艦長／第5水雷戦隊司令官／海軍通信学校長／海軍水雷学校長／第4	秦郁彦編『陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、250頁。外山操編『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』芙蓉書房、1981年、134頁。海軍歴史保存会編『日本海軍史 第9巻』海軍歴史保存会、1995年、389-390頁。

人名を探す	海軍軍人(佐官)	松村文亮	まつむらふみすけ	1840(天保11)年生。佐賀藩出身。最終階級は海軍中佐。父は藩士金丸文雅、兄に中牟田倉之助。藩命により長崎で英学を学ぶ。帰藩後、三重津海軍学寮にて航海術を教授。1868年戊辰戦争に従軍。同年、藩の貿易船の船長となり上海へ渡航、上海に商店「三松号」を開設。1870年普仏戦争視察のため大山巖らと渡欧。1871年鍋島直大の従者として岩倉使節団に参加、後に兵部理事官随行となる。1873年帰国、同年電信少技長心得。1874年台湾出兵にて嚮導役を務める。1874年春日艦長。1875年提督府出仕。同年教授として軍艦撰津乗組。1876年撰津乗組を辞す。1879年依願免官。1896年死去。		中牟田倉之助／大山巖／岩倉遣外使節／鍋島直大／台湾一件／春日艦長／松村少佐	松邨文亮	中村孝也『中牟田倉之助伝』(中牟田武信、1919年)730-733頁。中濱博『中浜万次郎アメリカ』を初めて伝えた日本人』(富山房インターナショナル、2005年)267頁。「大山弥助品川弥二郎板垣退助ノ三士ヲ欧州ニ差遣シ李仏戦争ノ実況ヲ視察セシム」(Ref.A15070475000)。手塚晃編『幕末明治海外渡航者総覧第2巻』柏書房、1992年、348頁。大植四郎編『明治過去帳物故人名辞典』東京美術、1971年、495頁。富田仁編『新宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、225頁(執筆:岡本拓司)。外山操編『陸海軍将官人事総覧海軍篇』芙蓉書房出版、1981、12頁。
人名を探す	海軍技術将校(将校相当官)	肥田濱五郎	ひだはまごろう	1830(天保元)年生。伊豆国出身。別名に肥田為良。父は神主肥田春安。江戸で蘭学を学び、後に韭山代官江川家へ出仕。1856(安政3)年長崎海軍伝習にて蒸気機関を学ぶ。1860(万延元)年軍艦操練教授方出役、御普請格御鉄砲方附手代。同年遣米使節団に随行し咸臨丸機関長を務める。同年帰国。1862(文久2)年幕命により軍艦建造に従事。1868年静岡海軍学校頭。1869年民部省出仕。1870年横須賀製鉄所勤務。1871年工部少丞、造船頭兼製作頭。工部理事官として岩倉使節団に随行。1873年帰国。同年工部大丞、海軍大丞兼主船頭。1876年横須賀造船所長。主船局長。1882年海軍機関総監。1884年海軍機技総監。1885年御料局長官兼内匠頭。官歴のほか第十五国立銀行・日本鉄道会社の設立に尽力。1889年鉄道事故により死去。娘婿に肥田昭作。	肥田為良／肥田少丞／肥田工部少丞／肥田造船頭／肥田主船頭／肥田製作頭為良／肥田海軍大丞／肥田海軍機関総監	第一遣米使節／咸臨丸／沼津兵学校／横須賀製鉄所／千代田形／造船寮／製作寮／岩倉遣外使節／主船寮／工部少丞／工部大丞／海軍大丞／横須賀造船所／主船局／海軍機関総監／海軍機技総監／御料局／宮内省御用掛／内匠寮／第十五国立銀行／日本鉄道会社／肥田昭作	肥田浜五郎	日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、31～32頁。安岡昭男編『幕末維新大人名事典上巻』新人物往来社、2010年、52頁(執筆:樋口雄彦)。「秋田県下羽後国大葛鉱山ヲ三菱社々長岩崎彌之助ニ払下ヲ認許ス」(Ref.A15111652200)。
人名を探す	民間人	阿部潜	あべひそむ	1839(天保10)年生。江戸出身。別名に阿部邦之助。実父は旗本阿部正蔵、後に旗本曾根内膳の養子となるが復籍。実兄に阿部正定・阿部正外。歩兵差図役頭取勤方、寄合。1867(慶応3)年目付。1868年公議所御用取扱として議事制度創設に尽力。陸軍頭、陸軍重立取扱。同年徳川家の駿河移封に随行、沼津兵学校設立に奔走。1869年沼津奉行、静岡藩少参事兼軍事掛。1870年広島藩や鹿児島藩に御貸人として派遣、広島藩兵学校設立顧問などを務める。1871年大蔵省七等出仕。大蔵理事官随行として岩倉使節団に参加、勸農視察に従事。帰国後辞官、尾去沢銅山経営や養蚕・醤油醸造事業などを手掛ける。1895年死去。	阿部邦之助	阿部豊後守／公議所／沼津兵学校／岩倉遣外使節／尾去沢銅山		日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、31～32頁。安岡昭男編『幕末維新大人名事典上巻』新人物往来社、2010年、52頁(執筆:樋口雄彦)。「秋田県下羽後国大葛鉱山ヲ三菱社々長岩崎彌之助ニ払下ヲ認許ス」(Ref.A15111652200)。
人名を探す	民間人	岩見鑑造	いわみかんぞう	1842(天保13)年生。江戸出身。1872年岩倉使節団に参加した由利公正の随員として東京府二等訳官として同行。1873年帰国。帰国語は『西洋諺草』など西洋諺の翻訳・紹介を行う。漆商を営み、東京商工銀行取締役、醗酵社副頭取、合名会社日就社理事を務める。また多摩園巖美の名で狂歌師と知られ、さらに茶人として和敬会の設立に参加。1904年死去。		岩倉遣外使節／由利公正／東京商工銀行／日就社／和敬会	石見鑑造	富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、139頁(執筆:富田仁)。齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク』思文閣出版、2012。「職員録・明治五年六月・官員全書改(東京府)」(Ref.A09054279100)。

人名を探す	民間人	瓜生震	うりゆうふるう	1853(嘉永6)年生。越前藩出身。父は藩士多部五郎左衛門、兄に瓜生寅。1856(安政3)年瓜生姓となる。1856(安政3)年長崎に遊学、英学を修める。1870年工部省鉄道寮出仕。工部理事官随員として岩倉使節団に参加、留学を願い出て鉄道事業の研究に従事。帰国後は一時鉄道寮に出仕するも、1877年辞職。長崎の高島炭鉱にて売炭及運輸主任となり、三菱事務所支配人・長崎支店長・本社副支配人・営業部長を務める。1908年日本製糖汚職事件によって経営難となった日本製糖監査役となる。その後、汽車製造会社社長、麒麟麦酒株式会社取締役、日本興業銀行監査役などを歴任。1920年死去。	瓜生鉄道中属	岩倉遣外使節／鉄道寮／高島炭鉱／日本製糖／汽車製造会社／麒麟麦酒株式会社／日本興業銀行		『財界物故傑物伝 上巻』実業之世界社、1936年、211～214頁。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、153～154頁(執筆:楠家重敏)。稲村徹元ほか『大正過去帳 物故人名辞典』東京美術、1973年、196～197頁。人事興信所編『人事興信録』第4版、人事興信所、1915年、う32頁。
人名を探す	民間人	小林一三	こばやしいちぞう	1873年1月生。山梨県出身。1892年12月に慶応義塾大学理財科を卒業し、1893年に三井銀行入社、東京本店秘書課に配属となる。1893年9月大阪支店勤務、1897年1月名古屋支店勤務、同年5月名古屋支店計算係長、同年7月名古屋支店貸付係長、1899年8月大阪支店貸付係長、1901年1月東京箱崎倉庫勤務、1902年三井銀行本店調査係検査主任を務め、1907年1月に退社。在職中の1905年に阪急電鉄の前身である箕面有馬電気軌道株式会社の創立に参加して専務となる。1907年4月から同年8月まで阪鶴鉄道監査役、同年10月から1910年3月まで箕面有馬電気軌道株式会社専務取締役、1913年7月宝塚唱歌隊(のち歌劇団)を創設。1916年10月から1927年3月まで箕面有馬電軌専務取締役(1918年2月阪神急行電鉄と改名)、1927年3月から1934年1月まで阪神急行電鉄社長を務めるとともに、1927年7月東京電燈株式会社取締役、1928	小林商工大臣	内閣情報部参与／商工大臣／貴族院議員／蘭領印度特派使節／戦災復興院総裁	秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、221頁。日外アソシエーツ株式会社編『政治家人名事典』日外アソシエーツ株式会社、1990年、214頁。	
人名を探す	民間人	小室信夫	こむろしのぶ	1839(天保10)年生。丹後国出身。父は商人小室左喜蔵。1863(文久3)年京都にて足利木像鼻首事件に加担。1864(元治元)年徳島藩預となる。1868年釈放され権弁事。1869年岩鼻県権知事。1870年徳島県大参事。左院中議生。1872年少議官。同年左院視察団としてイギリス立憲制度調査のため渡欧。帰国後に辞官。1874年板垣退助らとともに民撰議院設立建白書を政府に提出。その後、実業界に転じ、北海道運輸会社・共同運輸会社を設立。1891年貴族院勅選議員。1898年死去。娘婿に小室信介。	小室信太夫／小室徳島藩大参事／小室岩鼻県権知事／小室少議官	岩倉遣外使節／少議官／中議生／板垣退助／民撰議院設立建白書／北海道運輸会社／共同運輸会社／益田孝／井上馨／澁澤榮一／品川彌二郎／森岡昌純	宮地正人ほか編『明治時代史大事典』第1巻、吉川弘文館、2011年、1022頁(執筆:村瀬信一)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第6巻、吉川弘文館、1985年、26頁(執筆:石塚裕道)。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上巻、新人物往来社、2010年、541頁(執筆:明田鉄男)。	
人名を探す	民間人	團琢磨	だんたくま	1858(安政5)年生。福岡藩出身。最高爵位は男爵。実父は藩士神屋宅之丞、後に藩士団尚静の養子となる。1871年黒田長知随員として岩倉使節団に同行、アメリカに留学。1875年マサチューセッツ工科大学に入学。1878年帰国。1879年大阪専門学校助教。1880年大阪中学校訓導。1881年大阪中学校助教、東京大学助教授。1884年工部省御用掛、三池鉱山局御用掛。1885年三池鉱山局開坑長。1886年勝立工業課長、三池鉱山局工業課長。1887年湧水処理調査のため渡米。1888年帰国、非職。同年三井組三池炭鉱事務長。1894年三井鉱山合名会社専務理事兼三池炭鉱事務所長。1898年炭鉱事務調査のため渡米。1899年帰国。1909年三井合名会社参事。1913年北海道炭鉱汽船株式会社社長。1914年三井合名会社理事。1917年日本工業倶楽部理事長。1920年日本製鋼所会長。1924年三井信託株式会社会長。1928年日本経済連	團男爵／黒田長知／岩倉遣外使節／マサチューセッツ・インスティテュート・オブ・テクノロジー／大阪専門学校／大阪中学校／東京大学／工部省御用掛／三池鉱山局／三池鉱山／勝立坑／三井財閥／三池炭鉱／三井鉱山／三井物産／三井合名会社／北海道炭鉱汽船株式会社／日本工	團琢磨	秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』第2版、東京大学出版会、2013年、364～365頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2012年、631～632頁(執筆:森田貴子)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻、吉川弘文館、1988年、348頁(執筆:森川英正)。	
人名を探す	民間人	福地源一郎	ふくちげんいちろう	1841(天保12)年生。長崎出身。父は儒医福地苟庵。長崎にて蘭学、江戸にて英学を学ぶ。1859(安政6)年外国奉行支配通弁御用御雇。1861(文久元)年文久遣欧使節に通詞として参加。1862(文久2)年帰国。1865(慶応元)年遣仏使節として柴田剛中らと渡欧。1866(慶応2)年帰国。1868年『江湖新聞』を発行、発禁・逮捕。1870年大蔵省出仕。同年財政・裁判制度調査のため伊藤博文と渡米。1871年岩倉使節団に一等書記官として参加。1873年帰国。1874年『東京日日新聞』を発行する日報社に入社、主筆・社長を務める。1882年立憲帝政党を結党。1888年日報社退社。政治小説や歌舞伎台本を中心に執筆活動に従事。1904年衆議院議員。1906年死去。	福地桜痴／福地源一	通弁御用／江湖新聞／岩倉遣外使節／日報社／東京日日新聞／立憲帝政党／地方官会議／商法会議所	国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第12巻、吉川弘文館、1991年、90頁(執筆:坂本多加雄)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第3巻、吉川弘文館、2013年、295～296頁(執筆:山本武利)。	



人名を探す	民間人	益田克徳	ますだかつのり	1852(嘉永5)年生。佐渡国出身。別名に名村一郎。父は地役人益田鷹之助、実兄に益田孝、実妹に永井繁。父鷹之助の異動に伴い箱館・江戸に移る。1864(元治元)年横浜にて英学を学ぶ。1866(慶応2)年海軍見習生。1868年榎本武揚に従って戊辰戦争に従軍・捕縛、高松藩預となるも脱走。1869年慶應義塾に入学。1871年慶應義塾卒業、高松藩に英語教師として招聘。1872年兄孝の造幣権頭就任に伴い造幣寮出仕、司法大録。司法理事官随員として岩倉使節団に合流、法律制度調査に従事。1873年帰国、司法省検事・判事を歴任。沼間守一らと法律講義所を設立。1878年辞職。この頃より茶人として活動を始める。1879年東京海上保険会社支配人。1880年東京商工会議員幹事。1882年立憲改進黨結党に参加。1890年衆議院議員選挙に落選。1891年明治火災保険会社取締役。1893年東京帽子株式会社専務取締役。1901年米穀取引所	益田鷹之助／益田孝／瓜生繁／榎本武揚／慶應義塾／高松藩／造幣寮出仕／岩倉遣外使節／司法省検事／司法省判事／沼間守一／東京海上保険会社／東京商工会議所／立憲改進黨／明治火災保険会社／東京帽子株式会社／米穀取引所	大塚栄三著、益田恭尚ほか編『益田克徳翁伝』東方出版、2004年。大植四郎『明治過去帳 物故人名辞典』東京美術、1971年、679頁。「造幣寮」(Ref.C14020133800)。山寺清二郎編『東京商業会議所会員列伝』聚玉館、1892年。
人名を探す	民間人	村田省蔵	むらたしょうぞう	1878年10月-1950年。1900年に東京高商を卒業し、大阪商船社長、日清汽船会長、摂津海上会長を歴任し、その後貴族院議員に勅選された。1940年に通信大臣に就任し、鉄道大臣を兼務。1941年に退任し、陸軍省顧問を経て、1942年より比島派遣軍最高顧問となる。1943年10月14日に日本軍政下で成立した第二フィリピン共和国の初代駐フィリピン特命全権大使に就任。戦火を逃れるため、ラウル大統領らとともに避難した奈良で日本の敗戦を迎えた。	村田通信大臣／村田顧問／村田大使／村田特命全権大使	鈴木静夫・早瀬晋三編『東南アジアを知るシリーズ フィリピンの事典』同朋舎、1992年、350頁。人事興信所編『第十四版 人事興信録 下巻』1943年、ム30頁。
人名を探す	民間人	由良守応	ゆらもりまさ	1827(文政10)年生。紀州藩出身。別名に由良弥太次、由良成正、由良源太郎。号は義溪。父は由良弥右衛門。1869年民部官御雇牧牛馬御用掛。民部省通商司権大佑。1871年大蔵省勸農助、兼宮内省御用掛。1872年大蔵省官費留学生として渡米、岩倉使節団に合流。租税寮七等出仕兼宮内省。1873年帰国。帰国後は皇宮御馬車掛となるも馬車転覆の責にて辞任。1874年乗合馬車「千里軒」開業。1894年死去。	牧牛馬御用掛／通商司／勸農寮／勸農助／宮内省御用／官費留学生／岩倉遣外使節／租税寮	「勸業助由良守応牧畜研究ノ為メ米国へ差遣月給三分一下賜附外十余名諸職業研究」(太00471100)。「大使書類原本在英雑務書類」(Ref.A04017149400)。「大使書類原本在仏雑務書類」(Ref.A04017149600)。「明治壬辰郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002年、20頁。
人名を探す	技術者	阿部美樹志	あべみきし	1883年5月生。岩手県出身。1905年7月に札幌農学校土木工学科を首席で卒業し、同年8月通信省鉄道作業局工務部雇・金沢保線事務所勤務となる。1907年鉄道庁技手・新橋営業事務所、1908年12月中部鉄道管理局新橋保線事務所勤務を経て、1911年10月より農商務省海外実業練習生としてイリノイ大学大学院に留学し、1914年6月に鉄筋コンクリートに関するPh.Dを取得。1914年8月に帰国し、同年11月より鉄道院雇・東京改良事務所勤務、1916年12月技師・中部鉄道管理局工務課勤務、1919年5月東京改良事務所勤務を務め、1920年3月に辞職。同時に阿部事務所を開設。同年6月に京都帝国大学で工学博士の学位を取得。1929年3月から1934年12月まで浅野混凝土専修学校長、1934年5月には東洋セメント工業会社創設に関わり同社長就任、1941年6月から1945年3月海外土木興業社長を歴任し、1946年3月に戦災復興院総裁に就任。1947年3月から同年5月までは貴族院議員を務め、1948年1月から同年5月まで建設院総務長官、1949年6月から同年11月まで特別調達庁長官を歴任した。1965年2月没。	札幌農学校／通信省鉄道作業局／金沢保線事務所／鉄道庁技手／新橋営業事務所／中部鉄道管理局／農商務省海外実業練習生／東京改良事務所／戦災復興院／貴族院議員／建設院／特別調達庁	札幌農学校／通信省鉄道作業局／金沢保線事務所／鉄道庁技手／新橋営業事務所／中部鉄道管理局／農商務省海外実業練習生／東京改良事務所／戦災復興院／貴族院議員／建設院／特別調達庁

人名を探す	教育家	江川英武	えがわひ でたけ	1853(嘉永6)年生。伊豆国出身。別名に江川太郎左衛門。父は葦山代官江川英龍。兄に代官江川英敏。1862(文久2)年英敏の死去に伴い家督相続、葦山代官となる。1863(文久3)年鉄砲御用役兼帯。1869年葦山県令(後に権知事)。1871年兵部省留学生として岩倉使節団に随行。1872年ピークスキル兵学校およびドナルド・ハイランド専門学校に入学。1875年ラファイエット大学に入学。1879年同大学を卒業し帰国。1881年内務省御用掛。1883年大蔵権少書記官・議案局勤務。1884年兼造幣局勤務。1885年大阪造幣局出張所長。1886年辞職。帰郷して伊豆学校長となる。1918年療養のため葉山に転居。1933年死去。	江川太郎左衛門／江川太郎左工門／江川太郎左衛門／江川太郎／江川権知事／江川葦山県権知事	葦山県令／葦山権知事／岩倉遣外使節／造幣局／伊豆学校／伊豆江川氏／江川邸／江川英龍／江川英文		安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上巻、新人物往来社、2010年、229頁(執筆:平野日出雄)。保谷徹「江川文庫調査と古写真コレクション」(江川文庫編『日本近代化へのまなざし』吉川弘文館、2016年)。東京大学史料編纂所編『柳宮補任』4・5、東京大学出版会、1983年。
人名を探す	教育家	大山捨松	おおやます てまつ	1860(万延元)年生。会津藩出身。父は藩士山川重固。兄に山川浩・山川健次郎。1870年会津松平家の移封に伴い斗南に移住。1871年開拓使留学生として岩倉使節団に随行して渡米。1875年コネティカット州のヒルハウス高校に入学。1878年ヴァッサー・カレッジに入学。1882年コネティカット看護婦養成学校に学ぶ。同年帰国。1883年陸軍軍人大山巖と結婚、大山姓を名乗る。1884年華族女学校設立準備委員。1888年宮内省洋化顧問掛。1900年女子英学塾顧問。1904年女子英学塾理事。1905年日赤篤志看護婦人会理事。1919年死去。	山川捨松／大山夫人／大山令夫人	開拓使留学生／岩倉使節団／ヒルハウス高校／ヴァッサー・カレッジ／コネティカット看護婦養成学校／華族女学校／鹿鳴館／女子英学塾／篤志看護婦人会／海軍将校婦人会／東京慈恵医院／山川浩／山川健次郎／山川操／山川二葉／大山巖／大山高／大山柏／津田梅		宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、吉川弘文館、2011年、375～376頁(執筆:高橋裕子)。『明治対象人物事典』I、日外アソシエーツ、2011年、138頁。秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』第2版、東京大学出版会、2012年、127頁。
人名を探す	教育家	川路寛堂	かわじか んどう	1844(弘化元)年生。江戸出身。別名に川路太郎。祖父は旗本川路聖謨、父は川路彰長。幼少時に父が他界、一時は大叔父にあたる井上清直に養育されるも、後に聖謨のもとで育てられる。1857(安政4)小姓組番士、1863(文久3)年小納戸。1864(元治元)年勤仕並寄合。1866(慶応2)年歩兵頭並。同年幕府留学生として渡英。1868年帰国、横浜で貿易商を営む。1871年岩倉使節団に三等書記官・外務省七等出仕として随行。1872年大蔵省七等出仕。1873年帰国。1874年検査寮改正取調掛。1875年シャムへ派遣。同年帰国、翻訳御用専務。1876年大蔵権少丞。1877年丞官廃止に伴い辞職。1885年東京にて月山学舎を開塾。1893年広島県福山尋常中学校教員雇。1899年兵庫県洲本中学校教諭心得。1903年淡路高等女学校長。1914年神戸松蔭女学校副校長。1922年退職。1927年死去。子に詩人・評論家の川路柳虹。	川路太郎	川路聖謨／井上清直／外務省七等出仕／大蔵省七等出仕／検査寮／大蔵権少丞／岩倉遣外使節／利根川丸／淡路高等女学校／松蔭女学校	川路簡堂	宮永孝「元幕臣の英語教師 川路寛堂のこと」『社会労働研究』37-3、法政大学、1990年。日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1982年、305～306頁。富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、207～208頁(執筆:楠家重敏)。

人名を探す	教育家	久米邦武	くめくにたけ	<p>1839(天保10)年生。佐賀藩出身。父は藩士久米邦郷。1854(安政元)年藩校弘道館に学ぶ。1863(文久3)年昌平坂学問所に入学。1864(元治元)弘道館補欠指南役、近侍。1868年弘道館教諭。1869年大史兼神社局大弁務。1870年佐賀藩権大属。1871年佐賀藩権大属、鍋島家家扶。太政官権少外史に任じられ岩倉使節団の「大使附属枢密記録等ノ取調」を務める。1873年帰国、大使事務局出仕。</p> <p>1875年少外史、権少史。1877年太政官少書記官・記録掛。1878年『米欧回覧実記』を刊行。1879年修史館編修官、『大日本編年史』編纂に従事。1888年帝国大学文科大学教授・臨時編年史編修委員。1889年『史学会雑誌』創刊に参加。1892年筆禍事件により依願免官。1894年立教学校専修科教員。1899東京専門学校文科学科講師。以後古文書学・日本古代史を講義。1922年辞職。1931年死去。子に画家の久米桂一郎。</p>	久米権少外史 ／久米権少史	弘道館／神社局／権少外史／権少史／少外史／太政官少書記官／大使事務局／米欧回覧実記／修史館／臨時編年史／史学会／帝国大学／東京専門学校／久米桂一郎		高田誠二『久米邦武』ミネルヴァ書房、2007年。国史大辞典編集委員会編『国史大事典第4巻』吉川弘文館、1984年、896頁(執筆:大久保利謙)。
人名を探す	教育家	手島精一	てしませいいち	<p>1850(嘉永2)年生。沼津藩出身。実父は藩士田辺四友、後に藩士手島右源太の養子となる。藩校明親館に学ぶ。1870年留学のため渡米、ラフェット大学で建築学・物理学を学ぶ。1871年大蔵理事官随行心得として岩倉使節団に合流、通訳を務める傍ら近代産業の技術研究・資料蒐集に従事。後に私費留学生となる。1874年帰国。1875年東京開成学校監事。1876年兼制作学教場事務取締、文部省八等出仕。田中不二麿に随行して渡米、フィラデルフィア博覧会への出展に尽力。1877年教育博物館長補。1878年パリ万博事務官として渡仏、同年中帰国。1879年教育博物館長。1880年内国勸業博覧会審査官。1881年東京教育博物館長。1884年万国衛生博覧会事務官として渡英。1885年兼文部少書記官、会計局次長心得。1886年会計局次長兼東京教育博物館長兼東京図書館主幹、文部参事官。1889年非職。1890年東京工業学校長。1891年コロンブス世界大博覧会事務官として渡米。1893年帰国。1894年兼農商務書記官・博覧会掛長。1896年兼農商務参事官。1897年兼普通学務局長。1898年実業教育局長、辞職。1899年東京工業学校長。1901年東京高等工業学校長、内国勸業博覧会審査部長。1903年臨時博覧会事務官長。1904年世界大博覧会事務統理として渡米。1905年帰国。1907年東京勸業博覧会審査部長。1914年東京大正博覧会審査部長。1916年辞職、東京高等工業学校名誉教授。1918年死去。</p>		岩倉遣外使節／東京開成学校／田中不二麿／フィラデルフィア博覧会／仏国博覧会／米国百年期博覧会／教育博物館／東京教育博物館／東京図書館／内国勸業博覧会審査官／万国衛生博覧会／東京工業学校／コロンブス世界博覧会／普通学務局／実業教育局／東京高等工業学校／臨時博覧会事務官長／世界大博覧会／東京勸業博覧会／東京大正博覧会		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第9巻』吉川弘文館、1988年、526～527頁(執筆:内田糺)。手島工業教育資金団編『手島精一先生伝』手島工業教育資金団、1929年。「元東京高等学校長手島精一特旨叙位ノ件」(Ref. A11112562100)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第2巻』吉川弘文館、2012年、740頁(執筆:寄田啓夫)。秦郁彦編『日本近現代人物履歴辞典 第2版』東京大学出版会、2013年、377～378頁。
人名を探す	教育家	新島襄	にいじまじょう	<p>1843(天保14)年生。安中藩出身。別名に新島七五三太。父は祐筆新島民治。1856(安政3)年藩中で選抜されて蘭学を学ぶ。1857(安政4)年祐筆補助役、御供徒士。1860(万延元)年軍艦操練所に入る。1864(元治元)年箱館に渡り、米船ベルリン号で上海へ密航。1865(慶応元)年アメリカに渡る。ハーディー家の支援によりフィリップス・アカデミーに入学。1866(慶応2)年アンドーバー神学校付属教会で洗礼。1867(慶応3)年アーモスト大学に入学。1870年アンドーバー神学校に進学。1872年訪米中の岩倉使節団に三等書記官心得として随行。1874年神学校を卒業、宣教師として帰国。1875年同志社英学校を設立。1876年同志社女学校を設立。1884年渡米。1885年帰国。1886年宮城英学校を設立。1887年同志社病院・京都看病婦学校を設立。1888年徳富蘇峰の協力を得て大学設立運動を展開。1890年死去。妻に山本八重。</p>	新島七五三太	岩倉遣外使節／同志社／田中不二麿／山本覚馬／徳富蘇峰		国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』吉川弘文館、1989年、823頁(執筆:杉井六郎)。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典第3巻』吉川弘文館、2013年、5頁(執筆:本井康博)。「安中藩新島七五三太米国へ留学」(Ref.A15070926100)。「大使書類原本在英雑務書類」(Ref.A04017149400)。

人名を探す	教育家	吉益亮	よしますりょう	1857(安政4)年生。江戸出身。父は幕臣吉益正雄。1871年開拓使留学生として岩倉使節団に随行して渡米。1872年眼病を患い帰国。東京麻布の女子小学校・築地の海岸女学校で英語教師を務めた。1886年女子英学教授所を設立。同年死去。		開拓使留学生／米国学 女生徒／吉益正雄		『明治大正人物事典』Ⅱ、日外アソシエーツ、2011年、685～686頁。富田仁編『新訂増補海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、732頁(執筆:楠家重敏・富田仁)。
人名を探す	教育家	渡辺洪基	わたなべひろもと	1847(弘化4)年生。越前藩出身。父は蘭方医渡辺静庵。1862(文久2)年越前府中の立教館に学ぶ。1865(慶応元)年開成所・慶應義塾に学ぶ。1867(慶応3)年医学所句読教授。1868年米沢にて英学校を開く。1869年大学南校に入學、大学少助教。1870年大学中助教、外務大録。1871年文書権正、外務少記。岩倉使節団に二等書記官として随行。1872年帰国。同年外事右局副局長兼考法局長心得。1873年外務二等書記官(イタリア・オーストリア在勤)、一等書記官。1876年帰国。同年外務権大丞・記録局長心得。1877年外務権大書記官、記録局長心得。1878年太政官大書記官・法制局専務。1879年法制局主事。1880年外務大書記官、記録局長。1881年依願免官。1882年元老院議員。1884年工部少輔。1885年東京府知事。1886年帝国大学総長兼法科大学長。1887年兼文官試験局長官。1890年特命全権公使(オーストリア駐節)。1892年帰国。同年衆議院議員。1897年貴族院勅選議員。1900年立憲政友会創立に参加。1901年死去。	渡辺外務大書記官／渡辺権大書記官／渡辺外務少記／渡辺特命全権公使／渡辺公使／渡辺帝国大学総長／渡辺少輔	慶應義塾／大学南校／岩倉遣外使節／工部少輔／帝国大学／法科大学／文官試験局／元老院議員／在澳特命全権公使／立憲政友会／工手学校／錦鶏間祇候／外交志稿／外交志略		我部政男ほか編『勅奏任官履歴原書』上、柏書房、1995年、179～184頁。瀧井一博『渡辺洪基』ミネルヴァ書房、2016年。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第14巻』吉川弘文館、1993年、917～918頁(執筆:三谷博)。
人名を探す	通訳・翻訳家	野口富蔵	のぐちとみぞう	1841(天保12)年生。会津藩出身。父は藩士野口成義。1859(安政6)年蝦夷地警衛に伴い箱館に渡る。1863(文久3)年ごろからハワード・ヴァイスより英語を学ぶ。脱藩。1865(慶応元)年アーネスト・サトウの通訳・秘書となる。1869年サトウの休暇帰国に伴い渡欧。1870年英国留学生となる。1872年工部理事官随行として岩倉使節団に合流、案内・通訳のほか絹製造調査に従事。1873年大蔵省十三等出仕心得。同年帰国。1874年内務省勸業寮十三等出仕、陸軍省第三局分課十一等出仕。1876年大坂砲兵支廠附、工部省電信寮訳文課。1877年京都府五等属官・勸業課勤務。来日したグラント大統領の接待やイザベラ・バードの案内役などを担当。1880年辞職。1881年兵庫五等属官。1882年外事掛。1883年死去。	ワイス／アーネスト・サトウ／岩倉遣外使節／大坂砲兵支廠／電信寮訳文課／グラント／英国留学生／官費留学生／会津藩／青森県士族／陸軍省／京都府／兵庫県／シルブイヤ船測量	野口齊蔵	「元会津藩野口富蔵外一名英国へ留学」(Ref.A15070925600)。萩原延寿『遠い崖 アーネスト・サトウ日記抄』全14巻、朝日新聞社、1998～2001年。國米重行『幕末英国外交官アーネスト・サトウの秘書 野口富蔵伝』歴史春秋社、2013年。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、534頁(執筆:楠家重敏・富田仁)。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』下巻、新人物往来社、2010年、269頁(執筆:武藤清一)。	
人名を探す	旧大名・公家	清水谷公考	しみずだにきんなる	1845(弘化2)年生。京都出身。実父は公卿清水谷公正、後に兄の清水谷実睦の養子となる。1858(安政5)年元服・昇殿。1868年箱館裁判所副総督、箱館裁判所総督、箱館府知事、兼青森口総督。1869年開拓使次官、辞官。同年大阪開成所に入る。1871年岩倉使節団に同行して渡欧、ロシアへ留学(後にドイツに転学)。1875年帰国、家督相続。1882年死去。	清水谷侍従／清水谷正四位／清水谷箱館府知事／清水谷知府事／清水谷旧函館府知事／清水谷元知府事／清水谷総督／清水谷開拓使次官／清水谷殿	箱館裁判所／箱館府知事／箱館戦争／開拓使次官／大阪洋学校／岩倉遣外使節／清水谷公正／清水谷實英		日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、503～504頁。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』上巻、新人物往来社、2010年、653頁(執筆:川口素生)。「清水谷公考書簡集並履歴書」北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。「故清水谷公考へ特別祭料下賜ノ件」公03611100。

人名を探す	旧大名・公家	毛利元敏	もうりもととし	1849(嘉永2)年生。長府藩出身。別名毛利宗五郎、毛利元懋。最高爵位は子爵。実父は長府藩主毛利元運、後に従兄の藩主毛利元周の養子となる。1868年家督相続、長府藩主となる。1869年版籍奉還に伴って豊浦藩知事。1871年廃藩置県に伴って免官。同年岩倉使節団に同行して渡欧、イギリスで留学。1874年帰国。詩歌に長け、宮中御歌所寄人を務める。1908年死去。	毛利宗五郎／毛利元懋／豊浦藩知事	毛利左京亮／豊浦藩／山口藩／毛利子爵／岩倉遣外使節／毛利元周		日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981年、996～997頁。安岡昭男編『幕末維新大人名事典』下巻、新人物往来社、2010年、565頁(執筆:富成博)。富田仁編『新訂増補海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、2005年、673頁(執筆:楠家重敏)。
人名を探す	外国人(ロシア)	セミョーノフ	せみよーのふ	1890-1946年。ザバイカルコサック出身の白系ロシア人。ロシア十月革命直後、「特別満洲里支隊」と称する白軍組織を編成し、ザバイカル州の革命軍と対決した。その活動に着目した日本軍は武器・資金の供給、軍事顧問団の派遣などにより支援した。1918年8月に連合国のシベリア干渉が開始されると、セミョーノフはシベリア白軍の第5軍団長に任命された。当初、コルチャークと対立したが、1919年末のコルチャーク政権崩壊後は陸軍中將に昇進し「極東全軍総司令官」を名乗り、満洲との国境近くのチタに拠点を置いた。1920年秋に極東共和国人民革命軍に敗北し、日本軍の一部軍人の助けで満洲へと逃避した。満洲ではハルビンに潜伏し、在満白系ロシア人を糾合してソ連軍と対決した。満洲ではハルビンに潜伏し、在満白系ロシア人を糾合してソ連軍と対決した。	Semenov	セミョーノフ軍／「セ」軍／チタ政府／斉多政府／知多政府／赤塔政府／ダウリヤ／白系露軍／白党／白党露人	セミオノフ／セミヨノフ／セミヨノフ／セミヨノフ／セミヨノフ／セミヨノフ／セメノフ／セメヨノフ／セメヨノフ／セメーノフ	「セミョーノフ」(原暉之執筆)川端香男理ほか編『新版 ロシアを知る事典』平凡社、2004年、414頁。「ソ連放送第287号 昭和21年9月3日(火)」(アジ歴Ref: C14010427200)。
人名を探す	外国人(ロシア)	ホルヴァート	ほるばーと	1859-1937年。ロシアが満洲において経営していた中東鉄道の現地最高責任者。ロシア帝国下のウクライナの裕福な地主貴族の家庭に生まれた。1885年にニコライ軍事工科大学を卒業し、カフカース・中央アジア・沿海州で鉄道敷設に従事する。1903年に中東鉄道の初代管理局長としてハルビンに赴任し、1918年の退任まで業務を統括した。ロシア革命後の1918年7月、反革命政権を沿海州にあるシベリア鉄道沿線の小都市グロデコヴォに樹立したが、同政権はオムスク政権の傘下に入ることとなり、ホルヴァート自身は中国軍によりハルビンを追われた。その後は北京における白系ロシア人の指導者として活動し、同地で死去。	ホルヴァート将軍／ホルワト将軍／ホルワト中將／ホルワット将軍／ホルワット中將	東清鉄道／東支鉄道／中東鉄道／鉄道長官／哈爾濱ホルワット政府／ホルワット新政府／極東政府樹立計画／西比利亜政府／西伯利亞政府	ホルヴァート／ホルバート／ホルワト／ホルワート／ホルワット	「ホルヴァート」(麻田雅文執筆)貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、190頁。麻田雅文『シベリア出兵近代日本の忘れられた七年戦争』中公新書、2016年、序章。
人名を探す	外国人(ロシア)	ロジェストウエンスキー	ろじえずとうえんすきー	1848年生まれ。ロシア帝国の海軍軍人。サンクト・ペテルブルク出身。17歳で海軍軍人となる。1877年露土戦争に従軍。1885年在ロンドン駐在武官。1894年バルト艦隊に復帰。1902年皇帝ニコライ2世の侍従将官。1903年海軍参謀総長。1904年5月、ロシア太平洋艦隊の増援のため編成された第2太平洋艦隊(通称バルチック艦隊)の司令長官となる。1904年10月海軍中將。同月艦隊を率いてリエパヤ軍港を出航し、200日以上かけて極東に回航。1905年5月27日～28日の日本海海戦で、東郷平八郎率いる日本の連合艦隊に敗北。ロジェストウエンスキー自身は戦闘で負傷し捕虜となる。1906年ロシアに帰国後、海軍参謀総長を退官。軍法会議にかけられるも無罪。1909年没。	ロゼスト	バルチック艦隊／日本海海戦／日露戦争／東郷平八郎／連合艦隊	ロジェストウエンスキー／ロジェストウエンスキー／ロヂェストウエンスキー／ロヂェストウエンスキー／ロヂェストウエンスキー／ロゼストウエンスキー／ロゼストウエンスキー	『新版 ロシアを知る事典』(平凡社、2004年)853頁(執筆:倉持俊一)、598～589頁(執筆:乾一宇)、557頁(執筆:市来俊男) K.サルキソフ著、鈴木康雄訳『もうひとつの日露戦争』(朝日選書、2009年) Kowner, Rotem (2017) "Historical dictionary of the Russo-Japanese War: second edition". Maryland: Rowman & Littlefield, pp458-459
人名を探す	外国人(モンゴル)	凌陞	りょうしょう	1886-1936年。フルンボイル盟出身。ダフル人。フルンボイル副都統・貴福の子。フルンボイル蒙旗中学卒業。黒龍江省公署諮議、東三省保安総司令部顧問などを歴任。満洲国成立後は興安北分省(のち興安北省)の省長となり、満洲里会議などに参加したが、ソ連・モンゴル人民共和国のスパイとの嫌疑で逮捕され、1936年4月に処刑された。		興安北分省／興安北省／興安北省長／満洲里會議		「凌陞」(鈴木仁麗執筆)貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、520頁。

人名を探す	外国人(満洲)	鄭禹	ていう	1885-1945年。福建省閩候出身。満洲国国務総理などを務めた鄭孝胥の次男。日本留学経験があり、満洲国成立後、国務総理秘書官、国都建設局長などを経て、1942年に奉天市長となる。同年8月には満洲国の駐タイ特命全権公使に就任し、1944年には満洲国恩賞局総裁を務めた。1945年4月1日、日本へ向かうため乗船した客船がアメリカ軍の攻撃を受けて沈没し死亡。	鄭公使	鄭孝胥／国務総理秘書官／国都建設局長／奉天市長／駐タイ満洲国公使館／恩賞局		東北人物大辞典編委会編『東北人物大辞典』遼寧人民出版社・遼寧教育出版社、1991年、828頁。
人名を探す	外国人(フィリピン)	バルガス	ばるがす	1890-1980年。フィリピンのコモンウェルス時代(独立準備政府、1935～1942年)、ケソン政権の内閣官房長官を務める。日本軍政下、日本側の要請を受けて1942年1月26日にバルガスを委員長として行政委員会が発足し、その後バルガスは軍政下の行政府長官となる。同時に、日本軍が政党を廃止して大政翼賛的な団体である新比島奉仕団を組織させると、バルガスはその総裁に就任した。1943年10月、日本によりフィリピンの「独立」が承認されると、バルガスは初代駐日大使として日本に赴き、そこで終戦を迎えた。	ホルヘ・ビ・バルガス／ホルヘ・ビー・バルガス／ホルヘビバルガス／ホルヘ、ビバルガス／バルガス長官／バルガス大統領／バルガス大使／JORGE B. VARGAS	行政長官／行政府長官／比島行政府長官／バルガス行政府／新比島建設／新比島奉仕団総裁／比島体育協会会長		鈴木静夫・早瀬晋三編『東南アジアを知るシリーズ フィリピンの事典』同朋舎、1992年、252～253・282頁。
人名を探す	外国人(フィリピン)	ラウレル	らうれる	1891-1959年。イェール大学卒業の法学博士で、東京帝国大学の名誉博士号を有していた。上院議員、最高裁陪審判事、司法長官などを歴任。日本軍政下の1942年1月26日に発足したバルガスを委員長とする行政委員会の委員となる。日本によるフィリピン「独立」承認後、1943年6月20日に日本軍司令官の命により独立準備委員会が組織され、ラウレルが委員長に就任した。同年10月14日にフィリピンは第二フィリピン共和国として独立し、同年11月から日本敗戦までラウレルが大統領を務めた。ラウレルが戦局の悪化に伴い、1945年3月29日にルソン島を脱出して台湾経由で日本に亡命し、奈良で亡命生活を送った。日本敗戦後の1945年8月17日、ラウレルは奈良で第二共和制の終焉を宣言した。その後、巣鴨拘置所に収監され、1946年7月に帰国。対日協力の罪で人民法廷で裁かれたが、恩赦で放免となり、1949年に国民党大統領候補、1951年上院にトップ当選して政界に返り咲き、1953年に発足したマグサイサイ政権を支えた。	ホセ、ラウレル／ホセ、ピー、ラウレル／ホセ・ラウレル／ホセピーラウレル／ホセ、ペー、ラウレル／ホセ、ペ、ラウレル／JOSE P. LAUREL／JOSE P. LAUREL	独立準備委員長／行政府内務部長官／ラウレル政権／フィリピン国大統領／比島共和国大統領／比島大統領／日本国フィリピン国間同盟条約／日比条約		鈴木静夫・早瀬晋三編『東南アジアを知るシリーズ フィリピンの事典』同朋舎、1992年、252～253・363頁。
人名を探す	外国人(ベトナム)	クオン、デ	くおんで	1881-1951年。阮朝の始祖嘉隆帝の直系。革命の志を抱き、越南光復会の総裁に推戴された。1906年にフランス植民地下のベトナムを脱出し、日本に亡命。東京で振武学校に入学したが病気のため退学。1908年には李正誠と名乗って早稲田大学に入学した。1909年10月、日本政府がフランスとの協定に基づき、在日ベトナム人留学生の国外退去命令を出したため中国へ亡命し、その後、タイやヨーロッパを転々とした。1915年5月に再度日本に入国し、林順徳の名で活動した。1939年2月には越南光復会を改組し、越南復国同盟会を立ち上げた。しかし、革命は実現することなく、1951年4月6日に東京で客死した。	プリンス、クオン、デ／Cuong-de／CuongDe／Prince Cuong de／彊祗／林順徳	安南人／安南王族／安南王族本邦亡命	クンデ	西川寛生『ベトナム人名人物事典』暁印書館、2000年、10-11頁。

人名を探す	外国人(ベトナム)	バオダイ	ばおだい	1914-1997年。ベトナム・グエン朝第13代皇帝、在位は1926-1945年。1922年よりフランスで教育を受け、1926年に父である先代の死去に伴い即位。即位後もフランスに滞在し、1932年に帰国した。1945年3月9日の駐仏印日本軍による「仏印処理」により、越南帝国の皇帝となるが国家としての実質はなかったと言われている。日本軍降伏後、八月革命中の1945年8月26日に退位を宣言した。1946年には香港に隠遁していたが、1949年にフランスにより親フランス傀儡国家バオダイ・ベトナムの元首として担ぎ出された。しかし、1955年10月の国民投票によりアメリカの支援を受けたゴー・ディン・ジエムに敗れ、フランスに亡命し、同地で死去。	バオダイ帝	安南国皇帝／越南帝国／ 仏印処理	バオダイ／バオ、ダイ	「バオダイ帝」(桜井由躬雄執筆)、『新版 東南アジアを知る事典』平凡社、2008年)329-330頁。
人名を探す	外国人(タイ)	ウィチット	ういちっと	1892-1962年。正式な姓名はルアン・ウィチットワータカーン。10歳のときに出家したため、正規の高等教育を受けずに英語、フランス語、法学を学び、1918年より外務省に勤務。駐フランス、駐イギリス公使館でも勤務し、外務次官、芸術局局長などを歴任。太平洋戦争期の1942年には、ピブン政権の外務大臣となり、駐日本特命全権大使も務めた。日本敗戦後は戦犯容疑者として逮捕されたが、ピブンの政権復帰に伴い、蔵相・経済相などに就任した。ピブン失脚後のサリット政権でも要職を担ったが、1962年3月に病気のため死去。	ナイ、ウィチット、ウィチットワータカーン／ウィチット、ウィチットワータカーン／ウィチット ウィクワタカーン	タイ国外務大臣／タイ国特命全権大使／泰国外大使	ウィチット	「ウィチットワータカーン、ルアン」(吉川利治執筆)(石井米雄・吉川利治編『東南アジアを知るシリーズ タイの事典』同朋舎、1993年)57～58頁。
人名を探す	外国人(タイ)	ピブン	ぴぶん	1897-1964年。タイの軍人・政治家。本名はブレーク・キッタサンカ。欽賜名はピブーンソクラーム。現在では「ピブーン」と表記されることが多い。陸軍士官学校と参謀学校を卒業後、1924年から1927年まで外国派遣将校としてフランスの砲兵学校に留学。その際、1927年にブラディット(ブリーディー)とともに人民党を結成し、タイの絶対王政打倒を計画した。帰国後の1932年に立憲革命を主導して立憲君主制を樹立し、35歳で初代内閣の国務大臣となる。1936年には国防大臣となり、1938年12月16日に41歳で首相に就任。1939年10月6日には「国家信条」を公布して、国名をシャムからタイに改めた。また、タイ語を国語とする国民形成、汎タイ民族運動などを推し進めた。太平洋戦争開戦後、ピブン政権は日本の駐留を認め、日泰攻守同盟を結び日本軍の物資調達に協力した。しかし、1943年11月の大東亜会議には出席しないなど、戦局の悪化とともに日本と距離を置くようになった。日本敗戦後、ピブンは英印進駐軍により戦犯容疑者としてタイ国内で拘置された。1946年に釈放されると、1948年にクーデターにより政権に復帰したが、1957年には自らがクーデターにより政権の座を追われ、1958年1月にアメリカを経て日本に亡命し、1964年に相模原で死去。	ルアン、ピブーン／ルアン、ピブン、ソクラーム／ルアン、ピブソン、ピブン、ソクラーム／ピー、ピブン、ソクラーム／ピブン、ソクラーム／ピブン、ソクラーム／ピブン、ソクラーム／ピブン、ソクラーム	ピブン政権／ピブン狙撃事件／泰国内閣司令官／立憲革命／日泰攻守同盟／日タイ攻守同盟条約	ピブーン／ピブン／ピブーン	「ピブーンソクラーム」(市川健二郎執筆)(石井米雄・吉川利治編『東南アジアを知るシリーズ タイの事典』同朋舎、1993年)281～282頁。村嶋英治『ピブーン 独立タイ王国の立憲革命』岩波書店、1996年、第8章。
人名を探す	外国人(タイ)	ブラディット	ぶらでいっと	1900-1983年。タイの政治家。一般的には「ブリーディー」と称される。「ルアン・ブラディットマヌータム」は欽賜名。法務省付属法律学校卒業後、21歳でフランスに留学。1927年に帰国し、法務省に勤務。人民党の文官派リーダーとして1932年の立憲革命に参加し、人民党宣言やシャム国臨時統治憲章を起草した。しかし、1933年に起草した国家経済計画案で共産主義者の烙印を押され、一時出国した。帰国後、外務大臣・大蔵大臣などを歴任し、タマサート大学創設にも貢献した。太平洋戦争開戦後の日本進駐期には、抗日組織である自由タイを指揮し、日本敗戦後の1945年8月16日には、摂政の立場でピブン政権により行われた対英米宣戦布告の無効を宣言した。1946年3月24日に首相に就任したが、1947年11月8日の陸軍によるクーデターにより、国外へ亡命。1970年以降、フランスに滞在し、二度とタイの地を踏むことはなかった。	ブラディット外相／ルアン、ブラディット／ルアン、ブラディット／ルアン、ブラディット、マヌータム／ルアン、ブラディットマヌダン／ブリッディ、パノムヨン	人民党／立憲革命		「ブリーディー」(赤木攻執筆)、『新版 東南アジアを知る事典』平凡社、2008年)394頁。村嶋英治『ピブーン 独立タイ王国の立憲革命』岩波書店、1996年、第8章。
人名を探す	外国人(ビルマ)	オンサン	おんさん	1915-1947年。ビルマの軍人・政治家であり、独立運動の指導者。アウンサンという呼称が一般的。ラングーン大学在学中、1936年に学生同盟議長のウー・ヌとともに学生ストライキを指導し、卒業後タキン党に入党し、政治活動を行った。1939年、バモーらとタキン党が合同で反英統一戦線の自由ブロックを結成すると、オンサンが書記長に選出されたが、逮捕を避けるため中国の厦門へ密出国した。同年11月、参謀本部の鈴木敬司大佐の手引きにより来日。対ビルマ謀略を担った「南機関」に参加し、1941年にビルマから脱出させたビルマ人青年30名とともに海南島で軍事訓練を受けて同年末に「ビルマ独立義勇軍」を結成し、日本軍と並行してビルマに侵攻した。1942年8月にビルマ独立義勇軍が改編され、ビルマ防衛軍が成立すると司令官に就任した。日本軍影響下のバモー内閣において国防相を務めたが、1944年8月に地下組織の共産党や人民党と協議の上、抗日戦線(反ファシスト人民自由連盟、通称バサパラ)を	オンサン少将／タキンオンサン／タキン、オンサン	タキン党／ビルマ義勇軍／緬甸義勇軍／ビルマ独立義勇軍／緬甸独立義勇軍／緬甸防衛軍司令官／南機関／緬甸工作／緬甸国民軍／緬甸国民軍／叛乱	オン・サン／オン、サン	「アウンサン」(大野徹・根本敬執筆)、『新版 東南アジアを知る事典』平凡社、2008年)7～8頁。根本敬『アウン・サン 封印された独立ビルマの夢』岩波書店、1996年、第2・3章。

人名を探す	外国人(ビルマ)	テー・モン	てーもん	1891年生。ビルマの政治家。1913年にラングーン大学で文学士の学位を取得し、その後カルカッタ医科大学を卒業。1934年にインド立法議会の議員、インドとビルマが分離された後は下院議員を務めた。その後、商工大臣に就任したが、日本軍の進攻によりイギリス軍がビルマを撤退した際、「メモー治安維持会」の副議長となり、ビルマ独立準備委員会委員を経て大蔵大臣に就任した。日本軍影響下でビルマが「独立」したのち、1943年8月に駐日ビルマ大使として来日した。		ビルマ独立準備委員会／ビルマ国特派大使／在本邦ビルマ国特命全権大使／緬甸国答礼特派大使／日緬協会	テー、モン	アジ歴Ref: A04018727700／B15100396400。
人名を探す	外国人(ビルマ)	バモー	ばもー	1893-1977年。ビルマの政治家。インドとイギリスに留学し、イギリス法廷弁護士資格を取得。1937年4月に英領ビルマ初代首相に就任。1939年2月に下野して、同年9月タキン党と協同して反英運動を展開し、1940年に投獄される。1942年の日本軍侵攻下で脱獄し、同年8月より日本軍政下で行政府長官、翌1943年8月には日本の独立許容により内閣総理大臣に就任した。日本敗戦後、亡命先の日本でイギリスに対する反逆罪容疑で抑留され、1946年8月に釈放され帰国。その後は政治的影響力を失い、議員となることはなかった。	ドクター、バーモ／Ba Maw	英領ビルマ／英領緬甸／タキン党／ビルマ独立運動／緬甸行政府長官／中央行政機関設立準備委員会委員長／ビルマ国内閣総理大臣／大東亜会議	バーモウ／バー・モウ／バー＝モウ／バー、モウ／バーモ	「バモー」(根本敬執筆)『新版東南アジアを知る事典』平凡社、2008年)341頁。
人名を探す	外国人(インド)	ダース	だーす	1870-1925年。ベンガル出身のインド民族運動指導者。1894年にイギリスで弁護士資格を取得し、帰国後カルカッタ高等裁判所に勤務。1917年以降、国民会議派の民族運動に積極的に参加するようになる。しかし、1919年にインド統治法下の州立法参事会への参加をめぐってガンディー派と対立し、モーティールール・ネルーらとスワラージ党を結成した。スワラージとは独立の意。ダースらスワラージ党の成員は、インドの政治目標としてイギリスからの「自治領の地位」獲得を目指した。	シーアール、ダス／首領ダス／印度人ダス／甲谷陀市長ダス／C. R. Das	印度国民運動／印度国民議会／スワラージ党／スワラージスト／印度自治派		「ダース」(内藤雅雄執筆)『南アジアを知る事典』平凡社、2000年(第4版)、425-426頁。
人名を探す	外国人(インド)	スバス・チャンドラ・ボース	すばすちゃんどらぼーす	1897～1945年。インドの政治家、独立運動指導者。ベンガル州の富裕な名家に生まれ、ケンブリッジ大学を卒業。インド高等文官試験に合格したが、ガンディーの提唱したインド政庁への非協力・不服従運動に共鳴して高等文官になることを辞退し、民族運動に参加した。1924年にインド国民会議派カルカッタ支部執行委員となり、カルカッタ市長にも選出された。1928年にはインド独立連盟を結成してインドの完全独立を要求したが、その急進的な傾向はガンディーに受け入れられず、1939年には国民会議派議長をガンディーの圧力で辞任するに至る。太平洋戦争中に拘留されるが1941年に身をくらし、ベルリンに逃れて枢軸側と協力し、イギリスとの闘争を呼びかけた。1943年6月に来日し、同年10月にはシンガポールで自由インド仮政府を樹立して首班となる。インパール作戦ではインド国民軍を率いて日本軍とともに戦ったが歴史的惨敗となった。日本敗戦後の1945年8月18日に東京へ向かう途中、台北で飛行機事故に遭い死去。	Subhas Chandra Bose／チャンドラ・ボース／チャンドラ・ボース	インド国民軍／自由インド仮政府／インパール作戦／印度工作／印度国民会議派／印度人青年訓練実施要綱／大東亜会議／藤原岩市／藤原機関／F機関	スバス・チャンドラ・ボース／スバス、チャンドラ、ボース	「ボース」(長崎暢子執筆)『南アジアを知る事典』平凡社、2000年(第4版)、671頁。
人名を探す	外国人(インド)	ラス・ビハリ・ボース	らすびはりぼーす	1886-1944年。インド民族運動の指導者。1908年頃よりベンガル民族運動を指導し、1912年にインド総督ハーディングに爆弾を投擲するなどした。1915年に来日し、亡命中の孫文と会っている。同年11月にイギリスによって国外退去処分となり、新宿の料理店・中村屋に匿われた。そのため、「中村屋のボース」として知られる。太平洋戦争勃発とともに、インド独立連盟総裁としてインド国民軍結成のために日本に協力した。しかし、主体性を確保しようとするインド国民軍と日本軍との間で苦悩し、1944年1月にインドの独立を見ることなく日本で死去。インド国民軍の指導的地位はスバス・チャンドラ・ボースに引き継がれることとなった。	Las Behary Bose	印度独立連盟／インド国民軍	ラス、ビハリ、ボース／ラス ビハリ、ボース／ラスビハリ、ボース／ラジビハリボース／ボース、ラスビハリ	「ボース」(長崎暢子執筆)『南アジアを知る事典』平凡社、2000年(第4版)、671頁。
人名を探す	外国人(アメリカ)	デロング	でろんぐ	1832～1876年。明治初期の駐日米国公使。ニューヨーク州出身。1850年カリフォルニア州にて郡保安官代理などを務めながら法律を学ぶ。1857年州議会下院議員。1859年州議会上院議員。1863年ヴァージニアにて弁護士業を営む。1869年駐日弁理公使となり、樺太問題をめぐる日本とロシアとの仲介などに従事。1870年駐日特派全権公使。また、ハワイ国全権公使を兼任し、1871年日布修好通商条約の締結に尽力。同年岩倉使節団に同行して一時アメリカへ帰国。再来日後はマリア・ルス号事件や台湾出兵に関与し、外交官ルジャンドルを外務省に紹介するなど、明治初期の日本外交において顧問的立場を務めた。1873年離任。帰国後は弁護士業を再開。1876年死去。	De Long	米国弁理公使／米国特派全権公使／合衆国特派全権公使／布哇国全権公使／柯太境界談判／大日本国布哇国条約／岩倉遣外使節／台湾一件	デロンク／テロンク／テロンク／デ、ロンク／デ、ロンク／デイロンク	宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第2巻、吉川弘文館、2012年、754頁(執筆:保谷徹)。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻、吉川弘文館、1988年、928頁(執筆:秋本益利)。



人名を探す	外国人(スコットランド)	ブラントン	ぶらんとん	<p>リチャード・ヘンリー・ブラントン (Richard Henry Brunton)。1841年2月生。スコットランド・アバディーン出身。明治政府によって最初に雇用されたお雇い外国人。1868年(明治2年8月)に燈台技師として来日。横浜弁天にあった燈明台掛(のち燈明台局)にて勤務し、櫻野崎燈台(紀伊大島東端)・神子元島燈台(下田沖)・江崎燈台(淡路島北端)・伊王島燈台(長崎港口)・佐多岬燈台(鹿児島大隅半島南端)・六連島燈台(下関海峡西口)・犬吠崎燈台(房総半島東端)など30個所の燈台を建設し、また燈台建設の人員養成にも尽力した。ブラントンの手記には、テーボール号(テーボール船)やサンライズ号(ソナリス船)といった燈台補給船による測量の様子や、明治政府との折衝の状況などが詳細に記録されている。1876(明治9)年3月に解雇となり、帰国。1901年4月24日にロンドンの自宅で死去。</p>	<p>アール、ヘンリー、ブラントン          /アールヘンリー、ブラントン          /アールヘンリー          /アールヘンリー          /Brunton</p>	<p>燈明台掛雇／横浜弁天燈明台取立所／燈明台局／日本政府器械方／テーボール船／ソナリス船／燈台頭佐藤與三／燈台寮／燈台並諸標設置關係雜纂／燈台並諸標設置布告書類／御雇英人</p>	ブラントン	<p>「ブラントン」(小風秀雅執筆)丸山雍成・小風秀雅・中村尚史編『日本交通史辞典』吉川弘文館、2003年、797頁。リチャード・H・ブラントン(徳力真太郎訳)『お雇い外人のみた近代日本』講談社学術文庫、1986年。</p>
-------	--------------	-------	-------	--	---	--	-------	--

種別	カテゴリ	基本語	基本語読み	解説	同義語	関連語	表記ゆれ	参考資料
出来事を探す	戦争(満洲)	外蒙事件	がいもうじけん	満洲国とモンゴル人民共和国の国境地域であるハルハ廟付近で1935年1月24日に発生した両国の武力衝突事件。日本側の史料では、同地域を視察していた満洲国側の部隊がモンゴル人民共和国側からの射撃により死傷したことが発端とされている。同事件の善後措置のため、同年6月3日より両国の間で国境問題に関する会議(通称満洲里会議)が開催された。満洲里会議は3回に亘って開催され、国境紛争処理のための代表機関設置、国境線の画定、紛争処理のための委員会設置などが議論されたが合意を得られず、3回目の会議が1936年11月3日に一時中断となった。その後、同年11月25日に日独防共協定が締結されたことにより、満洲里会議は成果もなく終わった。		ハルハ廟／満洲里会議／蒙古人民共和国		満洲国史編纂刊行会『満洲国史 各論』満蒙同胞援護会、1971年、355-356頁。「日、満、「ソ」、外蒙関係」(アジ歴Ref: B13081349100)。
出来事を探す	戦争(南アジア)	インパール作戦	いんぱーるさくせん	太平洋戦争中の日本軍によるインド北東部の都市インパールへの進攻作戦。1942年にビルマに到達した日本軍はインパールへの進攻作戦を計画し、一度は成功の可能性が低いと判断され中止となったが、第15軍司令官・牟田口廉也陸軍中將は再度この計画を独断的に実行した。その目的は、援蒋ルートの遮断、およびイギリス植民地支配下のインド独立運動を支援するというものであった。インパール作戦には、自由インド仮政府のスパス・チャンドラ・ボース指揮下のインド国民軍兵士6000名も参加した。しかし、補給路と制空権の欠如などから歴史的な惨敗を喫し、作戦参加兵力10万人のうち、戦死者3万名・戦傷病者4万名を出した。この失敗の責任を問われ、参加した3師団長全員が罷免されることとなった。	インパール戦／インパール方面第15軍の作戦／ウ号作戦	第15軍／緬甸方面軍／牟田口廉也／河邊正三／佐藤幸徳／宮崎繁三郎／ハ号作戦／9号作戦／8号作戦／スパス・チャンドラ・ボース／インド国民軍／ウィンゲート／コヒマ／マニプール／デマプール	イムパール作戦	「インパール作戦」(執筆者・長谷川啓之)長谷川啓之監修『現代南アジア事典』文真堂、2009年、174~175頁。
出来事を探す	条約・協定(満洲)	水路協定	すいろきょうてい	満洲国とソ連の国境となっている河川における航行権につき、両国間で取り交わされた協定。1934年6月、黒河において満洲国とソ連の間で水路予備会議が開催され、同年8月7日より満洲国哈爾濱航政局黒河分局において本会議が開催された。会議には満洲国側として、賀鴻墀(駐ブラゴウエシチェンスク領事)、堀内竹次郎(哈爾濱航政局総務科長)、黒木剛一(駐満海軍部付)ら、ソ連側としてメテリツァー(アムール船舶局長)らが出席した。8回の会議を経て、1934年9月4日に「満洲帝国哈爾濱航政局及蘇聯邦国立アムール船舶局間ノ航行状態改善ニ関スル協定(通称水路協定)」(全10カ条)および付則「航行章程」(全119カ条)が締結・調印された。その内容は、①黒龍江・ウスリー江・アルグン河・松阿察河・興凱湖(ハンカ湖)における双方の船舶航行は共同で設置する	満洲帝国哈爾濱航政局及蘇聯邦国立アムール船舶局間ノ航行状態改善ニ関スル協定	満蘇水路会議／満蘇水路交渉／松花江航行権／黒竜江、松花江航行権問題／満蘇共同技術委員会／満ソ共同技術委員会／アムール船舶局／哈爾濱航政局／哈爾濱航政局／賀鴻墀／堀内竹次郎／黒木剛一／満洲国水路報／哈爾濱駐満海軍測量隊／哈爾濱海軍測量隊		満洲国史編纂刊行会『満洲国史 各論』満蒙同胞援護会、1971年、877-879頁。
出来事を探す	条約・協定(満洲)	北満鉄道買収	ほくまんてつどうばいしゅう	満洲に敷設されていた北満鉄道の売却をめぐるソ連・満洲国間の交渉。1896年のロシア・清朝間の密約により敷設された中東鉄道は、満洲国の成立に伴いソ連・満洲国の共同運営となり、1933年には北満鉄道と改称された。1933年5月2日、ソ連より駐ソ連日本大使に対し北満鉄道売却が持ちかけられ、日本政府は満洲国を買収の主体とすることを決定し、1933年6月26日より東京においてソ連・満洲国間で同鉄道買収に関する会議が開催された。満洲国側からは駐日公使・丁士源、外交部次長・大橋忠一が、ソ連側からは駐日大使・ユレネフ、北満鉄道副理事長・クズネツォフが出席した。会議は難航したが、1935年1月21日に合意に至り、同年3月23日に協定が調印された。同協定では、売却価格は日本円1億4000万円とされ、さらにソ連側従業員の退職金3000万円を加えた金額を満洲国が負担することとされた。買収後は線路幅が満鉄線と同じものに改められ、満鉄との直通運行が可能となった。また、名称は路線により濱洲線(ハルビン―満洲里間)、濱綏線(ハルビン―綏芬河間)、京濱線(ハルビン―新京間)と改称され、北満鉄道とは呼ばれなくなった。	北鉄買収	蘇、満間鉄道売買交渉／丁士源／大橋忠一／ユレネフ／クズネツォフ／北満鉄道譲渡協定／北満鉄道(東支鉄道)譲渡ニ関スル議定書／北満鉄道(東支鉄道)ニ関スル「ソヴィエト」社会主義共和国聯邦ノ権利ヲ満洲国ニ譲渡スル為ノ満洲国「ソヴィエト」社会主義共和国聯邦間協定／濱洲線／濱綏線／京濱線		満洲国史編纂刊行会『満洲国史 各論』満蒙同胞援護会、1971年、352頁。「北鉄」(塚瀬進執筆)貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、427頁。

出来事を探す	条約・協定(中国)	塘沽停戦協定	たんくーていせんきょうてい	塘沽停戦協定は、1933年5月31日河北省塘沽で日中両軍間に締結された軍事協定である。正式名称はなく、資料や文献によって「塘沽協定」「北支停戦協定」「塘沽停戦協定」などと様々な呼称がある。1933年3月、日本軍は熱河省を占領した。4月上旬には一時的に長城線を越えて南下したが、昭和天皇の意向により撤退した。5月になると、武藤信義関東軍司令官の命令により、再び日本軍は長城線を越えて華北に進攻した。日本軍が一時的に長城線から退いた4月以降、上海で国民政府軍政部政務次長の陳儀らと上海公使館付武官輔佐官の根本博との間で停戦に関する交渉が開始された。再び日本軍が長城線を越えた5月以降、北平政務整理委員会委員長の黄郛が北平に入って日本側の公使館付武官輔佐官(陸軍・永津佐比重、海軍・藤原喜代間)らと接触し、23日には停戦へむけた合意が形成された。5月25日、河北省密雲の日本軍拠点に中国軍(責任者は北平軍事委員会分会長の何応欽)の軍使徐燕謀が派遣され、停戦条件に関する覚え書きが交わされた。5月30日と31日の2日間、河北省塘沽で正式交渉が行われた。日本側代表は関東軍参謀副長の岡村寧次、中国側代表は北平軍事委	塘沽協定／北支停戦協定／日、支停戦協定	黄郛／熊斌／岡村寧次／永津佐比重／土肥原・秦徳純協定／梅津・何応欽協定／満支国境諸懸案解決交渉	『国史大事典』『塘沽協定』の項。 『太平洋戦争への道 3 日中戦争上』3-68頁。 内田尚孝『華北事変の研究』(汲古書院、2006年) 坂野良吉「塘沽停戦協定の多面的性格」(『上智史学』第51号、2006年) 岩谷将「1930年代半ばにおける中国の国内情勢判断と対日戦略」(『戦史研究年報』第13号、2010年) 山口真理子「塘沽停戦協定の研究」
出来事を探す	条約・協定(中国)	梅津・何応欽協定	うめづ・かおうきんきょうてい	梅津・何応欽協定は、1935年6月10日に支那駐屯軍司令官梅津美治郎と北平軍事委員会代理委員長の何応欽との間で結ばれた軍事的・政治的協定である。日中両軍間では1934年の塘沽停戦協定により戦闘が停止され、日中両軍間の非武装地帯として戦区が設定された。1935年になると、戦区の治安維持組織をめぐる問題や孫永勤が率いる抗日ゲリラの掃討、天津租界で発生した親日的新聞社の社長殺害事件など、日中間に多くの懸案が生じ、日本側によって問題にされるようになった。1935年5月下旬、天津に駐屯する支那駐屯軍の酒井隆参謀長が、塘沽停戦協定などを根拠として、中国側の軍隊や排日団体の河北省外への撤退、第51軍長兼河北省主席の于学忠ら排日的人物の罷免、排外排日行為の禁止、といった項目を中国側に要求した。支那駐屯軍や関東軍の軍事力を背景とした要求に対し、中国国民政府は6月10日に要求の受諾を決定した。外交部長の汪兆銘からの打電をうけ、何応欽は日本側に要求の受諾を伝達したが、日本側は要求の追加と覚書への署名を求めて圧力を強めた。こうした圧力に直面した何応欽は6月13日に北平を離れた。7月6日、要求の全面的承認と自主的実行を誓う通知書が、何応欽の代理の鮑文樾の名義で日本側に手交され、「梅津・何応欽協定」が成立した。	梅津何応欽協定／梅津、何応欽協定	北支事件／孫匪事件／宋哲元軍／于学忠／何応欽／鮑文樾／梅津美治郎／酒井隆／対支政策に関する件／土肥原・秦徳純協定	『国史大事典』『梅津・何応欽協定』の項。 『太平洋戦争への道 3 日中戦争上』98-112頁。 内田尚孝『華北事変の研究』(汲古書院、2006年) 岩谷将「1930年代半ばにおける中国の国内情勢判断と対日戦略」(『戦史研究年報』第13号、2010年)

出来事を探す	条約・協定(タイ)	日本国タイ国間同盟条約	にほんこくたいこくかんどうめいじょうやく	日本とタイの間で締結された軍事同盟条約。太平洋戦争開戦後の1941年12月21日にタイ駐箚特命全権大使・坪上貞二と総理大臣兼外務大臣・ピブンの間で調印された。同条約においては、前文で両国が「東亜新秩序」の建設のために協力することが謳われ、相互の主権尊重、第三国との武力紛争に際しての相互援助、単独での休戦・講和の禁止などが明記された。	日タイ同盟条約／日泰同盟条約	日泰同盟／日タイ同盟／日泰攻守同盟／日タイ攻守同盟／坪上貞二／タイ国駐箚特命全権大使／ピブン		「日・タイ同盟条約」(市川健二郎執筆)外務省外交史料館・日本外交史辞典編纂委員会編『新版日本外交史辞典』山川出版社、1992年、782頁。
出来事を探す	条約・協定(フィリピン)	日本国フィリピン国間同盟条約	にほんこくふいりぴんこくかんどうめいじょうやく	日本軍政下にあったフィリピンの「独立」を承認した条約。1943年10月14日にマニラにおいて在フィリピン特命全権大使・村田省蔵と国務大臣・レクトの間で調印され、同年同月20日に公布された。同条約においては、日本がフィリピンの「独立」を承認することが明記されるとともに、相互の主権尊重、両国間の政治・経済・軍事における協力、両国間の「大東亜建設」のための協力などが謳われた。	日比条約／日比同盟条約	新比島奉仕団／カリパビ／新比島建設／フィリピン「独立」／村田省蔵／フィリピン国駐箚特命全権大使／在フィリピン特命全権大使／レクト		「フィリピン軍政」(池端雪浦執筆)外務省外交史料館・日本外交史辞典編纂委員会編『新版日本外交史辞典』山川出版社、1992年、874-875頁。「日本国「フィリピン」国間同盟条約」
出来事を探す	条約・協定(蘭領東インド)	日蘭会商	にちらんかいししょう	1934年から1941年にかけて断続的に行われた日本・オランダ領東インド(蘭領東インド)間の通商交渉。1930年代に日本からオランダ領東インドへの輸出が増大したことから、オランダ東インド政府が対日輸入制限を開始した。日蘭会商は、この貿易制限のための折衝であった。第一次交渉は1934年6月にバタヴィア(現在のジャカルタ)で行われ、一次中断の後、1937年4月に石澤・ハルト協定が結ばれた。1940年9月からは、小林一三、芳澤謙吉を日本側代表として、石油等重要資源確保を目的とする第二次交渉が開始されたが、日本の仏印進駐が行われる中、1941年6月に決裂した。	日蘭印会商／日本蘭領東インド通商会議	蘭領東インド／日蘭通商条約関係／日、蘭通商条約関係／石澤・ハルト協定／小林一三／芳澤謙吉／在バタヴィア蘭印特派使節／蘭印経済使節顧問	日、蘭会商	「日・蘭印会商」(土屋健治執筆)土屋健治・加藤剛・深見純生編『東南アジアを知るシリーズ インドネシアの事典』同朋舎、1991年、311頁。「南進」(後藤乾一執筆)同上、305-306頁。
出来事を探す	条約・協定(ビルマ)	日本国ビルマ国間同盟条約	にほんこくびるまこくどうめいじょうやく	1943年8月1日にラングーンにおいて調印された同盟条約。ビルマ国駐箚特命全権大使・澤田廉三とビルマ国内閣総理大臣・パーモウ(バモー)の間で締結された。本条約では、日本によるビルマの「独立」承認が明記されるとともに、相互の主権尊重、両国間の政治・経済・軍事における協力、両国間の「大東亜建設」のための協力などが謳われた。本条約の調印により、ビルマにおける日本の軍政は「廃止」されることとなり、日本軍影響下に組織されたビルマ防衛軍はビルマ国軍に改称された。しかし、実際には本条約に軍事秘密協定が付随しており、ビルマ国軍は引き続き、日本のビルマ方面軍司令部管轄のビルマ軍事顧問部の指揮下に置かれることとされていた。	日緬同盟条約	ビルマ「独立」／緬甸独立／バモー／澤田廉三／ビルマ国駐箚特命全権大使／日本国緬甸国間軍事秘密協定／附属軍事秘密協定／ビルマ軍事顧問部		「日本国ビルマ国間同盟条約」(アジ歴Ref: A03022888300)。根本敬『アウン・サン 封印された独立ビルマの夢』岩波書店、1996年、119-121頁。